

『 予防接種の参考本：ティム オシアー著 』

目次 邦題「予防接種の本当の意味―大切な人を守るために」

記事一覧 (※ 逆順)

予防接種の本当の意味：その他

接種免除の申請

ワクチンを受けない医者たちと、児童接種への奨励金

湾岸戦争症候群

SARS、たんそ病、鳥インフルエンザ

AIDS (続き)

AIDS

政府機関の実態

HPV 癌ワクチン

プレベナーワクチン

自閉症 (続き)

自閉症 (続き)

自閉症

混合ワクチン

ロタウイルス

水疱瘡

B型肝炎

A型肝炎 つづき

A型肝炎

参考資料 つづき

参考資料 つづき

予防接種の本当の意味：参考資料一覧

インフルエンザのワクチン接種

ヒブワクチン

三日はしか

予防接種の本当の意味：おたふく風邪

麻疹（はしか）ワクチン

乳児の振動死

ステルス ウイルス

三種混合ワクチンの世界状況と、その他の副作用

三種混合と 乳児の突然死

DP三種混合：破傷風

DPT三種混合：百日咳

DPT 三種混合：ジフテリア

予防接種の本当の意味：ポリオ

これまでの内容について

問題のあるワクチンは、本当に回収されているか

副作用反応の実状と、政府機関の対応

乳児が負う負担、突然死（SIDS）

アメリカにおけるワクチン接種の実状：続き

アメリカにおけるワクチン接種の実状

本物の免疫とは、何か

ワクチンの再接種について

「人工的免疫」の問題点

病原菌説は、正しいか？

ワクチンによる身体への負担と危険性

自然な免疫 VS 人工的な免疫

ワクチンには、何が入っているのか？

ワクチンの歴史 Part 2

ワクチンの歴史 Part 1 続き

ワクチンの歴史 Part 1

予防接種の本当の意味：ワクチンとお金

予防接種の本当の意味：はじめに

予防接種の参考本：ティム オシアー著

注：（訳者より）

私自身、専門家でもなく、和訳にも至らないところがあるかとは思いますが。

どうしても判らない名称などは、そのまま英語で残してあります。

英語力のある方は、ぜひ原書をお読みになることをお勧めします。

書名：The Sanctity of Human Blood: Vaccination Is Not Immunization

著者：Tim O'Shea

予防接種の本当の意味：はじめに

大切な人の血液を守るために知っておきたいこと

この本の読み方

時々、この本を読んでから自分の子供に予防接種を受けさせるのをやめる決意をしたという話を聞きます。もちろんそれが危ないというわけではありませんが、この本に載っている情報は、こうした重大な決意をするに必要な、ごく最低限の知識にすぎません。この本は、現在の予防接種の方針のあり方をしっかりと問いただす、最も確かな情報源を簡単に要約したものであり、事実上の参考にといいよりは、肝心な本題を少し脇から見つめ、より深いものまで導くための 広告のようなものとして読むことが正しいと思われま

マーク トゥワインによれば、私達は本を買うとき、それを読む時間を買っているようなつもりになるそうですが、通常この本を丸ごと読み終えるのに 必要な時間は約2時間半ばかり、1晩にテレビに費やす時間よりも少ないものです。大抵の人々は本を買っても数分間ざっと目を通した後は、ほったらかしにしてしまいがちですが、しかしもし皆さんが予防接種に疑問を感じていて、医者や新聞からは教えてもらえない話があるのではと感じているならば、この本はほったらかしにせず、しっかり読んでください。そうすることで、何ヶ月ものリサーチの手間も省け、重要な諸問題点について知ることが出来ますし、もちろん皆さんが家族からのプレッシャーに負けてか、何の疑問も抱かずに群れについていくタイプで、予防接種に対して無条件に賛成し、この国の大半の子供達と同様に、自分の子供の健康をいかさか問題がある手に委ねてしまうつもりなら話は別ですが、例え軽くでもこの問題につ

いて知りたいと思うなら、この本を全部読み終えることは必要最低限のことといえるでしょう。少なくともこれ位の情報なしでは、結果として皆さんがこの本を読み始める前に抱えていた疑問や不安への答えが見つからず、決断を下すことが出来ないまま終わってしまいます。

世界中で起こっている予防接種の実態は、本当はここで書かれているよりも遥かにひどい状態です。皆さんがそれぞれ興味をもたれた問題点について、もっと深く調べたい場合は、この本に記載した参考資料を読んで、より詳しい情報を得てください。

予防接種の現状は、毎年どんどん変わっていきますし、そうしたニュースは一般のメディアでは教えてくれません。そこで、本書でも、号ごとに全体的な手直しを加えています。もし皆さんが、本書より前の号をお読みになったことがあっても、それでは今の時点に対する十分な知識としては足りませんのでご注意ください。

それでは、まず静かな部屋で、邪魔のないよう電話のスイッチを切り、テレビもipodもオフにしてから、表紙から裏表紙まで、一気に読み終えてください。そうすれば、このトピックに関する入門的な知識を得ることが出来るでしょう。

はじめに

1980年から現在にかけて、世間からの要請もないのに、合衆国で子供達に行なわれるワクチン接種の量が3倍にも増えたのは、どうした訳でしょう？そして今や、大人に対してもワクチン接種が企画されているのは、なぜなのでしょう？

予防接種の論争に関しては、少なくとも2つの相反する見解があります。ひとつは、私たちが新聞やテレビ、雑誌などで常に目にする考え方です。もう片方の考え方は、少し掘り下げてみないと見付からないものですが、それでもれっきとして存在する見解です。この本を読みながら多少なりともリサーチを始めると、皆さんはある明らかな事実気付くでしょう：全ての情報が正しいということはありません＝どこかで、誰かが間違った情報を流している、と。

さらに驚くべきことに、こうした予防接種に反対する見解は、健康志向のグループからくるのではなく、一般主流の科学と薬学、そして法律から成り立っているのです。この本はそうしたデータを基にして書かれました。

血液は、金のたまごと言っても良いかもしれませんが。何らかの薬や活性剤で血液を攻撃することを、政治的にも経済的にも体制化していくことで、大もうけをしている人々が昔から絶えないからです。一儲けに成功した例としては、砂糖、アルコール、コーヒー、阿片、大麻、タバコ、コカイン、予防接種、合成エストロゲン、過剰な抗生剤、不必要な薬剤などが挙げられます。

子供の一生における免疫機能の良し悪しは、その子の血液の状態によって決まります。体内の全ての細胞は、生まれてから死ぬまで、血液に浸かっているのですから、血液内の酸素と栄養素の量によって、その人の健康や寿命が左右されますし、化学物質や変形したバクテリアやウイルス、毒性の食べ物、不安定な注射など、外部からの何らかの侵入物は、死亡率へとつながっている—ただ、これだけのことです。

子供はだれでも、危害から守られる権利を持っています。一方で予防接種は危険だと主張している大きな団体があり、もう片方では安全だと主張する大きな団体がある場合には、空っぽの宣伝文句を鵜

呑みにするのではなく、それぞれの主張が根拠とする証拠事実を見ていかなければなりません。

血液内に外部から進入するには、皮膚か肺、もしくは消化器官を通しての、3つの方法しかありませんが、常に変化し、危害のある環境に対応しながら 人類が生き延びていくために、この3つのそれぞれには、独自の防御システムが備えられています。外部の環境から血液を守るために、自然は非常に念入りに人類の発達を促してきてくれました。人の血液の大切さに、自然そのものが気付いているというのに、私たち自身がそれをおろそかに扱って良いものでしょうか？

私たちの世界に、恐るべき戦いの日々が訪れようとしています。子供達の血液を襲う新しい危機から、私たち自身がわが子を守らなければならない時代 が遣ってきたのです。予防接種とは非常に儲かるビジネスであり、政府規定の予防接種のリストに載ろうと、毎年新種のワクチンが開発され、今日では子供が 18歳に至るまでに受けなくてはならない予防接種は、なんと68回にもなってしまった状況です。現代の子供達の健康状態や死亡率には、目に余るものがあります。又、アメリカの成人の伝染病や変種の病気は、急速に増え続けています。

学校の子供達の健康状態は、明らかに悪化しつつあります。Ritalin, prozac, 精神安定剤や吸入器を使う子供達が、いたるところで見られます。歴史上最も多く抗生物質や予防接種を受けているにもかかわらず、今の子供達が以前よりも 肥満で、病気がちで、頭の回転が悪い (Harvard School [4]) のはどうしてでしょう？

CDCによる喘息の発生率の表をみると、1980年の6700万件から2億1300万件までにも増えています。(162, 13)

その内の大多数は子供達で、1200万件以上にもなり、毎年5000人以上が喘息の発作で死亡しています。(Borenstein) [174] 驚くことに、学校内の4人に1人は吸入器を持ち歩いている、というところも在る位です。しかし毎年14億ドルもの資金を喘息の治療に費やしているというのに、大抵のニュースでは喘息をなぞの病気として取り扱うばかりです。

異常を持つ子供達の数は驚くほど多く、アメリカの公立学校の生徒の14%が、何らかの障害のためのプログラムに加わっています。[34]さらに、なんとアメリカの子供達の6人に1人が、神経発達に異常が見られるという有様です！— (Geier- IOM hearings [59])

予防接種を受けないためには

現在、子供に要求される予防接種の数に異論を唱える医者や、薬学研究者が増えつつあります。[336]

又、他のことはともあれ、せめてわが子の 血液だけは政策や金儲けの犠牲にさせたくない、と、予防接種に反対し、免除申請書にサインする親達も多数います。彼らは、人の血液の大切さを尊重し、予防接種に一線を引いたわけです。血液に何かを注入するのが許されるのは、生死がかかっている緊急事態のみであるし、ましてや実験的であったり、不確かなものや 危険な物質を注入するなど、とんでもないことです。[12, 361]

一般の書物の多くには、予防接種は安全で必要なものだと書かれていますし、奇跡的なワクチンの開発によって、いかに現代人が伝染病の魔手から救われたか、といった話を耳にします。又、子供達を伝染病から守るために、いかに予防接種を受けることが大切か、等という話も良く聞きます。さらに、新種の伝染病に対して効くらしい、新種のワクチンのうわさも耳に入ってきます。

予防接種に関する、2つの相反する意見—両方がどちらも正しいことは、ありえません。これらは、単なる薬学上の異なる思想ではなく、生きている私達の体の実際問題に関する、2つの正反対の見解なのです。両方の意見の間には、本当に困惑してしまうほどの大きな狭間があり、両方の支持者が時に感情的に なったり、ヒステリックになりがちで、科学的な根拠が欠けることもしばしばです。

私達の健康と安全を保ち続けるには、予防接種は必要不可欠である
もしくは
予防接種は、子供達を害し、弱くさせてしまう毒物である
以上の、どちらか1つだけが正しいこととなります。

どちらの側にも、多大な誤報やおろそかなデータが溢れているため、見ている人々はしばらくすると、一歩下がってこう考えるようになるでしょう。「ちょっと待った、一体こうした情報の、どれがはっきり正しいといえるだろう？」

控えめな提案

控えめに、ただ自分たちのしていることを知ろうと試みる…私達はまず、ここから始めます。子供達の血液は文字通り、私達の将来へとつながり流れているのですから、それを守る環境は、汚さず大事に保たれるべきです。血液に何らかの異物を注入してしまう前に、次の2項目が確信できなくてはなりません。

1. それが子供の健康に要求されるものであること。
2. 一切の危害の心配が無いこと。

さらに、今日一般に出回っている宣伝的な書物とは違い、この本に載っている全てのデータは、情報源を明らかに記載してあります。

新しい展開

予防接種の到来にともない、法律による予防接種の義務制度が展開されました。法律の成立にあたっては議院に外部からの圧力がかけられますし、ワシントンで一番権力のある圧力団体は製薬会社です。
[51]

これだけでも、ひどい状況ですが…さて、企業の儲けと、私達の子供達の健康の保障—この2つを天秤にかけると、優先されるのはどちらの方でしょうか？どちらか1つを選ばなくてはいけないなら、企業はどちらをとると思いますか？

知っておかなければならないこと

この本を読んでいる親の皆さんは、大抵こう思うでしょう。そんなこと、私が知る必要はないし、医者任せにおけばいいんじゃないかしら。しかし、これには2つの問題があります。

1. 医者の大多数はこの事実を知らない。
2. この事実を知っている医者は、自分の子供に予防接種を受けさせない。 [336]

この章で紹介する見解は、少数派ですが、大きなサポートと十分な参考資料に支えられたものであり、自分の子供を予防接種に連れて行く予定の親なら だれでも学ぶ価値のある考え方です。皆さんが、もし何らかの点に疑問を感じたときは、

1. 参考資料を確認してみる
 2. お金の流れをたどってみる
- 以上の2つを試してみてください。

予防接種という新興宗教

ここで取り上げている、私達の子供達の健康という課題は、とても大切で感情も入りやすいものですし、政治的にも大いに問題になっているものです。子供にとって何が最良かを決めるためには、親の側も、例えそれがどこへ行き着くにしても最後までデータをたどって行く気持ちが必要です。

ところがなぜか、予防接種に関する正しい情報に対して、宗教的妄信に似た激しい拒否をする人がよくいます。Ritalinやエストロゲン、抗生物質に関してはそうでもないのに、予防接種のことになると、人々は盲目的、ヒステリックなほど感情的になってしまうのです。親が自分の子供を予防接種から免除するという、法律でも認められた行為を行ったために、社会福祉に子供を取り上げられてしまったケースが、実際に多々起こっています。

なぜ、こんな大げさなことが起きているのでしょうか？なぜ、予防接種はそこまで大事に扱われているのでしょうか？多大な努力をしてまで、情報を隠したままではなぜなのでしょう？

資金億万ドル単位の企業が関与している、他の事柄と同様に、予防接種に関する情報も非常にコントロールされています。おそらく皆さんが予防接種に関する真実を調べ始めると、いかに意図的に不十分な情報しか得られないようになっていくかに驚いたり、逆に、主にトップの薬学情報に、予防接種に反対する論文が大量にあることに目を見張るでしょう。しばらくしていくうちに、誰を信じればよいのか分からなくなってしまうほどです。人の体が、自分自身で免疫をつけていく能力があるのか、あるいはとてつもなく無力で、薬学の知恵に助けてもらわないと生き残れないのか、そのどちらかです。

薬学的な用語のはなし

それではまず、ワクチン接種と、(免疫をつける) 予防接種、という2つの用語について考えていきましょう。私達は、この2つを同義語として考えるようになっていますが、実は意図的に、人々にそう考えさせるために、莫大な費用がかけられているのです。

では、その違いとはなんなのでしょうか？考えてみてください。免疫とは、体が自力でなんらかに抵抗力をつけることを指しています。それには、その病気にかかるか、少なくともその病気と接触をもつことが必要条件です。対してワクチン接種とは、単に誰かの腕に針を差し込んで、いわゆるワクチンと呼ばれる人工物質を注入することであり、両者はまったく異なる意味を持っているのです。もうこのことを学んだのですから、本当はワクチン接種のことを言っているときに、それを予防接種と呼ぶようなことはやめましょう。

しかし、薬学の世界でも一般の書物でも、やたらに「ワクチン接種」の代わりに「予防接種」という用語を使い、この2つの用語がまるで同じ意味のような振りをしがります。当然、現在の薬学関係

の書物には、「ワクチン接種」という用語は本来正しい用語であるにもかかわらず、ほとんど使われていません。しかし両者には、大きな違いがありますから、これからは、気をつけてみてください。

ワクチンとは何か？

「薄めた、あるいは死んだ微生物を体内に保留すること… 病気の予防、及び治療の為に導入された行為」

—ドーランドの薬学辞典、696ページ [200]

牛からとった—この言葉の由来は、こういう意味です。そのワクチンが、本当に何かの予防や治療に役立つものか、調べてみましょう。

=====
予防接種の本当の意味：ワクチンとお金

ワクチンの話には、どういった類のお金に関係してくるのでしょうか？

1994年、世界中に普及したワクチンは

「. . . 約3億ドルもの稼ぎがある事業である. . . Merck, Paster-Merieux-Connaught, Biovine-Sclavo, Smith-KlineBeecham, Wyeth-Lederle社といった、いろいろな国の大企業が仕切っている。」
というものでした。

—Philip K. Russell, MD [194]

Ft. Detrick米軍付属 薬学研究長

2年後には、それが4億ドルに増え、2003年には6億ドルにもなっています。2005年には、年の世界売り上げは8億ドルにも上りました。[49]

AlphaVax社という、公的資金を使って研究をしてワクチンを開発している、世界でも有数のワクチンの研究会社がありますが、その会社のウェブサイトの予測によれば、

「新種のワクチン技術によって、2010年までに利益は20億ドルにまで上昇するであろう」
とのことです。 [44]

しかし、ブッシュ大統領によるAIDSワクチンのための15億ドルの資金から考えても、2003年にはすでにその予測を超えていたといえます。[81]

もうひとつの見方としては、こんなものもあります。

「意図的なインフレで、子供1人あたりのワクチンの費用は、1975年の\$10から2001年には\$385まで増倍した。」 [Davis, 137]

2020年に新たに7種のワクチンが推奨されると、各子供のワクチンへの出費は\$1225になると予想されています。—(Am Journal of Pub Health) [137]

そしてCDCによると、2004年2月には計画通りに、子供1人あたりの出費は\$606までにも上ったとのこ

とです。[63]

後ほど記載してありますが、すでに2002年以降28種類のワクチンが新たに加わっています。さらに2008年には、成人向けのワクチン接種は2倍にも増えています。

子供1人あたりのワクチンへの出費は以下の通りです。

1975年	\$10
2001年	\$385
2004年	\$606
2009年	\$1225

ワクチンへの世界的な支出額の予想

そんな訳で、世界的なワクチン費用を予想するのは、非常に困難なことになってきました。最近の政府の予想では、2007年以降の様々なデータをもとに、2012年までに23億ドルに達するだろう（[3]GAO Report to Congress）とされています。あるいはForbes誌におけるレーマン兄弟の予想によれば、2011年までに30億ドルに達するだろうとのこと。[4]

実はどちらもかなり低めの予想で、R&D基金や第三世界における実験的使用、途上国支援プログラムや試験的なワクチン使用などを計算に入れてないために、大幅にずれてしまっています。ワクチンの実質の売り上げ高だけでは、ワクチン業社の世界市場における儲け額はわかりません—この総額は、論理的に見積もると、およそ毎年50億ドルにも上ると予想できます。

本当の儲け

しかし、これだけではありません。World Health Organizationの2006年の記録によると次のことが明らかになってきます。

世界中で毎日4300万のワクチン接種が行われている。
年間の接種の回数は16億になる。 [31]

—www.who.int/mediacentre/factsheets/fs231/en/

これは、ワクチンのみの問題ではありません。ワクチンは**乳児の健康推進**プログラム全体を支える基金であり、ゆえに小児科関係者の全員の生活費がこれにかかっているのです。これは、何億ドルものお金の話です。もしある子供1人が予防接種を受けに来なければ、園児の両親にeartubesや抗生物質、その他の薬や治療を加えて売りつけることも出来なくなってしまい、大損です。つまり、人々が予防接種を受けずに育ってしまうと、経済的に大きなダメージが有るといわけです。乳児の健康推進プログラムは、人々を取り決められた薬に頼って生きるように仕向けていくものなのです。もし子供が医者と薬に頼らなくても健康に育っていけるとすると、人々は自分の体自身の自然な回復能力を信じ、自己管理で生きていくようになってしまいますから、今ワクチンで儲けている人達にとって、それは危険な思想といえますね？

私達を間違った方向に誘導したり、不正な制度を作ったり、法律上の尊厳を犯すような行為が最近始まってきていますが、これに対しては上のような事実を踏まえて、考察してみると良いでしょう。

非良心的な企画案

フィラデルフィアで2007年に行なわれたワークショップでは、ポール オフィット及びその他の法律関係者とワクチン製造業者が集結し、現在ほとんどの州にある、ワクチン接種の法律的免除の制度を廃止する方法案を提案しています。その他の提案としてはーワクチン接種を受けてない人に対する公権剥奪、逮捕などの刑罰制度、病院での治療や保健制度を受けられないようにする、などが挙げられました。

これらの提案はあまりにも残酷で、そんなにすぐに国規模で制度化される可能性は少ないでしょう。しかし、ワクチン製造業のトップの面々がこうした提案を本気で思案しているという事実を目の当たりにすると、彼らがどれほど真剣にこうした制度を作りたがっていて、既存の、またはでっぴあげの病気に対し自分達がつくり出した実験的な人工物質を私達の乳児に注射するためには、無理やりな強制手段をもいとわないのだという現実に嫌でも気付かされます。

伝染病予備軍

伝染病予備軍ーこれは、製薬企業が思考思案の上考え出した宣伝文句ですが、ワクチン接種を受けてない人々が伝染病にかかる危険があるので、そのためそうした人々は現代のワクチンがもたらす健康上の恩恵を受けそこねたグループであり、そこで伝染病が氾濫する危険性があるという言い分です。しかし実はその逆で、ワクチン接種を受けた子供達の方こそが免疫機能を系統的に抑圧されていて、世界史上で最も多くのワクチン接種を受けているにもかかわらず、健康状態は最低ですし、どんどん悪化しているーこの本では、繰り返しこのような指摘を掲げています。

ワクチンの歴史 Part 1

歴史 - part 1

天然痘 - ワクチンの誕生

天然痘は、何世紀もの間、非衛生的な場所や貧困層、栄養失調がみられる地域においてみられる深刻な伝染病でした。何千人もの人々が命を落とし、何の治療法もありませんでした。天然痘の伝染の源は、オーソポックス ヴァリオラという菌です。[133] 18世紀の終わりには、この伝染病も自然の成り行きに従って、次第に消滅していき、最も免疫能力の弱い人々のみがかかるものとなっていきました。つまり、群れ全体に免疫がついたわけです。

天然痘は一般に、何か過ちをおかした人に下る天罰として考えられていました。それが、人口過密や不衛生、食べ物や飲料水の汚染、栄養不足に関係するものとは、誰も考えなかったのです。そこで、牛痘とよばれる軽い病気にかかったことのある乳搾りの娘達は、天然痘の免疫がついたことになる、といった迷信が生まれました。

エドワード ジェナー

この人物は、皆さんもご存知かもしれませんが、17世紀末にそうした古い迷信を利用したイギリスの**お医者さん**です。彼は当時9歳の乳搾り娘ーセアラ ネルメスという、牛痘に感染した女の子の肌からできた水痘から、血清を抽出するという実験案を思いつきました。[324, Miller]その上軽薄なこと

に、この比較的軽い病気の牛痘を接種することで、より重い病気である天然痘への免疫をつけることができるという説を唱えて、その伝染した膿汁をまったく健康な人に注射してのけたのです。

ジェナーの説とは、この牛痘という病気が、実は牛にとっての天然痘だという主張でした。ゆえに、牛痘を人間に注射すると、軽い天然痘にかかると同じだということです。その上、この症状は伝染しない、とまで主張しました。

さらにジェナーは、もっとめちゃくちゃなことに、牛痘とは天然痘を予防するものなのではなく、天然痘そのものなのだ、ときっぱり断言したのです！（Enquiry, 1798 [136]）

彼の最初の患者となったジェームス フィップスという8歳の少年に接種した後、ジェナーは自分の注射が生涯を通しての免疫を保障するものである、と主張し続けました。

「．．．牛痘がごく特殊なのは、それにかかったことのある人は、その先ずっと天然痘に伝染する心配がない、という性質があるからだ」

ー ジェナー、1797年、H. B. Andersonに記載 [193]

ちょっと待った！

おそらく文献の99%においては、ジェナーは予防接種を**発見**し、人類を天然痘から救った人物として描かれています、そうした現代文献のお話には載せていないことが幾つかあります。

ーワクチンによる免疫というジェナーの主張に、科学的根拠が一切ないこと。
ー天然痘ワクチンを作り出す過程が、初めからまったく科学的でないこと。
ー不幸にも、ジェナーに説得されて危険も知らずに注射を受け、彼の実験の犠牲となった初期の患者達のひどい負傷率や、死亡率。

事実を調べてみよう

ジェナーと同じ時代に生きた人達の多くは、科学界がいかにかたやすくこの詐欺にだまされてしまったかに驚きを見せています。100年前の著名な外科医、又執筆家、薬学者でもあったウォルター ハドウェン博士 MDによる文を精読すると、そこに書かれているジェナーの姿は、現在の大多数の書物に描かれている磨きのかかったジェナー像ほど、素晴らしいものではありません。ハドウィンは、ジェナーのややうさんくさい点を幾つか指摘しています。[178]

ーまず、ジェナーは外科医ではない。彼はなんの薬学のコースも終了していないし、どこの薬学施設から資格をもらってもいない。現在のイギリス、グロースターシャイアにあるジェナー博物館に行ったら彼の資格証明書を見せてくれるように頼むと、「私達はありません」という答えが返ってくるでしょう。

ージェナーは通ったこともないスコットランドのSt. Andrew大学から、15ポンドで薬学の資格を買った。（Hume, 174ページ [191], 及び Hadwen [178,179]）

ージェナーは自説をたった一人の患者に「試して」みてから、すぐさまその患者が一生天然痘にかからない免疫をもった、と主張した。彼は又、これが全人類に有効なものであるとも主張している。

ちゃんとコントロールされた専門的な試験もなく、何年もの研究があったわけでもなく、たった1人の患者、それだけを根拠にです！

現代の、都合の悪いところは取り除いたバージョンの話には書いてありませんが、その後毎年天然痘接種を受けたジェームス フィップ少年は20歳で死亡し、繰り返しワクチン接種を受けたジェナーの実の息子も21歳で死亡しました。(Baron, vol 2 [225])

ジェナーは何の証拠もなしに、全薬学界をだまして、それ以来ずっと牛痘が天然痘と同じだという、まったく科学的にまちがったでたらめを通さざるを得ない状況をつくってしまったのです。そして、それから自分のワクチンが有効な治療法だというアイデアを、売りつけにかかりました。[179, 291]

大もうけのはじまり

「実験成功」した数年後、ジェナーの議会への繰り返しの懇願が、やっと実りました。彼の天然痘ワクチンを法律で義務化することで、何百という英ポンドが稼げるということに、英国政府が気付いたのです。英国議会は、ジェナーに30000ポンドという、莫大な奨励金を与え、この教育のないペテン師は、たちまち名声高い科学者に成り上がりました。(Wallace [180])

まもなく議会は、このワクチンの安全を検査することもなしに、その接種を大英帝国全領域にわたって義務化する法律を次々と打ち立てました。そして他のヨーロッパ諸国も、すぐさまその真似をし始めたのです。

ワクチン接種を義務化することが、どれだけ経済的に影響するかに気付いた後には、それに反対する声は鎮圧がかかりました。今も昔も、メディアはこうしたどうしようもないワクチンの数々を売って大もうけしようと企む、議会とワクチン企業によって仕切られています。ハドウィンはそのをこう評しています：

「権力者や政府機関、法律化の影響力は非常に強く、又人々は自分で調べてみようとはせずに、たやすく「大半の人が」決めたことに従いたがるものだ」...

「一旦ある不正が専門企業によって受け入れられ、政府によって制度化されると、その後にその過ちを取り除くのは非常に困難になってしまう。」[291]

皆さんも、思い当たることはありませんか？科学的な証拠もない上、予防接種による何百、何千件もの死亡者がでているのにも関わらず、天然痘の予防接種の強制は120年間も続いたのです！そして2002年、アメリカは再び同じ事を始めています。

2つの異なる病気

では、ちょっと後ろに戻って、根本となっている科学面を見てみましょう。だいたいにして、牛痘と天然痘という、これらの2つの病気は、全く違うものなのです。ハドウィンが以下で述べているように、この2つの病気の症状は、明らかに全く異なるものなのです。

「牛痘とは、何か？それは、雌牛の乳房に起こる病気である：これは、雌牛が授乳期で乳が張っているときにしか起きないものであり、さらに体のある一部分にのみにみられる症状で、当然雌の動物のみがかかる病気である。後遺症として潰瘍が崩れるが、伝染性のものではない。

一方、天然痘とは、牛痘とは違い、雌、女性のみがかかる病気ではないし、体のある1部分に限られるものでもない。体には様々な症状が現れ、さらに、とてつもなく伝染性の強い病気である。天然痘と牛痘では、原因も症状も全く異なるものである。

ゆえに、両者には何の類似点も無い。」 [179]

ジェナーの時代にいた、正統な科学者であったベシヤンやハドウィン、ワレスやその他の人々は、天然痘と牛痘の違いに関する最も基本的な事実が、ただの一度も話題にされないことに対して強い批判を表しています。もし免疫学の原則が正しいとするならば、一体どうして、ある病気の病原菌が、全く異なる別の病気に対する免疫となることがあり得るのでしょうか？今も昔も、この疑問に関しては、全く無視の扱いです。

国立健康機関 (National Institutes of Health) の基本データベース [292] を分類しながら調べていくと、牛痘はオーソポックス ヴァクシニアというウイルスが原因であり、対して天然痘はオーソポックス ヴァリオラというウイルスからなることが明らかに指摘されています。この2つのウイルスは、大きさも、遺伝子配列も、性質も全く異なっています。両者は、完全に異なる生物なのです。牛が「天然痘の一種である」牛痘という病気にかかる、というでっちあげも酷いものですが、さらにその病気にかかった人々が天然痘に対して免疫を持つ、などというのは全くの幻想に過ぎません。

次の表を参照してください。

牛痘	天然痘
雌牛のみに発生	人間のみに発生
牛には感染しない	感染性
オーソポックス ヴァクシニア	オーソポックス ヴァリオラ

—マイクロソフト Encarta [155]

現代科学が、この明白な矛盾をどのようなこじつけで注釈しているか見てみましょう。The Columbia Encyclopedia の第6刊 [156] では、次のように書かれています。

牛痘

「…天然痘のウイルスと関連した一種のウイルスにとって引き起こされる牛の感染症。ヴァリオラとも呼ばれ、乳房や乳首に膿んだ出来物がみられることが特徴である。牛痘は接触によって伝染するもので、感染した雌牛の乳絞りをした人間の手に軽症の感染が見られる。そうした人物が天然痘に対して免疫を持っているという事実に促されて、エドワード ジェナーは天然痘の傷口から採取したものをワクチン接種する、という危険なやり方の代わりに、このウイルスを使ってワクチン接種を行うことを試みた。ジェナーの方法は成功をおさめ、天然痘に対する現在のワクチン接種の基盤となった。」

今までの資料の大多数は、天然痘ワクチンにはれっきとした科学的な裏づけがある、と大声で主張してきましたし、一般人のそうした誤った考えは、今も続いています。

天然痘？それとも牛痘？

最新のMSN Encartaの資料には以下のようにあります。

「牛痘—牛のウイルス性の感染症で、化膿性の出来物が特徴。牛痘は、直接の接触により人間にも感染する。牛痘にかかった人間は、それと似ているがより深刻な病気である、天然痘に対して免疫が出来る。この免疫性は、イギリス人の医者、エドワード ジェナーが天然痘の予防注射のために患者に牛痘のウイルスを使用して発見された。」

—牛痘 Cowpox, [155]

危険な迷信

ジェナーの時代以降、天然痘ワクチンが全て、間違ったワクチンから成り立っていたのはなぜでしょうか？これは、薬学が頑固に誤りを続けてきたからです。2002年の天然痘ワクチン、「デュリヴァックス及びアカンピス」でさえ、いまだにオーソポックス ヴァリオラではなく、オーソポックス ヴァクシニアから出来ている状態です。(NEJM, [127]、[138]、キング[98])このような「近い親戚」同士のこじつけが試みられたのは、今までに天然痘のワクチンのみです。しかしこんな「似たようなものだから」という考えが通用するのは迷信の世界だけの話で、免疫において通用するはずがありません。

「認識の扉」(The Doors of Perception) [334]でも分かるように、世間一般の人々の考え方を裏で操作している人間達は、大抵の人々が経済面で大きな影響を持つ諸課題の裏を調べて、そこに隠れた非科学的、非論理的な事実を見つけようとはしないという性質を上手く利用しているのです。彼らは、今のアメリカ人達が、もう本を読んで学ぶことを止めてしまったと、分かっているからです。

最初のワクチンが、どうやって作られたか。

ウォルター ハドウェン博士の章によると、天然痘のワクチンが最初に作られた経過はざっと次のようになります。[185]

1. 3ヶ月の子牛を縛って横たえる。
2. 1インチ程度の刺し傷を30~50回子牛の腹部に作る。
3. 天然痘の膿みをそれぞれの刺し傷にこすり付ける。
4. 子牛が傷口を舐められないように制御具をつけてから、小屋に戻す。
5. 1週間待つ。
6. 天然痘の膿みが発生する。
7. 子牛を再度縛り付ける。
8. それぞれの傷口から乾いた膿みをこそげとって、残った血液や血清、膿みを傷口から取り除く。
9. 取った膿みをるつぼにいれ、グリセリンをつなぎに使うて加熱する。
10. それを混ぜて、毛と肉片を取り除くためにこす。
11. それをチューブに入れて、子牛の純粋な血清—天然痘のワクチンとして売る。

これが、科学的と言えるでしょうか？

1980年代のデュリヴァックス ワクチンの時代にさえ、この子牛の血清方法は代々使われてきました。[342] 9/11の事件以来は、これよりはだいぶ洗練された、脱胎した人間の胎児の細胞に繁殖させるというやり方がとられています[148]、いまだにそれにも、牛痘のワクチン、ヴァクシニアを使用しているありさまです。

忘れられた天然痘ワクチンの実態

天然痘ワクチンは、生まれたときから現在までずっと、危険かつ無意味なものであり続けてきました。次に挙げるのは、1989年までにジェナーおよびその一連が天然痘ワクチンだと主張して、感染した生き物から摂取して使った例です。

感染した馬のひずめ

人間の天然痘に感染した牛の膿み

ホースグリースや牛痘に意図的に感染させた人間から摂取した膿み

天然痘に感染した人間の膿み

— (Baxby[224], An Enquiry[136], [324])

ホースグリースとは、ひずめの感染症の呼び名でした。ジェナーは、感染したひずめに牛痘の菌が含まれていると勝手に想像し、それを根拠に感染した馬のひずめから膿みを取って、健康な子供達に注射をしていたのです。[136]これは、冗談ではなく、本当の話です。

ではジェナーが天然痘の膿みを、どこから取っていたか知っていますか？天然痘にかかって死んだ、人間の死体からです！[295]

150年以上もの間、天然痘ワクチンをどうやって作り出すかという方法には、全く一貫性が見られませんでした。[325]

さらに驚くことに、牛痘はそれ自体、自然な牛の病気ではないことが分かりました。牛痘とは、牧場の人々が汚れた手で乳絞りをしていたことが原因で生まれた乳房部の病気なのです。何かに感染した他の動物を洗った直後や、何か牧場の仕事を終えたままの手で行っていたことが大抵の原因です。かの大切な [ワクチン]のもとになった牛痘の化膿部の血清からは、梅毒や結核がみられることがよくあったようです。(Arning[183]、SAV[324]、[325])

ジェナー式のやり方で、よく使われたのは「腕から腕へ」方式です。(Rains[182]) 1898年に違法になるまで、膿んだ物質を単に死体の腕から取り出して、患者の腕に注射したのです。ちなみに1989年の法律は、人類の間で氾濫していた梅毒と結核の広がりを抑えるために設けられたということです。(Baxby[224])

こうした古い歴史を読んでいくうちに、「ワクチン」の大多数がなんの生産過程もちゃんとした準備も無し、で作られたことが、だんだんと分かってきます。1856年以前には、初期の「天然痘ワクチン」の大半が、人と動物の膿みを勝手に健康な子供達の血に注射する、といったものだったのです！(SAV[325]、whale.to[319])

「種づけ」方式

天然痘ワクチンを新しくひとつまみずつ作るには、前回に作られたワクチンをそれぞれひとつまみずつ使って新しい子牛を感染させます。いわゆる、種づけ作戦です。しかし、徐々にワクチンが[弱く]なっていったため(人間の皮膚のかぶれが軽くなったので)まずワクチンを何種類かの動物を通してから、子牛に接種することになりました。すると人間の皮膚のかぶれが増したので、つまりワクチンが強くなったのだということにされたのです。(WHO-Henderson[226]) その過程の中で、病原菌がいかに人工的に突然変異をとげたか、懸念する人はだれもいなかったのです。

まったく、免疫学者たちがいつも口々に唱えている、オリジナルのワクチンを伝え続けていく「純血統」主義、純粋な物質という思考とやらは、一体どこに行ってしまったのでしょうか。

ワクチンの歴史 Part 1 続き
動物の血液

ここでは、過去200年の間、天然痘ワクチンを裏付けていた科学的根拠の実態を見ていきましょう。人類と動物の血液や体液を、無造作に混合する という行為は、大昔から続いてきた多くの文明の伝統にまったく逆らった暴力行為でした。多くの宗教は、この行為を名指しで禁じています。しかも天然痘は、牛 やその他の動物に自然に発生した病気ではありませんから、人工的に感染させなければなりません。こんなに不注意に異なる生き物を混合して実験された 上に生まれた病気が、あるでしょうか？母なる自然を馬鹿にした、なんとも愚かな行為です。

1875年には、天然痘は手に負えないほど多数の異なる原料と混合し、合体してしまっていましたし、多種類の動物を通して発達してきたため、ワクチンの実態はまったく把握できないありさまでした。与えられた天然痘ワクチンがヤギ痘である場合も、ブタ痘、牛痘、サル痘、ホース グリース、または人間の天然痘である場合もありましたし、もしくはこれらのミックスということもありました。
[325]

ワクチンは本当に効果があったか？独裁的なプロシアン ルーレット

1853年には、議会在大英帝国の全域で、この安全検査もされていないワクチンを義務化する法律をどンドン作り始め、ヨーロッパの他の諸国も、これにならいました。

ハドウェンが、この1世紀前の薬学的なリサーチへの、貴重な扉、きれい事の波でながされてしまわなかった扉を開けてくれます。彼の話は、1800 年代においてヨーロッパで最もワクチンが行われ、その後もダントツで続けた国、プロシアにおける驚くべき実態を教えてくれています。ハドウェンは、メディアが危険に気付いてアクセスを制御してしまう前に、これらの薬学データを調べていたのです。データが物語っている事実とは、次のようなものです。(Hadwen[291], [295])

プロシアは、天然痘ワクチンの義務化法律を、1834年に採用した。その法律とは、全員の乳児がワクチン接種を行い、就学時に再び摂取を行うことを義務付けるものであった。さらに卒業時にもう一度、そして軍隊に入る前にもう一度摂取を行わねばならなかった。健康な男性は、全員が軍隊に入らねばならないことになっていた。ワクチン接種を拒否した人は、力づくで抑えられ、強制的に摂取され、その結果徹底的に、両腕とも10回ずつワクチン接種を強いられた。[291]

—このことから、プロシア人の100%近くが、ジェナーの天然痘ワクチンを受けていたことが分かりますね。では、このワクチン法の35年後に、プロシアはどんな状態になっていたのでしょうか？国中の国民を35年間繰り返し強制的にワクチン接種した結果、なんと100万件の天然痘の流行がみられ、124,978人の死者が出ていたのです！

殺しの免許

では、イギリスはどうでしょうか？

イギリスでは、ジェナー方式の「予防接種」の義務化が1853年に始まりました。(Mc Bean p. 13)
[205]それ以前のイギリスにおける、天然痘による死亡数は、2年ごとに約2000人でした。

この「予防接種」が始まった結果は次の通りです：

年代	死亡数
1857-9	14, 299人
1863-5	20, 059人

これに応じて、議会はより厳しいワクチン接種法を定め、国民の97%が接種を受けました。その結果は、以下の通りです。

年代	死亡率
1868	44, 840人 — Null, part?, p. 23 [220]

全く、なんというワクチンでしょう！

アルフレッド ラッセル ワレスは1800年代のイギリスにおいて、ワクチンの統計がどの様に裏工作されてたか、又誰がどうしてそんなことをしていたのかについて、十分な証拠付けを提供してくれています。UKとヨーロッパ大陸における、天然痘による死亡率とそのワクチンによる死亡率を表にしてくまなく照らし合わせた後、ワレスは天然痘ワクチンについて以下のような結論を出しています。

「. . . 実際には、その病気にかかる率を増やしていた. . . のケースを見ても、同じ結論がでる。つまり、ワクチン接種とは、全くのでたらめであり、たった1人の命も救ったことがない上に、数え切れない種の病気の原因であり、無数の死亡者を出し、無実の人々を無意味に苦しめたものである、ということだ。よってこれは、この無知で偏見に満ちた時代における、最大の過ち、今世紀における最も醜いしみとして、次世代から見なされるであろう。」 — Alfred R. Wallace, Chapter ? 1898 [180]

フィリピンでの大失敗

第1次世界大戦後、天然痘ワクチンは使われずに余っている物が多く出ました。そこで、我が国はどこか他で、コントロールが効く市場を探しました。そうして1917年に合衆国がフィリピンに大規模な天然痘ワクチンの制度を強制化した際には、約25百万件もの接種が行われました。ワクチン接種後、163, 000人のフィリピン人が天然痘にかかり、その内死者は、ワクチン接種開始以前の死亡数の3倍である、75, 339人にも上りました。この数は、ベトナム戦争で戦死したアメリカ人全員の数をも、遙かに超えるものです！アメリカによるこの「予防接種」プログラムは、フィリピンにおいて幾つかの恐ろしい流行感染を生み出しましたが、もちろん日常のニュースでは取り上げられませんでした。

(Anderson, p 69, W.H. Hay, 及び James, p 410 [171, 221, 188])

失敗から学ばないアメリカ

あまり知られていない事実ですが、アメリカが天然痘のワクチン接種を開始した1902年の直後には、イギリスはすでに接種を取りやめています。1907年に、イギリスはやっと止めなければいけないと理解し、天然痘ワクチンの強制を終了しました。オランダでも、同様に1928年、オーストラリアでも1925年に止めています。(Anderson, p 10) [193]

では、アメリカでは止めるまでにどれだけかかったかということ、世界で一番遅い、1971年によく

終わっています。

そして、1970年代には、伝染病は下り坂を迎えました。1950年から1970年まで、アメリカで天然痘にかかったと記録されているケースは、0件です。1970年以降には数件の天然痘感染が見られましたが、それはワクチンを接種した人達のみの中から (!) 感染者が出ています。(Scheibner) [243]

ここで注意しておかなければいけないことは、アメリカでは天然痘の感染者が事実上0件になった後、30年間も続けられたということです。再度言いますが、その30年間における合衆国内での天然痘による死亡者の全件は、ワクチン接種そのものが原因で起こっています。(Mendelsohn, p232, World Book, 1994) [246, 252]

合衆国では1902年に天然痘ワクチン接種が義務化されましたが、1929年には9州を除く全ての州で、義務化がすでに廃止されていたことは余り知られていません。ひどい数の死亡者と、病気の複雑化が、その理由です。(H. B. Anderson, p 2) [193]

現在では、天然痘が自然に発生する件は、どこにもみられません。

迷信で大もうけ

結局のところ、ジェナーが本当にしたこととは、乳搾り娘にまつわる古い迷信を上手く利用して、まったくでたらめの「科学的」視点から自分とイギリス議院の財布をふくらましたという訳です。[157]

牛痘？それとも天然痘？

ここで、牛痘から作られたワクチンを接種した人達が、どうして天然痘にかかって死んだのかと疑問を持った読者の皆さんに拍手喝さい！よく注意深く読まれてきましたね。明らかな答えとしては、そうした死者の全員が、ワクチンが原因で死亡した、ということです。つまり、そのワクチンが天然痘ワクチンと呼ばれていたために、犠牲になった人々はそのワクチンで免疫が出来る、と言われていた病気にかかって死んだのだ、と推測され、天然痘による死亡者という風に数えられた訳です。天然痘ワクチンによる死亡者の数は、歴史上のどのワクチンによる死亡者よりも上回っています。

9/11以降の天然痘事情

9/11事件の後から1993年の初めにかけて、主流のメディアは偽の科学と上手く編集した歴史を組み合わせて、新たなでたらめの話を作り上げました—テロリストが、天然痘を化学兵器として用いて、人口を一掃しようとしている、という内容です。それを受けて、科学ではなく、法律の学位を持った議会のリーダー達が、アメリカ全人口に接種するに十分な量のワクチンを準備することに決めました。そしてワクチン接種を法律化して強行するために、拒否した場合には重い刑罰を定めたのです。(Altman, [360])

この新たなワクチン制度による儲け額は、3億ドルにもなります。しかし、アメリカ国民の健康と安全に比べたら、お金なんて問題じゃない、と思うかも知れませんね？

ところが、お金の問題だったのです。9/11以降の政策は、それまでに世界が見たことの無いほど大繁盛な市場をつくりあげたのですから。

3億の値札がついた、天然痘への危機感がつくりあげられ、人々に伝わりました。[85] 2002年を通して、何も知らない世間一般の人々は、メディアの工作人に踊らされて、狂ったイスラム信者達が大都市をターゲットにして天然痘の生化学兵器を撒き散らして、予防接種をしていない人口の間に山火事のように、天然痘の流行が広がっていくだろう、といううわさに始終脅かされてきたのです。

この、200年前の政策の不気味な再生版においては、科学的な事実は脇に追いやられ、まるでこうした出来事が全く起きなかったかのように振舞われました。

- －天然痘は世界中で1977年には絶滅した。
- －1970年以降における、天然痘による唯一の死亡者達は、全員ワクチン接種が原因で出たものである。
- －天然痘のワクチンは、イギリス、フランス、ドイツ、イタリア及びフィリピンにおいて何千人もの死者を出した。
- －そのワクチンとは、全く異なる病気である、牛の病気（ヴァクシニア）に対するものである。
- －そのワクチンは、天然痘に対する免疫を付けない。
- －歴史上発明されたどのワクチンよりも、天然痘ワクチンが死に追いやった人々の数は上回っている。
- －我が国、そして世界の各国がワクチン接種を止めた理由とは、ワクチンが単に無効力であっただけではなく、それ自体が天然痘発生の原因でありその他深刻な副作用の原因でもあったためである。
- －どの戦争でも、ウイルスやバクテリアを用いた兵器を使用することに成功した例はない。

以上にもかかわらず、FDAやCDC、HHSや国家安全局、その他とつぜんに作られた多くの「国民防衛」各局は、アメリカ人口、280,000,000人全員を「守る」ために十分な量のワクチンを2,3の製薬社が作るということを決定したのです。[326] そうした製薬会社には、フランスのAventis社、イギリスのAcambis社、合衆国のWyeth社が含まれます。

市場と売り上げ

人口の天然痘ワクチン接種は、効果があるはずがなかったのに、2002年の市場の耳が痛くなるような声高な宣伝のせいで、私達は次のことを忘れてしまっていたのです。

- －天然痘は、現在世界のどこにもみられないこと。
- －天然痘ワクチンの企画の全過程が、科学的に検証されていない論、つまりその新しいワクチンを1回接種することで、何の病気に対してもずっと免疫が付くという考えに基づいていること。
- －この「安全保護」策のせいで、多数の人々が死亡、もしくは生涯続く障害を被るであろうこと。

真の友情…？

Acambis社はイギリスにありますし、Aventis社はフランスにあるのに、その両国とも自国での集団の天然痘ワクチン接種を行なってはいません。他のどの国も、自国民の天然痘ワクチン集団接種をしていません。なぜなら、そのワクチンの唯一の市場は、国のメディアが作り上げた危機感におびえた、合衆国のみだったからです。自国の国民の安全を犠牲にして、仲良しの旧友であるアメリカ国民に譲ってくれるとは、イギリスとフランスはなんと無私欲なのでしょうね！いや、なんともうさん臭い

友情です。

計算表が狂ってきたか？

Aventis社が、突然冷凍室に置き忘れていた7千万～9千万回分の天然痘ワクチンを[発見]した、という2002年3月27日の (Washington post [120]) 馬鹿げた話に関して、幾つかの疑問を問いただしてみましよう。まず、7千万か9千万かはっきりしないそうですが、2千万回分って、そんなに簡単に数え間違える数ではありませんよね？それに、この会社が、1年間ではどうも生産しきれない量のワクチンの契約を、400万ドルで結んだ矢先に、突然 自分達の会社の冷凍室で紛失した大量のワクチンをみつけるなんて、なんとも奇妙な偶然だと思いませんか？

大抵のアメリカ国民は、天然痘ワクチンを接種できない

この新しいワクチン提供者達に打撃を与えたのは、CDCによる告知を載せた、リウターの記事です私達の[129]。その告知内容とは、天然痘ワクチンが、

- －H I V患者
- －免疫反応を制御する薬をとっている人
- －湿疹アレルギーのある人

には適していない、というものでした。Journal of Allergy and Clinical Immunology誌での最新研究において、CDCは ワクチン接種による副作用反応には、失明、負傷、そして死亡が挙げられると述べています。では、アメリカ国民のどれ位が該当するのでしょうか？

「湿疹アレルギーを持つ人々の数を考えると、アメリカ人口の半分は、定期的な天然痘ワクチンの接種に適さないといえる。」

－Journal of Allergy and Clinical Immunology、 2002年9月[122]

A I D S患者と、免疫反応を制御する類の薬を使用している人の数も、ワクチン接種に適さない人の枠内で、大きな割合をしめています。では、免疫 反応を制御する類の薬とは、どれ位あるかと言いますとー全部の薬が該当するのです！

さらに、メディアが言い忘れていることですが、合衆国では1971年まで天然痘ワクチン接種が行なわれていたため、現在31才以上のアメリカ人の ほとんどはすでに接種を行なっています。ですから、もしこのワクチンが本当に効果があるならば、これらの人達は新たに摂取する必要はないわけですよね？

ワシントン州にいる政治家達は、好き勝手に決まりを作ることができますが、それが科学と医療に関する分野である時には、医者連の協力なしではその 決まりを実現することは出来ません。例えば2003年1月には、まず50万人の医療関係者が最初に新種の天然痘ワクチンを試用してみるべきだ、というブッシュのまぬけな主張に、最初に選ばれた80件の病院がモルモット役になるのを拒否して反対したために、その案は却下されました。(USA Today [79] Manning) その3つの理由とは、

- －医者達は、天然痘が蔓延するといううわさに真実味を感じなかった。
- －しかし、ワクチン接種による死亡の可能性は、現実の問題として認知している。
- －ワクチン接種による障害を被った場合の、サポート制度の欠如。

といったものでした。

激しい反対

天然痘ワクチン接種に対する反対の声は、国中から激しく沸き起こりました。2003年の2月までに、ブッシュが最初にターゲットとして掲げた50万人の内、ワクチン接種を受けた人は1%にも満たない数でした。接種を拒否した人々には

- －大病院の数々
- －看護婦の連盟
- －AFL-CIO
- －政府の健康関係局の数々
- －警察
- －CDC
- －トミー トムソン自身

－Washington Post 2003年2月24日 [104]

天然痘による心臓発作

最後のとどめを刺したのは、2003年3月に、天然痘ワクチンは心臓疾患には不適であると発見されたことです。関連記事の見出しを幾つか紹介します。

「天然痘ワクチンの接種後、死亡した労働者、2人目」

－Mecker, Associated Press, 2003年3月27日 [101]

「天然痘ワクチンのプログラム、心臓発作による死亡者3人で延滞」

－Washington Post, 2003年3月29日 [102]

では、政策の訂正を提案したのは誰かという、問題の張本人ではありませんか？

「新しい臨時ガイドラインによると、冠状動脈の疾患、心臓のうっ血病、心臓発作や狭心病を患う人はワクチンを接種しないようにと示されている。この訂正は、Health and Human Service（国民健康福祉機関）の秘書、トミー トムソンによって指令された。」

－ (Mecker) [101]

こんな事実を、3億ドルをちゃんと消費した後まで発見しなかったなんて、不自然だと思いませんか？

結局、この後ワクチン接種が受けられるとされたのは、大体国民人口の10%とみて妥当でしょう。もっとも、これは強制的に定期接種を受けさせられている軍隊を除いての数です。（Dr.Nass [37]）

消え去ったなぞの危険性の話

天然痘ワクチンの集団接種プログラムは、2003年10月には取りやめになりました。CDCのレイ ストゥリカスによると、

「多数のプーイングを受けたプログラムは、溺れ死にした」とのことです。[79]

その理由とは、上記にあげた事例に加え、心臓関係の支障からです。というわけで、2年間も強制的なワクチン接種をすると国民を脅迫し、さらに3億ドルも使った後に、彼らはあっさりと全部を却下してしまいました。では、あの天然痘の生化学兵器テロの危険って、どうなったんでしょう？どっかに消え去ってしまったのか、なんでその話はきれいさっぱり消えてしまったのでしょうか？つまり、あの話はワクチンの宣伝道具としての価値はあっても、ワクチンがだめな物と分かった瞬間、テロの危険も一緒に消えちゃった、ということでしょうか？私達が治療法を見つけられなかったから、しょうがないな～と自分から消え去ってくれるなんて、天然痘もお行儀がよいものですね！

成功のあかし

天然痘ワクチンの裏づけとなっている、科学的な流れをみると、参考になるでしょう。研究者達は、どのように試験中のワクチンの効果を確認めるのか、つまり彼ら風に言う「取っていい」予防接種であるかが分かるのか、を見てみましょう。

2002年4月25日付けのNew England Journal of Medicine, p. 1266に、試験の成功を見極める方法が載っていました。天然痘のワクチン接種は、注射ではありません。先端にワクチンを塗った二股の針で、皮膚を15回突き刺して、かさぶたのあとに水泡ができたなら成功したとみなされます。つまり、血液検査や、抗体検査も一切なしに、それだけで決めてしまっているのです。ただの、水泡だけで、です。[134]信じられないことですが、この迷信じみた考えは、ジェナーの時代からつづいているものです。実際、「取っていい=a take」とは、ジェナーが考えた呼び方なのです。ただ、この迷信は少し変化を遂げています。「325」今世紀の初めの頃には、今度はかさぶたが出来たら免疫が付いた、とされて、人々はもう必要ない（かさぶたが出来た）と判断されるまで、数ヶ月ごとに繰り返し繰り返し接種を行わなくてははいけませんでした。

何か矛盾しているな、とお考えでしょう？しかも、これには続きがあります。

専門家の反論

当時、主流となっていた専門家の間でさえ、天然痘ワクチンの集団接種は大きな反対を受けました。2002年10月8日のNew York Times[135]で、ジョン・ホプキンス大学の小児学教授であり、アメリカ小児科学会のジュリア・マックミランはこう述べています。

「このワクチンを大勢に集団接種すると、死亡者が出るであろう。さらに、この病気自体が、1970年代以降には消えてしまったものであることも、頭に入れておかねばならない。存在しない病気を予防するために、人々を死なせる、という考えは理解しがたいものである。」

理解しがたい、というか、狂っているといった方が正しいかもしれません。

天然痘の脅威が、いかに有効なマーケティングの道具であったか、安全性の保証もなく、効果もない上、人口の90%を汚染したワクチンのために3億ドルものお金をワクチン生産会社に払ったことを正当化するために、広報局が用いた十八番であったかは、たやすく見て取ることが出来るでしょう

歴史ーパート2

ラッキーな化学者、パスツール

ジェナーの次に、ワクチンで有名なのはパスツールです。ルイ パスツールは1800年代半ばのフランス人の化学者で、生物の基本的な問題について、最初に考え出したフランス、ドイツ両国の科学者団体の一員でした。その問題とは、

- ー生き物を生かすのは、何か？
- ー病原菌はどこから来るのか？
- ー病原菌と、病気のどちらが先に来るのか？
- ー物体はなぜ、腐り、発酵し、解体するのか？
- ー空气中、または生命体の内部に、こうした作用をもつ何かが存在するのか？

といったものでした。

当時はこうした基本問題に対し、歴史上初めて様々な発見がされていました。色々なアイデアが次々と浮かんできましたが、まだ断片的なものでした。世間の、不確かさを感じている心境を上手く利用して、自分こそがそうした問題について最初に考え出した人であり、全ての課題を理解しているのだと主張した ちゃっかり物が、このパスツールです。彼は、自分が分からない課題については両方の意見の見方をしておき、後で答えが分かった時点で、以前の自筆から部分的に引用して、常に自分が最初に答えを発見していたと主張をすることで知られていました。先に述べたような、まだ実験的な段階のアイデアについて、それら の難点や問題を研究していたのは科学者達だけで、国の法律関係の人々やマスコミは何かが起こっていることは分かっていますが、実際に何が起きているかまでは 把握していませんでした。それでも今も昔も変わらぬもので、彼らは知った振りで押し通してきましたし、また、そうした人々にとってパスツールの様なカメレオン博士は、ちょうど都合のいいフロントマンだったわけです。

こうしてパスツールは、どう身を振れば金儲けにつながるかを嗅ぎ付けると、この新しい教義をもとに、出世をする方法を考え出したのです。

病原菌の説について

では、この病原菌の説とは、実際どんなものなのでしょう？これはごく簡単に言えば、病気はそれぞれ種別ごとに異なるものであり、それぞれの病気 が独自の微小生物によって引き起こされるものだという説です。ゆえに、ここで科学に求められたことは、そうした害のあるそれぞれのばい菌を、患者には害を あたえずに殺す効果を持つ薬やワクチンを作り出すことでした。

もちろん、それが出来れば万事OKなのでしょうが、自然とはそんなに簡単に白黒はっきりつけられるものではありません。第一に、バクテリアやウイルスは、住み着く環境にうるさい生き物であり、だからこそ風邪を引きやすい人や、そうでない人がいる訳です。ペストにかかっても生き延びることが出来た人々がいるのも、このせいですし、だからこそ、毎日病気にかこまれて働いているにも関わらず、まったく病気にかからない医者や看護婦がいるのです。

ディーパック チョプラによると、インフルエンザのウイルスを選別して一団の対象者の粘膜に直接注入した結果、インフルエンザにかかったのはわずか12%であったということです。(Quantum Healing [266])

病気とは、体の機能が衰弱し、栄養不足で正常に動くことが出来なくなったときにかかるものです。ではその原因になるものとは何かと言うと、体の抵抗力の弱さ、不潔な環境、有害な食生活、悪い生活習慣、そして免疫力の弱さが挙げられます。このような状況では、血液に微生物がすみやすい状態になってしまうのです。後にはパスツールさえも、バクテリアやウイルスは、それ自体は病気の原因ではなく、病気にかかった細胞組織をゴミ拾いのようにしてむさぼり食う存在だと、認めています。

この病原菌説が、穴ぼこだらけの頼りない説であることはパスツールも承知していました。しかし、ちょっと調べれば分かるように、彼はPRにおいては凄腕の人物だったのです。彼は機会のあるごとに、頻繁にヨーロッパの控え室で判事や貴族、法律関係者におべっかを使いに行き、その結果、パスツール自身にも理解できていない科学的諸問題に関する、パスツール式現代科学論を、国の有権者達が受け入れていくことになりました。[191]

こうしてパスツールは、ヨーロッパ諸国において、ありとあらゆる称号や名誉を与えられ、至る所で彼の説が出版され、引用されるようになりました。そして、ついに政府のリーダー達の間で集団ワクチン接種の案が立ち上がり、パスツールの栄光は全盛期を迎えます。

パスツールの本当の姿

1923年に出版された、「ベシヤンか、パスツールか？」というユニークな本があります。この本の筆者はE. ダグラス ヒュームといますが、実は女性であり、ただ当時本を出版するために男性名を使用した訳です。この本は今も出版されています。

パスツールは、データを偽造したり、他の科学者の説を盗んで、それを自説として発表することで悪名高い人物でした。彼が発見したとされる有名な諸説も実は「借り物」なのですが、しかしこの人物は「自分が最初に発見した」と主張することにかけては、抜け目のないやり手だったのです。[191]

この本の筆者は、他にもパスツールの裏話をいくつか挙げていますので、興味をもたれた方はさらに詳しく調べてみると良いと思います。

ーパスツールはただの化学者であり、薬学や生理学において、何の学位も取得していない。

ーパスツールは、狂犬病の治療法を見つけた、のではなく狂犬病そのものを作り出した可能性が高いこと。

ーパスツールは動物を使って、おぞましく残酷な実験を何度も行い、それにより解体実験という行為の第一人者になったこと。それ以来、現在に至るまで、数え切れない数の実験用動物が、パスツールの研究所に限らず世界中の薬学研究所において「科学のため」という名のものに無必要で、酷い殺され方をして いるのです。

ー自分の宣伝と、法律で強制された薬やワクチンの売り上げから儲ける、という2つの目的のために、偽りの実験結果や偽のデータの乱用をしていった点からみて、パスツールは人類の救世者ではなく、科学者というよりもむしろ商売人だった、といえること。

ばい菌は、病気の兆候であり、病気の原因ではない。

パスツールの病原菌説に関しては、当時の有力科学者達からも多くの反論がありました。

当時のフランスで、おそらく最も優れた科学者であり、バクテリアの発見者であるアントワーヌ ベ
ションはリール大学の教授でしたが、彼はこう言っ ています。[205], p. 183

「バクテリアは病気の原因となるものではない。ゆえに、血清やワクチンは病気を防ぐことも、治す
ことも出来ない。」

細胞説の筆者である、ルドルフ バーチョウ自身も、これに賛成してこう述べています。

「ばい菌は、細胞組織が病気にかかる原因ではなく、病気にかかった細胞組織を見つけて住み着くも
のだ」
—Man the Unknown [298]

ばい菌は病気の開拓者ではなく、ごみあさりをしているだけ

当時の、そして現代の多くの科学者と同様に、バーチョウが気付いたこととは、細胞組織にばい菌が
いることで、その細胞組織が病気にかかっている印 になるとは言えるが、ばい菌が原因で細胞組織が
病気になったわけではないという事実です。弱ったり、病気になった細胞組織は、微生物にとって
かっこうの ターゲットであり、そこに住み着いて色々行動を広げていくには最適な環境です。だから
とって、細胞組織が弱まる原因が、ばい菌だという考えとは、全く違 う話ですね。

現代の、病原菌説をとなえる医者や筆者達は、根拠になる正しい事実もなしに、宣伝文句をやたらと
唱える信用できない存在です。彼らの唯一の切り札 は、1940年代にアレクサンダー フレミングがペ
ニシリンを発見したことで、「この薬学における偉大な功績をもう一度」、といった感じですが、こ
れを聞 いて一番恥ずかしく思うのは、おそらくフレミング自身でしょう。彼は、一般人がよく使う
「念のために」方針のもとで、抗生物質が迷信的に乱用されて、その 結果スーパーウイルスが発生す
ることを予測していました。[46]

全てのウイルスに効く、万薬とは

健康な人間の生存状態を、「外界から厳重に守られた殺菌カプセルに入り、他の生物が入ってきたら
すべて侵入者とみなして殺してしまう」といったひ どく軍隊的な考え方— これは、現代薬学の碑石
とも言える位、基本とされている考えですが、実際これは科学的には非常に無理のある考え方なの
です。

健康な人間とは、生物圏の宇宙の中で従属しながら生きているものであり、体の内側も外側も、何千
もの微生物にかこまれていて、それらが全て、均衡 を保ちながら共存しているのです。内科の学会に
おいて最も地位のあるケーン シャハニ博士は、通常の人間の大腸は長さ31 bにもなり、400種類も
の様々 な生物を内包していると述べています。[50] 人間のまつげの中で一生を過ごす微生物サイズ
の蜘蛛だっているのです。[350] また、破傷風の項目の 際に述べたように、アレック パートン博
士によると破傷風の菌はごく一般の健康な人間の肌や、さらには口の中にまでいる存在です。[339]

ばい菌が繁殖している状態を、れっきとした科学者達は「病気の原因」ではなく「病気の兆候」とし
て捉えています。まず、病気になって、それからば い菌が繁殖するのです。権力の影響下にある薬学
会では論じられることがないこのごくシンプルな概念こそ、この本のキーポイントとも言える考え方

なのです。

宣伝にのっって

政治とは、いつの時代も変わらぬものです。地球が太陽の周りを旋回していると発見したガリレオをピサの斜塔に閉じ込めたのと同様に、権力者が自分の配下にある者達の思考を支配しようとする—そうした考え方をもっていたからこそ、それを活かしてただ果敢に機を見て行動するパスツールが、本来ならば身に余る役割である、現代の生物薬学会の先駆者という役につくことが出来たわけです。

1995年の「病原菌説— 意図的になされた語報道」という本で、ハワード ヘンケは病原菌説が近代の製薬会社に、次のような機会をあたえたと述べています。

「... 西洋の一般人に、体の病気などに筆頭される全ての不自由は外部からの要因で起こるものだと教え込み、それらから身を守るには、個人の自己管理や体の機能ではダメなのだと、自己管理とは関係なく、科学的な治療こそが病気から守ってくれるのだと信じ込ませること」[299]

つまり全ては、宣伝にかかっているというわけですね？

E. ダグラス ヒュームはこう書いています。

「ワクチンが大衆向けに売り出されることがなければ、パスツールの病原菌説はうやむやの内に消え崩れて行っただろう。」 [191]

乱暴に手を加えてはいけないもの

まず最初から、どんな理由であれ肌を針で刺すこと自体、懸念されるべき行為ですが、手を出してはいけない体の環境である、循環機能に新種のたんぱく質や物質を注入するなど、もってのほかの話です。血液に微生物を注入することについて、私達は余り考えずにきっと科学的で安全だろうと思込みがちですし、主流のメディアや科学誌も、同じ様に根拠もないまま決め込んでしまっていますが、実は注射という行為は、自然にたいするまったくの暴力行為に他なりません。自然が造り出した環境とは、どんな物も、消化器官と呼吸器官という検査室を通らずに血液に混じりこむことがないようにとデザインされたものだからです。こんな自然に反した行為は、どんな口実をしてみても、科学的であるということは出来ません。

注射に反対をしている多数の科学者の内から、幾つか例を挙げてみましょう。

「何らかの生命体を、血液という、もともとそれらが住むべき場所でない環境へ注入することは、ごく深刻な障害を引き起こす可能性がある—ひどく陰鬱で、深刻な状況になってしまうことが考えられるのだ。」—アントワヌ ベシヤン[191]

ウォルター ハドウェンMDは自筆の「戦争と病原菌」という本の中で、1世紀前のボア戦争時における南アフリカの戦場の様子から、戦争自体が原因で死亡した人々の数は86,000人であると示していますが、予防接種率が100%のこの国で、さらに96,000人の人々が病気にかかって死亡しています！[300]

1915年には、英国のトップセラーの薬学誌であるLancet誌に、また別の薬学医が記事を載せています。[301]モンタイス医師は、パスツール式の注射を受けた患者が破傷風にかかったケースを21件し

らべた結果、全ての患者が、その注射が原因で破傷風にかかったという結論を出しています。 モンタイス医師は、「パスツールは新種の病気をつくり出した」と書いています。

パスツールは動物を使った酷い実験や、解剖を始めた人物でもありますが、これらの実験もいまだに有効だという証明はされていません。なぜだかわかりますか？皆さんはペットの猫に、自分の風邪薬を与えたりしますか？いいえ、自然な環境化においては、動物は人間とは異なる病気にかかるようになっているのです。この点を取り違えたことで、私達は無意味でバカ高いだけの、誤った道を進む羽目になってしまいました。動物達に、本来彼らがかかるとは思わなかった病気を疾患させて、その上それが我々人間がかかると同じだという振りをし、その動物の症状を治療する薬を作ったって、それでどうやって人間の病気を治すことが出来るのでしょうか？こうして作り上げられた薬を、私達は人間にも同様に効くに違いないと勝手に思い込んでいるわけです！本当に馬鹿馬鹿しい事です、全ての薬剤の研究、製作発表、そして処方薬として合法と認められるプロセス、これら全般における基盤となっているのが、いまだにこの動物試験なのです。（ハンズ リューエッシュ）[302]

新しい市場の開拓

ワクチンがどの様に、又なぜ現れたかということについて理解する原点ともいえる、重要なコンセプトとは、「歴史上はじめて、医者達はもはや病人だけにターゲットを絞らなくても良くなった」ということです。ワクチンのお陰で、いまや医者達はまったく健康な人々までもが、健康維持のために注射が必要だ、と主張しようとしています。

こんな信じられないほど非科学的な主張を通すためには、なにか犬を手なずける餌の様なものが必要ですね？そこで医者達は、まるで自分達は科学界の支配者であり、現世代における健康の秘密のドアをあける鍵でも発見したかの様に振る舞い、ご親切にも一般市民にありがたく分けてやるんだ、という芝居がかった振りをしています。しかも、料金つきで、です。

=====
ワクチンには、何が入っているのか？

ジェナーとパスツールによる最初のワクチン各種、および最新のワクチン各種でさえも、「弱めた」伝染性の物質を含む、病気にかかった動物（牛、鳥、羊、猿、モルモット、人間、馬）の腐りかけた細胞組織からつくられたものに過ぎません。その他の種類は、毒性の伝性病物質をメタノール防腐剤とアルミニウムで中和した、毒性物質です。（バーネット P）[190]

全てのワクチンは、メタノール防腐剤、アルミニウム、水銀、エチレン グリコールといった物質を含み、これらの物質は助っ人とか、助手物質とか呼ばれています。（Physicians' Desk Reference 2007）[16]

水銀は、毒性の液体であり、致命的な神経障害や、自己免疫機能の破壊を引き起こします。メタノール防腐剤（ホルムアルデヒド）は発がん性の防腐剤です。（PDR p1383 [231]）アルミニウムは強力な神経性の毒物で、アルツハイマー症よりも遙かに酷い障害をもたらすものです。（Sehnert, Widman, Bernard, Blaylock）[199, 195, 166, 262]

ワクチンの活性物質とは、何らかの物質上に作られた病原菌ですが、ここで2007年のPDR誌に挙げられた、現代のワクチンを栽培している物質のリストを見てみましょう。[16]

人間の脱胎児の肺細胞	人間の血液
アフリカのみどり猿の腎臓	ジフテリアの栽培物質
疾患した人間の結合細胞組織	疾患した動物の細胞組織 (猿、ブタ、子牛、カナリヤ、ウサギ、ニワトリ、モルモット)

上に挙げたリストを見て、おぞましくなりませんか？何の科学的根拠もなしに、なぜあんなにやかましく、ワクチン接種が安全だなど、叫ばれているのでしょうか？ひょっとすると、これらは我々人間が持つ、原始的、原始民族的な、死んだ動物の体の一部や体液、残骸などに対する迷信的な興味と関係があるのかも知れません。こうした信仰は人類の始まりから続いてきたものですし、キリスト教や、その他殆どの異教徒の文化においても記録に残っています。これらは、原始的な脳裏に刻み込まれているとも、言えるでしょう。

=====

自然な免疫 VS 人工的な免疫

薬学上の考えでは、患者がワクチン接種という[ちゃんとコントロールされた]状況下において病気の「弱性の」タイプにかかった場合には、自分自身の体内で そのワクチンに対する抗体を生み出して、次からはそうした抗体が敵の顔がどんなだったかを覚えていて、それらが現れたら危険を制するようになるだろうとされています。[360]

しかし、それだけでは収まらない事実があるのです。

抗体、抗原：単純化された考え方

まず第一に、ワクチンの抗体というものが免疫の全てであるかどうか、という点でさえ、皆の意見が一致している訳ではありません。Citizens for Health Care and Freedomのディレクターであるアラン フィリップスなど、数々の研究者が[245]

「自然な免疫とは、体の様々な機能や内臓が関係してできる複雑な現象であり、抗体物質といった、人工的な誘因物で真似できるものではない」

と述べています。そして、これは最近に言われ始めたことではなく、1950年にもアレック バートン博士という英国薬学機関 (British Medical Council) の研究員が、ジフテリアの疾患と抗体の数には何の関連もない、ということを見つけています。[203]この研究員は又、体内の血液に抗体 を作り出す機能をもたない子供達が、伝染病にかかっても他の皆と同様に病気を治していくことが出来る、という事実をも認めています。(Null) [220]

さらに1972年にはジェラルド エーデルマン博士が、「免疫機能とは一般に言われている抗原→抗体という考えでは説明しきれないものだ」、という発見をしてノーベル賞を受けています。エーデルマンは、何世紀もの間に人間として進化を遂げた結果、私達の体には誕生の時点で何百と言う抗体が存在しているという事実を示したのです。([131]p. 17)

自然な免疫機能とは、ワクチンの営業マンが私達に売っている話よりも、遙かに複雑な課題です。後に挙げるAIDSの章でも分かるように、こうした 抗原→抗体といった考えは、自然を大幅に単純化しすぎた見解なのです。しかし、セールスを目的とした広告は常に、「本当のことじゃないからといって、よく 出来た作り話を捨てることはない」という方針で進むものです。病原菌の説と同様、この抗

原→抗体説もまた、パスターの時代から人類の滅亡の日まで、人類の血液に大量のワクチンを注入していく、という商売の必要性を可能にしてくれる、格好の教義だったわけです。

自然な免疫機能

自然な免疫とは、実際にその病気にかかって治癒した後にしか付かないものです。または少なくとも、その病気があふれている環境にいた、という条件が必要です。例えばMerck Manual という本の1098ページには、風疹に関して「. . . 1956年より前の人々は、以前に伝染したことがあるため、免疫があり、風疹にはかからないとされている」と書いてあります。[280]これはつまり、自然な免疫機能です。実際の伝染病の場合には、その微生物は人の鼻孔、喉、そして肺の自然な体内防御の機能を通り過ぎなくてはならず、それで初めて運がよければ血液にまでたどり着くことができます。そうした過程において、血液にたどり着くまでの間に、その微生物がまだ解明されていない幾つもの生化学反応を体内に引き起こし、自然な免疫機能を誘因している可能性は、大いに考えられるのです。

ワクチンを直接血液に注射するという行為は、「血液に突然異生物を混ぜることで人工的に誘発されて出来た抗体が、免疫の全てである」という、まったく根拠のない仮説をもとにしています。しかし、この仮説が間違っていることは、ワクチンによっては再接種しなければいけない、という決まりからも分かることでしょう。様々な研究調査により、ワクチン接種を受けた人々の方が、抗体の数が低くなってしまっているという結果が出されています。(Gunn) [303]

母なる自然に嘘をつく

薄めた、という状態はつまり半死状態にされた、ということです。ワクチンに含まれる伝染病の菌は、非常に薄められていて、99,9%の人々には炎症反応を起こさない程度に弱まっています。しかし、自分の体内に薄められたウイルスや細菌を注入させるという行為は、自然が本来ならば私達に決して許すことのない行いです。それは、血液という希少な聖域を汚してしまったことなのです。もし混入した病原菌が薄められていない状態だったなら、自然の免疫機能は総合的に作動してこうした侵入者を攻撃して追い出していくのですが、私達は自然の免疫機能をだまして、すべての異物を排除するというシステムを作動させないようにしてしまったのです。

ハーバード大学の薬学科の教授である、Dr. リチャード モスコウィッツは、ワクチンが生み出される過程とは、ワクチンをどんどん薄めて免疫機能の反応を引き起こさない程度まで弱めることだと説明しています。ここで問題になるのは、こうして姿を変えられた病原菌は、本来の姿でならば決して自然には入り込めるはずのない程、私達の細胞組織のかなり奥にまで侵入してしまっているという点です。そうした場所に潜んで、これらの病原菌は潜在したアレルゲン（アレルギーを引き起こす原因物質）となっていきます。進度の穏やかなウイルス、といった具合です。そして何かきっかけでこれらのウイルスが活性化すると、例え何年も経っていた場合でも、こうして奥にしまわれていた微生物は体内のどの場所、どの器官にも自由自在に繁殖し、重大な機能障害や混乱を引き起こし、これが原因で重度の伝染病にかかったり、死亡することさえあるのです。ただし、かかるのは、もともとの伝染病ではありません。[192]

だからこそ、誰もワクチンが原因で死亡したと証明することが出来ないわけで、これは非常に都合なことです。

ワクチン接種という行為は、人類の進化の道を大きく踏み外した行為です。自然は百万年もの年月をかけて、こうした侵入異物に炎症反応をおこして戦うという免疫機能を生み出しました。これは、選

別して戦うという、生き残るための機能です。それをこの1世紀の間に、医者達が突然、こうした何世紀もつづいてきた自然の知恵を無視して当たり前、という様に振舞っていて良いものでしょうか？

ワクチンによる身体への負担と危険性 ウイルスという負担

下記には、ワクチンの製造過程で使われている毒性の原材料に関する諸問題を挙げていますが、ここで忘れてはいけないことは、例えそうした毒性の物質をワクチンからすべて取り除いたとしても、ワクチン自体がある限り、最も重大な危険は消えないということです。つまり、ウイルスを負担するという危険です。ワクチン接種によって人の血液内に注入された、すべての異質なウイルスや微生物の合計量が、その人のウイルス負担量になるのです。

皆さんもご存知かと思いますが、ウイルスは媒体となる細胞のDNAとうまく結合する、という厄介な能力を持っています。私達人類の総合的なDNAは、人間ゲノムと呼ばれています。(Bishop) [214] 我々の子供達の血液に、何年もの間、変形した未知の異物をどんどん混ぜていくことは、この人間ゲノムを確実に変形させてしまうでしょう。我々の生物種におけるこうした長期的な変化に関しては、いまだ研究がされていない未知の領域となります。

現在アメリカの就学児は68種のワクチンを受けることになっていますが、これからもワクチンの数は果てしなく増えていく様子です。何十種ものワクチンを、いとも容易にリストに付け加えてしまう計画が、提案されています。それでは、そうしたワクチンをFDAが承認する際に、この無数の病原菌という負担が発達中の免疫機能に及ぼす大きな危険性というものが考慮されているかと言うと、驚くことに、全く考えられていないのです！CDCも、FDAも、NIHでさえ、この危険性についてまったく無関心です。さらに、科学的な面にも問題があります。子供が予防接種の日に、接種を受けられなかった場合、通常どのような処置が取られるのでしょうか？大抵の場合、次の予防接種日まで待ちますが、それでどうするかというと、前の分と合わせた2回分のワクチン接種を、1回で全部受けさせてしまいます！多いときには、なんと14種のワクチンをいっぺんに受けさせられることもあります。こんな無鉄砲で、非科学的な行為が普通に行われていて、それには何の安全性の試験もされていないという状況です。

下記には、毎年16億回分もの注射が、どの様にしてヒトの血液に刺されているかを示してみました。ワクチンの営業社は、ウイルスの負担によるDNAの長期的な変形の問題については、まったく無視をしています。PDRで、それぞれのワクチンについて見てみると、本当にショックなことですが、それぞれのワクチンの発がん性について、何の検査もしていない、と生産者側がはっきりと述べているのです。つまり、各種のワクチンが、癌の原因になるかどうか、確かには分からない、と作った側の彼らが言い放っているわけです！[16]

不死の血統細胞

年月をこえてワクチンの流れを保つためになされている、同じ血液細胞を繰り返してつなげていく、不滅の血統の使用は、ジェナーの時代からずっとワクチン産業の間で続けられている行為ですが、これに対しては厳しい非難の声が多数上がっています。(Thyagarajan[323]) 不死の血統細胞を作り出すことと、癌の筋腫の発生との関連性の可能性が、明らかになっているのです。(McReardon[128])

テッド コレン[173]はワクチンに関する優れた記事をかいていますが、その中でアメリカのワクチン

接種が2倍になった1960年から1980年の間に、子供の癌死亡率が急増したことを指摘しています。

ワクチン接種が始まった1902年以降のアメリカにおける癌死亡率の変化は、つぎの表でわかります。
[195, 338]

3倍の恐怖

ワクチンに対する拒否反応は、3種類に分けられます。

即時の反応— 接種の2, 3日以内に、乳児が死亡したり、悪い症状がでるなどの場合。

遅れて出てくる反応、および潜在的な反応— 例えばワクチンに含まれる毒性物質が脳に住み着き、神経性の病気の原因となるが、数年後に初めて症状がでるような場合。

ゲノムの破壊— ワクチンが含む異物が我々のDNAを変形させ、それが原因で人が癌になったり、さらに悪いことには、人間ゲノムという我々の種のDNAを一概に弱まらせるといった反応。

この3種の拒否反応の内、3番目の反応がダントツに悪性の反応と言えます。ヴィエラはこれをコピー機の例を使って表現しています。毎年16億回分の注射が子供達のDNAに打たれている、ということは、コピーしたものを又コピーし、それをさらにコピーしていく様なものです。つまり、人間ゲノムを薄めているのです。こうした行為は、私達人間という種に極めて重大な影響を与えます。

(Scheibner) [255]

=====
病原菌説は、正しいか？

ゴミとネズミの関係

もう1つの問題としては、病原菌説自体が間違いであり、そもそもワクチンに含まれているばい菌が、その対象となる病気の原因ではない、ということです。ネズミが原因でゴミがあるのではなく、ゴミが放置されていた結果としてネズミがわいてきた、という原理と一緒に (Jensen, [240]) 病原菌というばい菌が原因で病気になるわけではありません。こうしたばい菌は、ただ住み心地の良い場所を探して集まってくるだけです。(Carrel [298]) つまり、ゴミ屋さんのような存在です。こうした病原菌という微生物は、病気になっている印ではあっても、病気の原因ではないのです。

この事実は、最後にはパスターでさえ認めています。彼がそれまで大事に伝えてきた病原菌説をくつがえして、死の床で唱えた文句は、今までで最も頻りに引用されているセリフの1つです。

「全ては占領地帯の質にかかっている—病原菌など何でもない。」 [191]

そうです、お金儲けのために、私達は次のような誤ったことを正当として受け入れようとしているのです。

1. 特定の病原菌が原因で、特定の病気にかかる。

2. そこで病気の原因でもないのにその病原菌の薄めたものを、直接皆さんの血液に注射して、その病気に対して免疫をつけたことにする。

合衆国においては、あるワクチンの集団接種が認可される前に、長期的に検査を行なうことはほとんどありません。例えば風疹ワクチンはたった28日間の検査をただけで認可されましたし、

(Through a Glass [116]) 水疱瘡ワクチンはたった42日間のトライアル試験をしたのみで認可されています。[88] しかも、ワクチンの長期的な効果に関しても、一切フォローアップをしなくてもOKなのです。だからこそ、ワクチンは常に変更されたり新種のものを取り替えられたりしているわけで、子供達は丁度良い実験用 モルモットといった扱いです。

「人工的免疫」の問題点

免疫：自然 VS. 人工

ここで頭においておくべき点は、子供が病気にかかると、その子の体で免疫機能システムが新しく構成されて、起動し始めるということです。数日間、ある程度具合が悪くなるかもしれませんが、下記にある表でも分かるように、大抵の場合は病気が治ります。強い薬やワクチンに邪魔をされたり、事を複雑化されることなく、体が独自の力でその病気を退治する方法を見つけると、将来において一生の間、その子はその特定の病気にはかからなくなります。その子の体は、その病気に対しての退治の仕方—免疫を身に付けたことになるわけです。その様に、薬を使わずに体が独自で退治法を覚えこむと、自然な免疫がつくことになります。すると体は、有害な環境から身を守るための、真新しく、永遠に使える武器を手に入れます。だからこそ、ワクチン接種を受けていない子供達は、一生の間に水疱瘡に1回しかかからないのです。体が自力で武器を増やしていけばいくほど、その分大人になったときに悪い環境や病気から身を守っていける能力が備わっていることになる訳です。

自然な免疫は、母親から胎児にも受け継がれます。

自然な免疫こそ、唯一のほんとうの免疫と言えます。そしてこの免疫とは、病気に直接関わりあった(疾患した)後にのみ、つくものです。

これに対し、人工的な免疫とは、その病気の症状を薬やワクチンを利用して人工的に抑えたという意味です。咳や鼻水が出るのは、体が侵入者を撃退するお掃除システムですから、鼻づまりの薬や咳止め、炎症止めの薬を使うと外部からの侵入物を本来ならば行けるはずのない体の奥底にまで通してしまうことになります。咳や鼻づまりが病気そのものだと偽って主張する医者たちは、次の点を見過ごしています。

「... こうした抑圧は、体が排泄する必要があるものを外に出せないように邪魔をしてしまう...」 (James, p42) [188]

ワクチンによって、人工的な病原菌ウイルスが血液に注入されます。仮説としては、この薄められたウイルスに対して体が抗体を生み出し、こうして出来た抗体が、その後一生の間その病原菌ウイルスが侵入してきた際にはそれを発見して退治してくれる、というものです。

しかし、このような免疫とは、人工的であり、つまり実際には不適切だと言えます。なぜなら、ワクチンが体に与えている免疫まがいの機能とは、自然に発生する病気に対しての免疫ではなく、人工的な、科学者が研究所で作りに上げた注射用の病気に効くだけのものだからです。

ワクチンは、何百回分、何万回分比べてみても、皆同じ中身ですが、人間の免疫機能や、病気のかかり方は、1人1人違います。この点からも、問題があると言えますね。

さらに、人工的な免疫は、母から胎児へと受け継がれることはありません。

人工的な免疫は、一時的なものです。

人工的な免疫は、後に再度同じ病気にかかるリスクが非常に大きいものです。科学的にも意味不明な、再接種 (booster shots) が行なわれているのはこの理由からです。(Murphy[204])

ワクチンによる人工的な免疫は、現代において、成人になってからももとの病気が異常な形で発症する、という現象を引き起こしています。これは、成人の風疹の様に、遙かに深刻で危険な症状です。

新種の伝染病をつくり出した「集団接種」

こうした異常な形の伝染病が、もともとの伝染病にかかって自然な免疫がついている人々に与える危険性については、誰も話そうとしていません。集団接種が始まる以前にも、程度の違いはありますが、人間は全ての伝染病に対して集団で免疫を付けていました。しかしこれは、200,000年もの時間をかけて、です。少し考えて見ましょう。ベビーブーム時代に生まれ、子供の時に風疹にかかって、一生の免疫をつけた人が、この人工的な新種の異常な成人型の風疹にも免疫があるかということ、そうではありません。どうしてでしょうか？風疹という伝染病は何世紀ものあいだ存在してきた病気ですが、この異常型の風疹が生まれてからは、まだ30年も経っていないからです。ちょうど、抗生物質の氾濫がスーパーウイルスを作り出した様に、ワクチン接種も新しい伝染病を作り出しているのです。これを、進化と呼べるのでしょうか？

ワクチンの再接種について

ワクチンの再接種 (効果の促進用)

最初のワクチンが免疫を付けてくれる筈なのに、だったらなぜ子供達は1年後にもう1度同じ接種をしなければいけないのでしょうか？では、1回目のは何だったのでしょうか？実をいうと、どのワクチンに関しても、ワクチンの効能促進用の再接種が効果のあるものだ、と証明する研究は、いまだかつてされたことがありません。

もう1つの疑問があります。MMRや3種混合、B型肝炎、Hインフルエンザなどの数回にわたる摂取は、毎回同じ物を接種します。ワクチンの生産者側は、再接種のワクチンは1年ほどで効果がなくなってしまうと発表していますが、それなら、最後に受けたワクチンが子供に一生の間続く免疫を付けるという研究成果は、あるのでしょうか？そんなものは、どこにもありません。大体どうして、最後から2番目のワクチン接種は1年で効果が消えて、最後に受けたワクチン接種だけ、特別に一生の間効果が続くなんてことがあるのでしょうか？ここが重要な点です。生産者は、ワクチンによって一生の間免疫が付くとは、決して言っていません。PDRを通した生産者側の主張をみても、ワクチンの効力は限られた時間で消える、とはっきりしています。一生続く、などとうその宣伝をしているのは、薬を売る担当の部門—会社側、宣伝担当の方です。

本物の免疫とは、何か
全てが、自分自身に

免疫とは、体の分子のIDを成立させ保っていくための身体能力です（James p105 [188]）つまり、あなたの細胞は全て、あなたのIDを持っていることとなります。それら全てが、同じDNAから成り立っているのですから。この、細胞の統一性を促すものは全て、健康を促すものです。逆に、体が細胞のIDを保つことを邪魔するものは何でも、病気を促すものです。この、ごく簡単な基準が分かれば、ワクチン接種による人工的な免疫がなぜ長期的な効果を持つことが出来ないか、説明が付くでしょう。

ワクチンを作り出すプロセスの全ては、ある伝染病の菌をどんどん弱めていく、といったものであり、人の血液に注入した際に、体がそのワクチンに反応しない程度まで、その菌は薄められていきます。これはつまり、その菌が非常に弱められているので、体が異物として感知することが出来ない位だということです。ですから、皆さんの体の免疫機能は、いつもどおり異性物のたんぱく質に反応するやり方では、こうしたワクチンに反応をしません。体が、だまされてしまったわけです。

普通の生態環境の中では、このような出来事は起こり得ないことであり、これはまったく不自然な出来事です。[192]

これに対し、自然に発する伝染病は薄められていないので、体の免疫機能システムを順番に起動させていくのに十分な強さをもっています。

他人に自転車の乗り方をおしえたり、レーザー写真を2Dで見たりすることを教えたりは出来ませんよね？もちろん説明することは出来るでしょうが、実際にレーザー写真が見えるようになったり、動いている自転車のバランスを取るにはどう体を動かせばいいのかを学ぶのは、1人1人が自分で努力してはじめて身に付くものです。

免疫も、これと同じです。体に、無理やり押し付けることは出来ないのです。体が実際に、侵入した異物を感知してそれと戦いを挑み、自分の免疫能力をどう組み合わせればそうした異物を感知し、取り囲んでやっつけることが出来るかを、自力で学んでいかなければいけませんし、そうする機会が与えられる必要があります。これには時間も労力も必要ですし、病気にかかる場合の時もあるでしょう。こうした過程は、現代科学の理解をはるかに超えたものです。しかしこれで得られる免疫とは、一生の間続くものですし、これこそが唯一、本物の免疫なのです。

=====

アメリカにおけるワクチン接種の実状
子供の時に受けるワクチン接種は何回？

9/11事件以前には、接種が義務化されているワクチンの数はわりと簡単に分かるようになっていて、主にCDCのウェブサイトに掲載しているワクチン接種の予定表を見ればよかったです。[15]しかし、9/11事件以降には、新種のワクチンの追加や旧型ワクチンの削除など、驚くほど多様な変更が数ヶ月ごとに行なわれるようになりました。さらにもっと混乱させようと、最近では予定表を1つだけではなく、年齢ごとに分けてわかりにくくしています。以前には、未成年に推奨される予防接種予定表と呼ばれる表があるだけで、誕生から18歳までが対象とされていましたが、それが2008年には突然、子供向けの予定表、青年期の予定表、追加接種の予定表、成人向けの予定表やらがまるで20年前からずっとといったような顔をしてCDCのサイトに並んでいるのです。これらの表は非常に読みにくく、例外

の特記や重複事項が沢山あります。こうした新しい掲示の仕方は主に、子供に接種が義務化されているワクチンの数が急激に 増え続けているという事実をわかりにくくごまかすために考え出されたでしょう。そして、成人用も多数追加されていることも、ごまかさなければいけませんし ね？

次のページには、伝染病防止センターによる、2009年度の予定表を載せていますが、そこにはなんと 68回ものワクチン接種が、子供時代に受ける 接種として推奨されています。[15]

2009年度 予防接種予定表

誕生時：	B型肝炎	1 (ワクチンの数)
1-2ヶ月	B型肝炎	1
2ヶ月	3種混合、ポリオ、PCV、Rotateq	7
4ヶ月	3種混合、ポリオ、HiB、Rotateq	7
6ヶ月	3種混合、HiB、Rotateq	6
6ヶ月-18歳	インフルエンザ (毎年)	1
6ヶ月-18歳	B型肝炎、ポリオ	2
12ヶ月-15ヶ月	MMR HiB、PCV、Varicella	6
12ヶ月-23ヶ月	A型肝炎 (2回)	2
15ヶ月-18ヶ月	3種混合	3
4歳-6歳	三種混合、MMR、ポリオ、Varicella	8
11歳-12歳	破傷風 ジフテリア 百日咳 HPV (3回分) MCV4	7

ワクチン接種 計 68回

資料：伝染病防止センター www.cdc.gov [15]

この予定表は、2007年初めにもっと小刻みなスケジュールになり、さらに9/11の事件の後にはより頻繁に、時には2, 3ヶ月ごとに何らかの変更が付け加えられています。こうした追加は2007年だけで、3回も行なわれていて、2008年にも更に追加がされています。

この表を見ると、アメリカの子供達が世界中で一番多くのワクチン接種を受けているだけでなく、歴史上最もワクチン接種をうけている存在だと言うことがわかります。世界中どこにも、アメリカほど激しいワクチン接種のプログラムを組んでいる国はありません。

そして子供がワクチン接種を1回逃すと、次の時どうなるかと言うと、そうです、同じ日に全部のワクチン接種をあわせて受けさせられるのです！時には14種類ものワクチンを同時に、です。こんな行為が安全だと、どこかに証拠となる研究があるのでしょうか？勿論、ありません！

68回と、おまけ

そして、地域のクリニックはどこでも、いつでも好きなようにこのリストに実験的にワクチンを増やすことが出来ます。68回だけ、ではないのです。このおまけのワクチンのことを、両親に伝える場合もあれば、無断で行なわれる場合もあります。たいていの親は、通常の前定表のことも知らないほどですから。しかし、これだけではありません。2002年の1月には、さらに新しい時代が始まったのです。

アメリカにおけるワクチン接種の実状：続き
営業促進のための、新カテゴリー

この「ハイリスク区分」は2002年に現れたものですが、これは新しいワクチンの接種実験がしやすくなるように仕組みられた「裏道」であり、これによって生産者側は堂々と、将来ずっとワクチンを増やし続けられるようになってしまいました。生化学兵器のテロに対するヒステリックな危機感の扇動に始まり、こうした手口でA型肝炎やRotateq、HPVの様にこっそりと新種のワクチン接種がいつのまにか加えられていくのが目に見えるようです。

なぜって、新種のワクチンを追加したければ、ただ2,3ヶ月前に該当する病気を「ハイリスク区分」に設定しておき、その後でまるで当然という顔で ささっと予防接種予定表に付け加えてしまえば良いのですから。とっても簡単ですし、公衆に何の告知も必要ありませんから、便利な方法ですよ？

9/11事件のたった4ヶ月後に現れたこの新区分も、実はこの国をとりまいている緊急時健康保護模範法や愛国主義法、ふるさと守り法、といった考 えが盛り上がれば発足するであろう、様々な命令のお膳立てに過ぎないのです。[140]

この様な法律の命令が出来上がれば、どんなこともテロ扱い出来る絶対服従的な、支配的な権力が与えられることになり、そうすると概して我々人口の1部、あるいは全人口は、彼らが必要だと判断した行為には全て、実験的なワクチン接種も含め、従わなくてはいけないことになります。

それに従わない者は、罰金や罰則、懲役をやむなくされ、あるいは無理やり従わされたり、財産を焼かれたり没収されたりする仕打ちを受けるでしょう。

こんな極端な法律制度が本当に出来るなんて、なかなか信じられないことに感じるでしょうが、実際にこの制度の幾つかは、現在の全州の法律に含まれているのです。しかし、こんなナチス主義と「いつでもどこでもテロ恐怖」のどちらかを選べと言うなら、私は迷わずにテロ恐怖の方を選びます。政府がどれだけ私達を「守ってくれない」か、はもう十分に分かっていますから。

どこまで受ければ十分なのか？

世界中、そして歴史上でも最も多い、68回というワクチン接種を我々の子供達に受けさせているのだから、生産者側はもう十分金の卵に満足している、とお思いでしょうか？ところが、そうではないのです。これら全てのワクチン接種からなる、体に対するウイルスの負担を研究したり、混合接種の負担や同日に複数接種することからくる負担の研究をすることは、決して援助されず、この様な懸念が話題にあがることは1度もありません。いわゆる「科学」にとっては、どれだけ多く、どれだけ早く増やせるか、この方が大事なのです。

9/11事件以降の世間では、どんな条例が発足してもめったに抗議の声が上がりなくなり、よってワクチンの大洪水の口は、大きく開け放たれています。近年の義務接種のワクチンの表を見てください。

1980年 計20回
2003年 計40回
2004年 計53回
2005年 計58回

2006年 計63回

2009年 計68回

以上は、子供向けのワクチン接種の状況ですが、これには続きがあります。

新しく設定された、成人用ワクチン接種予定表

子供向けの接種予定表よりも、さらに懸念されるべきことが、この新しい予定表です。2008年初めに、何のメディア告知もなく突然こっそり現れた この成人用の予定表において、CDCは18歳以上の成人に対し73回の追加ワクチン接種を奨励しています。[15]これによって、アメリカ人のワクチン接種の奨励回数は一気に2倍にもなってしまったのです。

でも、そんなニュースはどこでも放送されませんでしたよね？

つまり、こういうことです。今まで1世紀もの間アメリカの国民にワクチン接種をおこなってきたCDCと関係者たちは、今度は子供達だけでは飽き足らずに、もっと市場開発を広げなければ気がすまなくなってしまう—そして最も豊富な市場である、成人に目をつけた、という訳です。

過去100年の間において、ワクチンの効果が生涯続く、という主張をした科学者はいませんでした。だからこそ、ワクチンの複数回接種の必要性の理由ができたのです。子供達がなぜ、同じワクチン接種を何度も何度も受けなければいけないか、それは「免疫」が薄れてしまうから、でしたね？ですから、成人向けに予防接種を続けることも、それを考えればごく自然、当然な成り行きだったわけです。だったら、生涯ずっと接種を続けさせればいい！何でもっと早く思いつかなかっただろう？この素晴らしい思いつきで、営業効果は一気に2倍にも膨れ上がったのですから。

2009年度のアメ리카成人向けに奨励されている接種は次の通りです。

破傷風 ジフテリア 百日咳	15回
Human Papilloma ウイルス	3回
風疹 おたふく風邪 3日ばしか	6回
Varicella	2回
インフルエンザ	45回
Prevnar	1回
Zoster	1回

こうした成人向けの予防接種予定表とは、まったく前例のないものであり、合衆国以外にこんな設定をしている国はどこにもありません。国民に150回分ものワクチン接種を推奨する国なんて、他にはないのです。この新しい方針がもたらすであろう影響は、すぐには明確にわかりませんが、次の点ははっきりしています。この成人向けの人体実験に不注意にも参加してしまったアメリカ人は、この本で取り上げているワクチンによる様々な副作用や障害を、今までの2倍にも負ってしまう羽目になるのです。

乳児が負う負担、突然死 (SIDS)

乳児は、成人のミニチュア版ではない

もう1つ、決して討論されることのないことは、ワクチンの毒成分と、乳児の体の大きさの対比ですが、これについてボイド ハーレイ博士はこう述べています。

「体重6ポンドの新生児に行うワクチン接種の1回分は、体重180ポンドの成人に同日行なう30回分のワクチン接種に等しい。」[95]

乳児の体を、他の顧客層と同じ様に扱い、企業的な「リミット無し」の概念を押し付けているのに、誰一人として、次に挙げる、最も初歩的な質問をす る人はいません。

乳児には、一体何回分に耐えることが出来るのか？

9/11事件後には、これからいつどんな生化学兵器のテロが起こるか分からない、とマスコミに挑発され、世間はヒステリックな緊張に満ちていました。そんな2002年1月のPediatrics誌というジャーナルに、近い未来に科学がどんな変化をとげるかという予測の記事が載っていましたが、これは愕然とする内容でした。その124ページには、筆者連が親達に向けて、我が子が沢山ワクチン接種を受けすぎているのではなどと心配することはない、と書いてあります。それというのも、最近の発見で、乳児が10,000回もの接種に耐えられることが分かったからだ、というのです！そして、偶然でしょうか、この筆者はCDCの宣伝部のメンバーである、ポール オフィットです。

オフィットは、まったく巧妙な先手を打ったと言えるでしょう — なんとと言っても9/11事件以降、推奨ワクチン接種の合計数は、3倍にもなっているのですから！[119]

持ち札が悪くては、勝負には勝てない

こんなワクチン接種の数々は、本当に効果があるのでしょうか？私達の子供たちは、本当にそうした伝染病に対しての免疫をつけたのでしょうか？

もしも効果があるものならば、アメリカの子供達は乳児の生存率において世界1であってよいはずですね？しかし実際には、34位という結果です。（UNICEF）[36]つまり、他の33国の乳児達の方が、2歳まで生き延びる確立が高い、ということです。さらに、1997年には私達は22位 だったのですから、逆効果も良いところですよ！

アメリカでは毎年、少なくとも10,000人の乳児が、流行の「突然死—SIDS」という診断理由で死亡しています。これはつまり、寝る前には健康だったのに、起きてみたら死んでいた、そして決まって原因は不明、というものです。この突然死という言葉は、ワクチンの集団接種化の以前には存在していませんでした。（Mendelsohn）[246] 実際の死亡児の数は、不明です。突然死に関するすぐれた専門家であるヴィエラ スケイブナーは、その 一生涯にわたる研究において、ワクチン接種と突然死の疑いの余地のない関連性を明らかにしています。[243]

アメリカの子供達の健康状態は、概してひどいものです。喘息、アレルギー、抗体の病気、そして皮肉なことに、ワクチン接種を受けたその伝染病そのものにかかっている子供達—彼らの数は、どんどん増えつつあります。

「最近になって、比較的害の少ない子供の伝染病に対して行なわれたワクチン接種が、集団接種の開始以降、癌、白血病、リウマチ関節炎、MS、Lou Gehrig病、狼そう、Guillain-Barre症などの抗体の病気が急激に増えていることの原因ではないかという疑いの声が強まっている。」

メンデルソン博士がこの指摘をしたのは、20年前ものことです。こうした病気は、減っているでしょうか？抗体の病気、という言葉が一般家庭で良く聞かれるようになってしまっているのは、どうしてでしょう？それに、慢性の疲労症、自閉症、なぞの慢性のアレルギーや関節炎に悩まされている子供達が、ここ数年の間に増え続け、さらにその年齢層も低くなりつつあるのは、どうしたことでしょう？携帯用の吸入器を使いながら校門を出入りする子供達の数は、果たして減っているのか、それとも増えているのでしょうか？毎年1.5兆ドルも保健衛生につき込んでいるにしては、どうも我々国民の健康に成果が現れていないようすが。

乳児の特別病室

2002年7月には、ある驚くべき話題がニュースに出ましたが、ほとんど注目はされませんでした。政府の機関で、国中の薬学関係の研究の大部分の資金援助を取り締まる国民健康機関が、末期症状の乳児の介護のために、2.5百万ドルを使うと決定したのです。これがどういう事を意味するのか、ちょっと考えてみましょう。癌やその他の致命的な病気末期症状の患者達と同じ位、沢山の乳児が病気によってゆっくりと苦しんで死んでいっていると、そしてその子供達の生命線をほぐしてやるために、新しく対策が必要だと、政府が判断したという意味です。それでは、この乳児の病気による死亡数とは？なんと、毎年53,000人も乳児が、病死しているのです。事故死、ではなく、生まれてからかかった致命的な病気による死亡数です。ベトナム戦争のアメリカ人死亡者を全部合わせた数と同じ、又南北戦争のゲティスバーグでの死亡者の統計数と同じ、物凄い数の乳児が病死しています。しかも、毎年これだけの、乳児が犠牲になっているのです。[123]末期症状で苦しんでいく乳児が、です。

副作用反応の実状と、政府機関の対応 さらなる詐欺

予防注射の政治的な面から言えば、ワクチン接種による死亡率や副作用反応の報道に関しては、初めから避けられている問題でした。当然、ワクチンを売る側としては、商品の欠点を知らせまわりたくはありません—まあ、ビジネスの基本です。しかし、偽のデータを作り上げたり、悪性反応が起こったことの情報を隠したりすることは、まったくの偽り、誤報道としか呼べません。

1世紀も前に、ジョージバーナードショーもこの戦術に気付いています。

「世紀末の興味深い時代の節目に、私はロンドンのバローカウンセルの保健委員会の一員であった。そこで私は、ワクチンの成果を良く見せるために、どの様に統計が工作されているかを目の当たりにした。天然痘ワクチンの再接種を受けなければならない患者の件は全て、化膿性の湿疹とか、ヴァリオロイドとか、とりあえず天然痘以外の症状だということにして偽の診断をしているのだ。」[205] p64

つまり、単なる呼び名の言い換え、というごまかし方です。これは、ポリオや天然痘が「絶滅した」と発表された後、同じ病気を「難性髄膜炎」だとか「猿痘」だとか呼び方を変えてしまう方法です。(M. Doley [224], [235]) 宣伝発表のためには、数字を良く見せる必要がある、というわけです。

もう1つ、統計学者やライターの間でよく使われるごまかし法に、「データのあり過ぎ」法があります。これは、もとのデータを性別、年齢、人種などでどンドン細かく分類していき、もともとの主旨

が分からなくなってしまう様にするやり方です。このやり方で、昨50年の間の合衆国における癌死亡者の総数の増え方や、ワクチンが登場する以前に伝染病による死亡者が自然に減っていたデータなど、こうした簡単な事実を都合よくもみ消すことが出来るのです。(Yiamouyiannis, p 78) [210]

薬学誌や薬学の本を読む人の数は限られていますし、大抵の人々はインターネットのニュースや雑誌をざっと読んで、そこで得たわずかな情報から自分なりの意見を作り上げます。そこで、一般のメディアに載っている数字は、最も有力な宣伝主である製薬会社に有利な数字にしてあるのです。

小児科の分野に関して言えば、これはもっと単純で、副作用反応が起きた件数は公表されず無視されます。さらに、その様なケースは即座に否認されるような段取りになっています。これは、「健康な赤ちゃん」プログラムーワクチン接種という小児科の大切な収入源を守るための、経営方針です。人々がワクチンに対して少しでも疑問を持つようなことがあれば、小児科医は生活費が稼げなくなってしまうし、医療ミス、違法治療の法的責任を問われることになってしまいますから。ハリスコウルターとダンバートンの両氏は、母親達が自分の子供がワクチン接種後に副作用を起こしたと伝えにいて、即座に否定された無数の例やケース歴を示しています。これは、気休めでしょうか、それとも日常方針とでもいうものでしょうか？ [227, 108]

副作用反応の報告

副作用反応を報告する、といった医療関係者の責務はどうなっていたのでしょうか？アメリカにおけるワクチン集団接種は、1902年に始まっていますが、医者がアメリカ国内で起きた副作用反応の事例を報告できる記録管理センターといったものは、1991年まで存在しませんでした。(p88 [227]) 1991年には、VAERS (Vaccine Adverse Effect Reporting System) が設立しましたが、これは国のワクチン接種による小児障害法が1986年に発足した結果うまれたものです。

1986年にロナルドレーガン大統領がサインした法律、NCVIAには「全てのワクチン生産者は、ワクチン関連のいかなる障害や死亡件による損害の責任を法律で問われることは無いものとする。」とあり、製薬会社はこれによって、子供達がワクチンの副作用で死亡しても、無罪放免とされました。(Horowitz, p. 499 [256])

さらに、副作用が起きたケースを記録しておく研究機関が無かったのですから、1991年以前にされたワクチンの安全性に関する発表は、まったく無意味な発表だということが分かります。みんなが口をそろえてワクチンは安全だ、安全だ、と唱えていましたが、副作用についてちゃんと記録をとっている人が誰もいないのに、一体どうして安全だなんて言えたのでしょうか！子供がワクチン接種の直後、5分もしないうちに死亡したって、1991年以前にはその記録さえ取られなかったのです。ゆえに、実際の死亡件数は私達には分かりません。さらに現在においては、医者の大多数がワクチン接種による副作用の件を報告しない有様です。FDAの予測によれば、ワクチンによる激しい副作用の件数のうち、医者が報告するのはわずか10%程だということです。(Orient, Null) [177, 220, 245]

どうして医者が件数の10%しか報告しないかと言うと、1番大きな理由は条件反射といってもいいでしょう。先に述べたように、自分がしていることは不安全だ、と認めたがる人は誰もいません。ほとんどの医者は、実際に副作用がおきた件数を正直に報告したら、一般人のワクチン接種に対する信頼が台無しになってしまうのでは、と心配してしまうのです。

この10%の報告件数は、これをサポートする研究もないのに、CDCやFDAの資料に「報告された副作用の件数の予測」の参照として、無理やり引用されて頻繁に出てきます。ニューヨークの医師連

のNVICの調べによれば、副作用を報告する、と答えた医者数は、全体の2%に過ぎないとのことです。ということはつまり、ワクチンに対する副作用反応の内、実際にVAERSに報告されるのは全体の1%の件数にしかない、という可能性が十分すぎるほどあるわけです。[264]

合衆国の予防接種プログラムとして30種類もの様々なワクチン接種が合計1億回分も打たれた結果、2004年にVAERSに報告された副作用の件数は200,000件です。(Geier, [77])
これが実際の10%だとすれば、1991年以降にワクチンによる深刻な副作用が起きた件数の本当の数は200万件になります。さらに、FDAの役員であるケセラーが述べたように、実は1%しか報告されていないということなら、1991年以降にワクチンによる深刻な副作用が起きた件数の実際数は、2000万件にも上るということになります。これには、入院や、生涯残る重度障害、死亡などが含まれています。こんな恐ろしい被害が現在のアメリカで起きているのに、だれもこの災害については注意を払おうとしていないのです！

時間制限

VAERSは、ワクチンによる激しい副作用を報告するに当たり、非常に厳しい基準を設けています。その1つに、報告を認める強引な有効期限の設定があります。

「障害を被った場合には、最初の症状が現れた36ヶ月以内に被害を申告しなければならない。」
(NVIC[264])

しかし、副作用反応の多くは、もっと時が経ってからしか現れません。毒性の注入物から起きる、型にはまらない有機的で潜在的な障害、乳児の発達途 中の脳細胞に障害を与えるような反応の症状は、もっと後になって現れるのです。ですがこの基準によると、36ヶ月以降に現れた症状は申告するに値せず、よっていかなる損害賠償を要求することも不可能になります。

不正な資金

2007年までに、VAERSに届いた損害賠償の申告数は、1万件以上にもなります。しかし、厳しい条件や法的な障害物が多すぎる、副作用反応を証明するための必要書類が多すぎるという理由のため、実際に受け入れられるところまで至ったのはその内4400件にしかありません。[22]

それでも、1991年以降ワクチンによる障害にたいする損害賠償に使われた費用は1億4千ドル以上にもなります。[351]

ここで、重要点をまとめてみましょう。

- この国では、18歳未満の子供達に対して、68回分のワクチン接種が義務化されている。
- 1991年以前には申告機関が無かったため、それ以前に副作用反応で死亡したり障害をおった被害者の数は未明である。
- 基本法によって、製薬会社は一切の法的責任を問われないことになっている。
- 申告機関はあるが、実際に悪性反応があった件数のわずか10%しか申告されていない。

ーこの申告機関には、実際に申告された件のその後の副作用反応（死亡や一生続く神経障害などの場合もある）は含まれない。

ーワクチンの副作用反応の被害者への損害賠償は、国民の税金から支払われる。

ずいぶん、ぎょっとする内容だと思いませんか？

=====
問題のあるワクチンは、本当に回収されているか
当たりのロットーホットロット

ワクチンはロットと呼ばれる区分けごとに生産されています。1つのロットで作られるワクチンは、20,000から70,000回分以上です。その中で、あるロット内で作られたワクチンが異常に高い確率で副作用反応や死亡の原因になることがあります。そうしたロットは「ホットロット」と呼ばれます。資料によっては、[ホットロット]とは死亡が2件か入院が必要な副作用反応が10件を含むロット、とされていますが[163]、他の資料には何も数の指定はありません。

そして酷いことに、こうしたホットロットが発見されても、それを製造者側が回収する義務はまったくありません。今も昔も、そうした義務を定めた法律が、全く存在しないのです！

今度皆さんが、ワクチンがどんなに安全か、という宣伝文句を目にした際には、この紛れもない事実を思い出してみると良いかも知れませんね？

それでは現在、接種が行なわれているワクチンの幾つかを取り上げて、ざっと調べていきましょう。これは、情報がありすぎて、おっくうな作業に聞こえるかもしれませんが、しかし、もしあなたにお子さんがいて、その子がワクチン接種を受けようという時になって、手に入る情報はワクチンで生計を立てている生産者側が提供した情報しか無い、としたら、本当に正しく情報を考慮した判断が、出来るでしょうか？ですから今晚は、テレビをお預けにして、自分のために情報を集めてみましょう。自分の子供が可愛いなら、当然その子の血液の安全も、大事なことでしょうから。

=====
これまでの内容について

ここまでは、全体的なワクチンの実情、問題点について、

主に著者の出身地であるアメリカ合衆国の現状をもとに話が進んできました。

でも、日本のワクチン接種の基盤となっているのはこの合衆国での現状であり、使用されているワクチンも国内製と海外製での多少の違いはありますが問題点は大きくかぶっています。

これからは、ポリオをはじめとする各種のワクチンの実情、問題点を項目ごとに挙げていきます。

ここで取り上げられているワクチンが日本で使用されているかは

(同じものも多いですし、日本独自に開発しているというものもありますが、基盤となる考え、問題は十分参考になると思います)

特に示してありませんが、各自インターネットで調べていただければ比較的簡単にわかりますので、ぜひ試してください。

また、文書内に[]で数字が示されているのは、著者が最後の方に掲載している参考資料ページの該当項目です。

自分で参考資料を閲覧して確かめたい方もいると思いますので(英語ですが)

後ほど参考資料ページもUPします。

しばらくお待ち下さい。

=====

予防接種の本当の意味：ポリオ

ポリオ

ポリオとは、未だに未解明の部分が多い、骨髄の悪性感染ですが、ワクチンが発明される以前にも、本来はそこまで死亡率が多いものではありませんでした。ポリオのウイルスを媒体している人の90%は、何の症状も起こりませんでした。(Bernet, p93) [203]

アメリカにおけるポリオ感染の減少が、本当にポリオのワクチン接種のお陰だったかどうかは、疑わしいものです。表2で示したように、多くの研究者がポリオの減少はそれ以前から自然に始まっていたと述べています。[209] 前に載せたアルダーソンの統計表におけるポリオ感染の報告数の劇的な減少は、ワクチンの効果というよりは、申告方法が大幅に変わったことから来ているものなのです。このからくりの詳しい説明は、109頁のニュースターのThe Vaccine Guide[211]で、ご覧下さい。ここには、政府機関のバイオ統計学者であるDr. バーナード グリーンバーグの証言が載っています。簡潔にまとめると、つまり1954年以前には医者がポリオを実際よりも多く報告していて、それ以降は実際より少なく報告していた、という、いわば政治的な作戦と言えるものです。ワクチンが効果的である、と見せるためにわざとこうしたわけです。科学のお陰で暮らしが改善される、1950年の抗生物質のブームに続いて、ワクチンのブームを、という訳ですね。

これについてHygienic Care of Childrenの著者であるハーバート シェルトン(博士号)は以下のよう

に述べています。

「ポリオが一見減少したかのように見えるのは、よく出来た裏工作のお陰である。Salkワクチンが取り入れられる前には、ポリオに感染していない何千人もの健康な子供達が、ポリオだと診断された。

そして一旦ワクチン接種が開始されると、今度はそういった件をポリオと診断することは止められた。このせいで自動的に、ポリオの申告件数がほとんど皆無にまで減少したかのように見えた訳である。」 [235]

1955年には、初代Salkワクチンのロットの幾つかに、ある問題が発生しました。ワクチン接種を受けた直後に、80人余りの子供達がポリオに感染し、さらにその子達から少なくとも他の120人の子供達が2次感染したのです。犠牲者の3人の子は死亡し、75%は身体麻痺の障害を負いました。

([256], p 487)

ポリオが無くなったのは事実ですが、ポリオワクチンのお陰でそうなったのではありません

ん。1977年にはワクチンの発明者であるJonas Salk自身が、「現在の合衆国で見られる数件のポリオ感染は、ポリオという病気のせいではなく、ポリオワクチンを使った結果起きたものだ」と証言しています。(Science Abstracts 1977年4月4日号) [288]

そして何とCDCでさえも、1979年以降に合衆国で起きたポリオ感染の全件が、病気そのものではなく、ワクチンのせいであると認めている次第です！[206]

皆さん、ちゃんとお読みになっていますか？これまでの35年間に合衆国でおきたポリオ感染の全件が、ワクチン自体のせいだと分かっているのに、ではなぜ、私達は未だに、しかも4回もの、ポリオワクチン接種を受けているのでしょうか！？

それでも、ワクチン自体が無害なものだったのなら、まだ幾らかましだったでしょうが、この上さらに2つの困った点が挙げられるのです。

—ポリオワクチンには防腐剤として水銀やホルムアルデヒドなどの有毒物質が使われていること。
—元になるオリジナルのポリオワクチンには、SV-40 猿ウイルスが含まれていたこと。

最初の1点目については、生産者側も認めているので、議論の余地もありません。(Physician's Desk Reference 2004) [251] ご存知のように、水銀はメタボリックな有毒物質で、脳や腎臓、骨髄に障害を与えます。(Widman's, p.691 及び Bernard) [196,166] 又、防腐剤として使われるホルムアルデヒドは、前にも示してあるように、発がん性物質として知られています。

問題の2点目である、ポリオワクチンがSV-40で汚染されている、という点は、いささか劇的とも言えるでしょう。

50,000匹の猿

これは、60年代にポリオワクチンを作るために殺された猿の数です。(James, p166) [188]

1952年以来、何千匹ものアカゲザルが、その腎臓を使ってポリオワクチンを媒体するために殺されてきました。(PDR, 1998 p.2131) [251]しかし大勢の研究者や、ポリオワクチンを発明した人自身もが、ここ1世紀の間のポリオの統計を見た上で(上記の表2) こうした見解を述べているのです—1954年までには、すでに人類においてポリオという病気は明らかに威力を失いつつあったので、ポリオワクチンの必要性は無かったであろう、と。

しかしその25年程後に、HIVが凄い勢いで荒れている事実を踏まえた上で、Science Digest誌の1963年号の記事で、1950年代にSV-40という名の猿ウイルスが「Salkワクチンという形で、何百、何千、あるいは何百万人もの人々に事故的に注入されてしまった」と書かれているのを読むと、空恐ろしい気持ちになります。(Snider) [218] そして、この事件がどこで起きたかと言うと、アフリカで、なのです。(Curtis, p.1259) [219]アメリカでは、1955年から1963年の間に、約9千8百万回分ものSVが混入したポリオワクチンを子供達に接種してしまいました。[153]これらの事実は、それから25年後にAIDSが氾濫したこととの、関係性を示唆しています。

ホロウィッツは、1964年以前にポリオ接種を受けた人全員が、SV-40ウイルスに感染している可能性が高い、と示しています。([256] p.493)

ポリオ接種と、SV-40 及びAIDSとの関連性について、こんなに沢山の研究者が指摘しているのですか

ら、自分の子供達に「害の無い」ポリオワクチン接種を受けさせる前に、これらの資料を読んで、安全性に疑いを持った方が良いのでは、と私は思うのですが。ポリオという病気そのもの以外にも、もっと悪質な病気までもらってしまうかも知れないのですから。ワクチンの商売で生計を立てている側の人間に、全ての決断を委ねてしまうのは、賢い行為とは、言えません。

より最近の研究では、SV-40と癌の関連性も発表されています。2002年3月には、テキサス大学とベイラー大学の科学者達両方が、SV-40 とnon-Hodgkin's lymphomaという合衆国で5番目に多い癌との高い関連性（43%）という研究結果を、それぞれ別々に、しかも同じ数値結果を出しています。（Belin） [141]

最先端の科学者であるMD. ミッシェル カーボンは、「現在、60もの様々な研究室から、人間の脳腫及び骨腫瘍とSV-40の関連性を確認する内容の報告書が70件も届いています。」と述べています。 [82]

ポリオワクチンがSV-40を含んでいることにFDAが最初に気付いたのは1963年であり、当時にもそれが発がん性物質ということが分かっていたため、アカゲザルの使用は止めましたが、既存のワクチンの在庫はどうなったのでしょうか？捨てた、と思いますか？何百万ドルもの価値のあるワクチンを？ご冗談でしょう？そうではなく、FDAの教義委員会は「すでに出荷している在庫をリコールして、公衆に不安を抱かせるよりはと、そのまま市場に出ているままに放っておくことを決意した」のです。（Science誌、 p.1225, 1972） [296]

それでも、FDAが自分達の身の安全を気にしてくれてると思えますか？

さらに、ジョナス サルクのSalkポリオワクチンは、あまりの死亡件数や麻痺障害件数の多さのため、わずか17ヶ月で打ち切りになりました。代わりに使われるようになったのは、口から入れるSadin生ワクチンで、これは現在も使われているものです。そしてそのワクチンの発明者であるアルバート サディンMDが、30年後に言ったことはこうです。

「正規のデータにより、合衆国で行なわれた大規模なワクチン接種が、免疫をつけるとされていた病気に対してこれといった効果を発揮することが出来ないことが判明した。要するに、ワクチンは失敗したのであり、現在も失敗作のままである。」 [294]

- International Assn of Scientists & Biologists 1985年12月7日

ワクチンによって感染した病気

そして現在も、ポリオワクチンは危険なままです。2002年には、カリブ海地域において、生ワクチンの使用によって21件のポリオ感染があり、死亡も2件ありました。 [117, 113]

ここでポイントなのは、これらの感染事件は全て、たった1人の子供に与えられたワクチン接種から発生した（！）ということです。CDCによれば、つまりこれはワクチンそのものが新しく病気を作り出してしまったこと、感染者から感染者へと、病気を広げていくことが出来るという意味です。

（Jones, 2002年3月18日） [129] CDC所属の科学者、オリン キューはこの件についてこう述べています。

「... ワクチンから発生した、このウイルスは... 何回も遺伝子的な突然変異を繰り返し... 強力な悪性型となって、もともと予防するために作られた、その病気自体を引き起こす結果となってしまった。」 [142]

ウォールストリート ジャーナル誌は、こうです。

「科学者達はもう長い間、このワクチンに含まれるウイルスが、強力な悪性型として、再発生するのでは、と懸念してきた。しかしこれは、キュー氏が イスパニオラ虫の変化を分析するまでは、実際に起こったことが確認されていなかった。．．． この事件で、科学者達はウイルスがいかにか「突然変異をして還元 適合したか」という危険な事実気付かされた訳である。」 [117]

ワクチンの投げ捨て行為に反対する人々

アメリカ合衆国が実地しているワクチン接種プログラムの実態とは、先進国で不要になったワクチンを第3世界をゴミため扱いしてそこに売りつけるためのものだったということに、第3世界の人々も気付かされ、各地で反対の声が高まっています。2008年にはパキスタンにおいて、UNICEFによる強制的なポリオワクチン接種に反対する運動が勃発し、こうした強制的なワクチン接種を、大量殺人的な行為だと指摘しています。[9]それもそのはず、50 万人の人口の内2007年にポリオに感染した人は32人しかいないのに、その地域全体にワクチン接種を行なうなんて、正当化するのは無理があるでしょう。特に、そのポリオワクチン自体が、致命的な副作用の数々をもたらすという悪名高いものである場合には、なおさらです。

ポリオワクチンは明らかに、本来ならば今頃とっくに完滅しているはずの病気を、逆に広めてしまっているのです。

=====

DPT 三種混合： ジフテリア

D P Tー最も有毒な、3種混合接種

さて次は、よく知られた3種混合ージフテリア、百日咳、破傷風を一辺に注射する3種混合摂取です。まずざっと、それぞれの病気について、別々に見て行きましょう。

ジフテリア

「灰色の皮膜」という意味のジフテリアは、感染すると舌と喉に灰色の皮膜ができて、症状が進むと患者を窒息死に至らせる病気です。このジフテリア もまた、ポリオや天然痘と同様に、過去の病気であり、人口過多や下水設備のない不衛生な環境から来るものです。つまり現在に至っては、危険性の無いものです。メンデルソンに言わせれば、「ジフテリアで死ぬのは、コブラにかまれて死ぬ確率と同じ位」なのです。(How To, p. 245) [246]2002年の合衆国全域におけるジフテリア感染は、たったの2件でした！[76]それなのに、何百万人もの人々がひっきりなしにこの落ち目の病気のためにワクチン接種をしている訳です。再度、表2を見ると、ジフテリアの感染件数の減少が、栄養や水道施設、下水施設の改善に伴って起きたもので、1940年代半ばにワクチンが一般化されるずっと前から減っていたことが分かるでしょう。

ではジフテリアのワクチンは効果があるのでしょうか？メンデルソンは、16人の死者が出た1969年のシカゴでのジフテリア流行について指摘していますが、これはある意味大した事件ですー16人中、なんと9人もが予防接種を受けていた人々なのですから！免疫が、聞いてあきれます。ジフテリアのワクチン接種の一般化が、まだ合衆国の半分までしか進んでなかった頃にも、ワクチン接種を受けている州と受けていない州において、感染状況の違いは何も見られませんでした。さらに、この病気はもう

何年も前からerythromycinという一般的な抗生物質で治療できるようになったので、とくにワクチン接種 など必要がなくなっていたのです。ワクチンは、必要ではなかったのです。[280]

ジフテリアの接種に対する副作用反応の報告は、百日咳ワクチンの様には何千件もと押し寄せては来ませんが、これに関してはある事実が挙げられます。ジフテリアワクチンの作用については、長期的な調査が今までに何もされていないのです。とりあえずまとめると、この国でジフテリアのワクチン接種 を行なう科学的な根拠は全く無く、これは溢れるほどある薬学ミスの、1例にしか過ぎない訳です。

ジフテリアワクチン接種が効くか、ロシア人に聞いてみると良いでしょう。何十年もの間、ロシアではジフテリアの集団接種が実施されてきました。さて、この病気は、1976年には消え去っていたのに、1990年そして1993年にも又、ロシアでは大規模なジフテリア流行が起きているのです。感染件数は各、およそ1200件と6000件です。そしてこれらの事件が起きたのは、ジフテリアワクチン接種が全国規模で行なわれた後になります。(Garrett, p. 504) [223]

=====

DPT三種混合：百日咳
Pertussis 百日咳

これは、大物です。

Pertussisとは、百日咳の薬学用語ですが、この病気は過去何世紀もの間に、大勢の乳児の命を奪った激しい病気です。感染の機会を見つけては乗り移る、B. pertussisという空気感染の細菌が、呼吸器官の上部に侵入します。激しい咳で肺の空気が全部吐き出されてしまうので、また息を吸い込もうとするとする際に、ゼイゼイと激しい音がするのです。病気にかかった乳児は、この様に呼吸をしようとしている際に肋骨がずれてしまったり、疲労の余り死亡してしまったものです。

百日咳もまた、他の病気と同じく、アメリカやヨーロッパの人口過密で不衛生な都市に発生しがちでした。1578年にはパリ、1695年にはローマ、1850年代後半にはロンドン、という具合です。百日咳はその後なにか他の病気（大抵は肺炎）にかかり易く、すでに弱りきった患者はこれでまいてしまいます。(p 5 [227])

百日咳は、貧しく、安全な生活水が保障されない、不衛生で人口過密な地域の病気でした。アメリカやヨーロッパの各都市で、こうした悪条件の環境が改善されるに従い、表3で明らかに示された様に、伝染病は劇的に減少していきました。百日咳に関しては、そのワクチンが本当はただの脇役でしかなかったことが、この表から良く分かります。スコットランドの研究者Dr. ゴードン スチュワートの指摘によれば、一切のワクチンが始められる前に、百日咳は80%も解消していたということです。(Stewart) [238] さらにアメリカでは、95%近くも解消していました。[83]

それなのに、なぜ殆どすでに解消している病気のワクチンを、義務化しなければならなかったのでしょうか？答えはそうです、いつもこの様に不可解な問題の鍵となるもの—お金のため、に他なりません。

百日咳のワクチンは、アメリカで最も賛否両論の激しいワクチンです。

この50年間に唯一行なわれた、百日咳ワクチンの安全性の確認試験はネズミの増体重テストと呼ばれ

る不明確なテストです。いわゆる「科学者」がネズミの赤ちゃんの腹部にワクチンを注射し、そのネズミが即座に死なずに体重が増え続ければ、そのワクチンは安全で、しかも人間にも効果がある、とされます。これは、冗談でもなんでもなく、本当にこれだけで判断されているのです！

(Coulter, p. 11) [227]でも、これはねずみ用のワクチンではありませんよね？人間の、アメリカの子供達に大規模な集団接種を行なうために、作ったものです。

アメリカで三種混合ワクチンが合法化されるために課された、唯一の有毒性テストが、60年前に行なわれたこのネズミの増体重テストだけ、だったのです。その結果、百日咳ワクチンの成分が、何百人もの子供の命を奪い、何千人もの副作用反応が報告されているのに、このワクチンの合法化を見直そうと言う声は、上がっていません。今現在においても、このネズミ増体重テストは、百日咳ワクチンの安全確認テストとしてちゃんと掲載されているのです。

なぜ、3種混合なのか？

1942年にパール ケンドリックという研究者が、何の安全確認もしないまま、ただ医者都合のためだけに、百日咳のワクチンをジフテリアワクチンと破傷風ワクチンに付け加えることを思いつきました。[352] 一石三鳥とでも言いましょうか、3種類のワクチンを、一揆に打つわけですが、... ワクチンを混ぜると、時々あるワクチンが別のワクチンを活性化させ、作用を強めてしまうことがあります。つまり、それだけ危険性も増すわけです。これは悪性混合作用 (Viral interference) と呼ばれるものです。[290]ですから、当然この3種混合ワクチンも混ぜる際に安全確認をいただろう、と思いますでしょう？

しかし困ったことに、この混合ワクチンは市場に出回る前に1度も、安全テストがされていないのです！さらにはその後今までの間にも、安全テストは1度も行なわれていません (!) (Wakefield) [290]では、その結果を見てみましょう。

百日咳は1949年半ばに合法化され、そのまま3種混合が通常のワクチン接種として行なわれるようになりました。この3種のワクチンは、乳児への危険が増加するにもかかわらず、ただ医者都合のためだけに、一緒に接種することになったのです。この事実は、本来ジフテリアと破傷風の2種混合ワクチンだけでは起きなかった様々な副作用障害の申告が、年々詰め寄せてきていることから明らかです。(Cody) [229]3種混合の副作用反応の原因が、この百日咳ワクチン成分だと言う指摘は、何度も繰り返されてきているのですが、...

DP三種混合：破傷風

破傷風の消えない謎

この病気は一般に、クロストリディウム テナーニという空気を嫌がる微生物が引き起こすと言われています。刺し傷には空気が触れないので、こうした嫌気性生物にはもってこいの環境です。中毒者は、かかりやすい病気です。この病気でもまた、ばい菌は免疫機能が最も弱っている人々―薬物中毒者や不衛生な環境に住んでいる人々を好んで狙います。(Merck Manual .1176) [280]

マークはこの病気にかかった人の死亡率を50%としています。この数字がどこからきたのかは、誰にも謎のままです。しかし、破傷風で死んでいくのは、楽なものではないことは確かです。あごや背中、横隔膜の筋肉が容赦なく痙攣を起こし続け、数日後に患者をしに至らしめます。

再度、表2を参照すると、破傷風のワクチンが出回る以前に、この病気もまた、殆ど消滅していたこと

が分かるでしょう。破傷風ワクチンは、1940年代から集団接種に取り入れられてきました。1950年以降には、子供が18ヶ月になる前に、4回の3種混合接種を受けるようになりました。その後には、釘を踏んだり小さな傷が出来たらいつでも、お決まりの破傷風ブースター(活性用の注射)を受けることとなります。しかし、これはまったく訳が分かりません — クロストリディウム菌を含んでいる可能性がほとんどゼロの傷を負った人が、確実にクロストリディウム菌か、その副産物を含んでいる注射をすることで、病気を克服するなんて、まったく矛盾した考えではないですか？考えてみたことはありませんか？

ワクチンが怪我をする前の時点で免疫機能を与えてくれる、と主張することはさておき、実際に感染した後にそのワクチンの注射をして免疫機能を付ける、などという考えは基本の免疫科学の理に完全に反しています。これは、全く迷信じみた行為です。製薬社のほうでさえ、ワクチンに「病気を治す効果がある」なんて主張をしたことは1度もありません。ワクチンは、病気を予防するものだったはずですよ？それでこそその予防接種、なはずなのに一体どうしたのでしょうか？

さらに破傷風ブースターについても、メンデルソンは40年ごとよりも短い期間で接種する必要はないのではないか、と疑問を唱えています。(How To, p195) [246]

1995年に書かれた、Dr. アレック・バートンによる素晴らしい記事がありますが、[339]ここでバートンは情報源とした参考資料をすべて掲示した上で、破傷風にまつわる謎の裏事情を、1つ1つ解明しています：

破傷風の菌は、周りにうようよいるものであり、健康な人の口の中にも、消化管や皮膚下にも、服にも、ほこりにも混じっているものです。それでも、破傷風に感染することは、滅多にありません。戦争で負傷した傷の20%に、その菌が確認されましたが、破傷風の感染はしていませんでしたし、逆に、実際に破傷風に感染した事例の50%では、菌そのものが体内に見られなかった、とのこと。クロストリディウム菌は、自然な状況においては無害な存在であることが、これでわかりました。そして、破傷風のワクチンが破傷風を予防するという証拠になるような結果は、現在にも過去にも一切無いのです。その上、このワクチンはひどい副作用をもたらし、時には死者まで出すこと(!)が分かっています。[349]

さらに最近では、Hyper-Tetなどの新種の破傷風ワクチンによって、危険がさらに強まっています。このワクチンは、クロストリディウム菌を接種した人の精子から作られています—菌を再活性化する方法、より「強力な」ワクチンを抽出するために人体や動物の体内を通して強める、という、危険で全く非科学的なジェネラー方式のやり方です。([251] PDR 2007 p3248)

決め手となるのが、クロストリディウム菌に感染した後に破傷風ワクチンを体に足してみることで、破傷風が発生することを防げると証明できる正当な科学など、どこにも存在しないという事実です。考えても見てください—もうすでにあなたの体内で感染のプロセスが始まっているところに、その病原菌や、病原菌から作られた菌を血液に注射して増やしてみても、何の助けになるのでしょうか？これはSFまがいの、でたらめとしか言えません。こんなでたらめをしたり顔で言えるのは、実際にこのワクチン接種を実地しているクリニックのお医者さん達だけでしょう。営業のために、こんなでたらめまで使ってしまうのです。

こうしてみると、効果ははっきりしないワクチンを子供達にやたら打ってしまうよりは、明確な証拠が十分にあり、必要性が確信された時にのみ血液に手を加えるだけに限った方が懸命な行いのように感じられます。特に、この空気感染性の伝染病の典型的な感染ルートである、突き刺し傷、という方

法で行なわれるワクチン接種に関しては、なおさらのことです！

「この微生物はワクチンに含まれていなくても、どの傷でも機会を見つけて侵入してくるものである。ゆえに、ワクチン接種の後に破傷風に感染する危険性は、大いに懸念される。」 (S. Thomas) [353]

考えてもみてください。野外で汚いさび付いた、野生動物の痕跡によってクロストリディウム菌がはびこっているような釘を刺して傷を負った後に、破傷風の注射をするという従来の考えが、どこをどうやって、家の中でごく清潔なかすり傷程度の傷のために破傷風注射が必要だなどという考えに取って代わってしまったのでしょうか？

掛かりつけの医者に、最後に破傷風の患者を診断したのはいつだったか、しかも、家で起きた刺し傷から感染した患者が本当にいたか、聞いてみると良いでしょう。すると、その医者が本当はどれだけ破傷風について知っている（知らない）かが、お分かりになるでしょう。

三種混合と 乳児の突然死

突然死(SIDS) とDPT三種混合

オーストラリアの研究者、ヴィエラ スケイブナー博士 (PhD) が、乳児の突然死と三種混合接種の関連性に気付いたのは、偶然の出来事からです。彼女の夫が、突然死を防ぐための試みとして、乳児の呼吸モニターを作ったことがきっかけでした。

まもなくスケイブナー夫妻は、何百人もの乳児を観察していくうちに、苦痛が起きる明確なパターンがあることに気付きました。DPT三種混合を接種した後、16日間苦痛が続く—このパターンは、間違いなくはっきりしていました。それから夫妻は、自分達の発見を、テネシーでの200件の突然死の研究を含め、沢山の関連する研究に照らし合わせた結果、これと同じパターンが見られることに気付いたのです。

大抵の国では、このスケイブナーの業績をやっきになってもみ消そうとしていますが、彼女は負けずに努力をつづけ、とうとうオーストラリアではDPT三種混合接種の義務化は廃止になりました。 [243]

1983年にはLos Angeles County Coroner's Officeにおいても、DPT三種混合とSIDS（乳児の突然死）の関連性を示す研究がされています。CDCが最近、DPT接種後の24時間以内に死亡しているテネシー州の乳児200人に関する調査を実施したのですが、それに研究員達が興味をもち、関連性があるか調べてみようと思いついたのです。そこで、LAの研究者グループは最近突然死で亡くなった145人の乳児の両親に会って話を聞いてみました。その結果分かったことは、次の通りです。

突然死をつげた145人の乳児のうち、53人が少し前にDPT接種をしたばかりである。

内訳：

DPT三種混合接種の後、4週間以内に死亡した件	51%
1週間以内に死亡した件	32%
1日以内に死亡した件	11%

研究員達は、このデータを「注目すべき数である」(Baraff) [230]と述べていますが、私に言わせれ

ばこれはずいぶん控えめな表現です。

日本における、良き短き時代

スケイブナーは自著の本の最初の部分で、1975年から1985年の間、日本がこの短期間だけ正気を取り戻したと述べています。この10年間だけ、日本ではDPT三種混合接種を「2歳児から」に延期しましたが、その間 SIDS突然死が皆無になったのです。そして政治的な理由から1985年に接種を「生後3ヶ月から」に戻しましたが、その結果、突然死もまた起こり始めたのです。[232] 誰もこれに気付かなかった、なんてわけはありませんよね。

三種混合ワクチンの世界状況と、その他の副作用

世界中のDPT三種混合

DPT三種混合とSIDS突然死の関連性については、他にも正式な研究が沢山されていて、コールターの著本に紹介されています。[227] 何度も言いますが、百日咳は、そのワクチンが出回る以前に、すでにほとんど消え去っていた病気です。DPT三種混合には非常に沢山の問題点があるため、現在これを義務化している国は、ごくわずかです。スウェーデンなど、1979年に中止しています。(Trollfors) [231] 当時、百日咳にかかった件数は一時増えましたが、症状は以前よりもはるかに軽いもので、その後スウェーデンに百日咳で死亡した乳児は1人もいません。しかも、この様に病気にかかった人には、本物の自然な免疫がつきます。我が国でのDPT接種プログラムなど、ここから学ぶことが多々ありそうですが。

さらに、日本や西ドイツ、イギリス、その他ヨーロッパ諸国においても同様のことが起こりました。ワクチン接種を止めると、病気は一旦増えましたが、以前よりも軽い症状であり、それによって死亡する乳児はいなくなった、というものです。西ヨーロッパで百日咳のワクチン接種をいまだに義務化している国は、アイスランドだけです。([227] p95)

その他の副作用反応

百日咳ワクチンに対するその他の副作用反応は、以下の通りです。

アナフィラキシー	ショック	脳症
死亡	腕神経炎	
発作けいれん	Guillain-Barre症	
じんましん	肌のただれ	
関節の痛み		低血圧
呼吸困難		口の腫れ
乳幼児のひきつけ		乳児の泉門（頭のとっぺん）の腫れあがり

-PDR, 2002年 p.1854 [251]

以上の症状全ては、水銀による中毒反応と全く同じです。DPTには2005年まで、チメロサルという水銀物質が含まれていたのです。(Bernard, 2000) [166]

接種は、1度で駄目ならもう2度としないこと

JAMA誌の1949年号におけるToomey著の記事以来、DPTによる副作用を取り扱った薬学関係の記事はみな、次の点で意見一致しています。「1度でも副作用反応があった子供には、将来2度と接種をしてはいけない」。家族代々に神経性の病気や「その他どんな病気」にかかった人がいる子供についても、同様です。これは学界のどの研究誌においても共通して言われていることですし、1975年からはWHOの正規的な基準にもなっています。イギリス、スウェーデン、オランダにおいては、この基準が厳格に守られています。(p129 [227]) CDCの病気疾患報告書 (MMWR vol.36) においてさえ、「家系に発作けいれんを起こしたことがある人がいる場合、その人がDPT接種を受けた後に発作を起こす確率は、通常の9倍になる。」と示されているくらいです。[234]

それでも専門家を無視するアメリカ

実際のアメリカでは、以上のような基準をクリアしているかどうかの考慮が全くされていないのが現実です。生産者が「リスクが高い」と言っている対象の子供達をきちんと診断して接種を行わないようにするという制度が、全然ないのです。そんなことをしても、政治的には何の得にもならないので、小児科医のほうもいちいちその子の家系にDPT三種混合へ副作用反応を示した人がいるか聞いたり、あるいはその子が集中神経機関に障害があったり、以前ワクチン接種で副作用反応をおこしたことがあるか、などの理由で接種を断るなんてことはしません。そんなことをしたら、その医者は「すぐ事を荒立てたがる」問題児として、仲間はずれにされてしまいますから。

アメリカの医者達が、世界で実施されている薬学規定を無視して接種を行なっているというこの傲慢な態度をみると、いかにこの国のワクチン接種が政治色に染まっているかが分かりますか？全米小児科医連合 (APA) は、「家系に痙攣発作や神経性の病歴があることは、接種の禁忌事項には当たらない」という声明まで発表している次第です。(APA Red Book) [253] いくら何でも、ひどい態度だと思いませんか？

どれか1つだけ、というならDPTを外す

ワクチン接種の中で、これだけは絶対やめた方がいい、というのを1つ選べといわれたら、答えはDPT三種混合接種です。1991年以降、VAERSがワクチン接種による障害に対し支払った総額15億ドルの内、DPT三種混合による副作用反応の対象額はなんと75%にもなっています。(Goodwin, Dodd [163, 351])

DPT三種混合接種は、本当に効き目があるのか？

全米のDPT接種率は85%にもなりますが、未だに百日咳の発症件数は毎年5000~7000件みられます。さらに、この発症件数は、1980年以降、確実に上昇しているのです。(CDC[83])

その理由は、「免疫」が数年で効果が切れることです。こうして免疫が切れた人は、成人になってから病気に異常な形で感染する危険が出てきてしまいますし、そこから、この異常形態の病気にまったく抵抗力のない乳児にも感染する可能性が高まります。

もう1つ問題があります。ワクチン接種を受けていない乳児の数は現在増えつつありますが、こうした乳児達がこの様な新種の異常形態の百日咳に感染する危険にさらされているのです。人類がこの新しい異常形態の病気に対して免疫を育むには、まだあと何世紀もの時間がかかるでしょう。

さらにNEJM誌の1994年版の記事をみると、百日咳にかかった5歳未満児の80%は、ワクチン接種を全部

受け終えた子供達だったということです。研究員達の間でも、百日咳ワクチンの免疫性が不完全である、という結論に達しています。[331]

ここ5年間に、コロラド州やオレゴン州など、様々な地域において数百件の百日咳の疾患が報告されていますが、それをみても、DPT三種混合接種の 効果は宣伝で云われているほどの効果がないことは明らかです。全米では2005年以来、児童に5回の接種を義務化しています。[3]そして接種後に万が一 発病した場合、地域の福祉施設の一般的な対応としては、更にもう1度接種を付け足すというもの—この最も有毒なワクチンを、すでに許容範囲を超えている乳 児の身体に6回目として追加する、という内容なのです！そうした地域の疾患児の90%は、すでに数回にわたる三種混合接種を受けているのに、こうした事実 は全くお構い無しなのです。

つまり、こういうことです。子供達は、ワクチンによる副作用の危険に脅かされるだけではなく、もともと約束されていたはずのワクチンの効果=免疫 自体、実は手に入れることが出来ない訳です。そんなワクチンを何度も何度も追加して接種したって、それでは何の効果もありません。それなのに、始めには3 回で十分といわれていた接種回数が、4回、5回、ついには6回にも増えてしまっています。そして更に、成人期には加えて5回の接種が定められているので す。本物の免疫とは、一生涯に渡って続くものであるし、実験シリンダーの中で作り出せるようなものではありません。薬学が、免疫の本来の意味を曲げて宣伝 してしまっているだけなのです。

ささやかな疑問

では、実際に私達はどんな危険をおかしているのでしょうか？短期性で数ヶ月しかもたず、再度接種しなくてはならない、しかも効果のうかがわしい「免疫」を付けるために、生後2ヶ月の乳児を、先に挙げたような様々な副作用の危険にさらす価値が本当にあるのでしょうか？百日咳じたい、本来なら自然消 滅していた病気のはずなのに、こんなリスクを負うのは何のためなのでしょう？

ここで述べたのは、百日咳ワクチンの問題のうち、氷山の一角にすぎません。百日咳ワクチンの問題データは非常に大量にあり、しかも大多数は主流の 情報誌に掲載されているもので、実際はここで示したものより、はるかに酷い現状です。興味をもたれた読者の皆さんには、本書に掲載している情報源の資料を ご自身で調べて、より深いレベルで考察されることをお勧めします。

ステルス ウイルス

ステルス ウイルス：巧妙なごまかし

USC免疫学者のジョン マーティンも、真実を偽装するためにもみ消された人物の1人です。マーティンが発見したのは、何の抗体反応も起こさずに 体内に忍び込むことの出来るごく悪性の小さなウイルスであり、彼はそのウイルスについてとても詳しく、徹底した研究資料を発表しました。このウイルスは こっそり忍び込める、という特質から、ステルス（ひそかな）ウイルスと名付けられました。このウイルスが侵入して、発病する場合もすぐに、何年も経ってから発病する場合もあります。そう聞くとなんとなく、前に述べたワクチン内の薄められたウイルス成分（99%の人々には免疫機能が反応しないように薄められ ている）を思い出すかもしれません。しかし、このステルスウイルス、別名バーンの大きく異なる点は、意図的に注入されたものではないことです。これらは、 ワクチンをこっそり汚染する成分で、ちょうどヒッチハイクをするように、ワクチンに便乗してやってくるのです。

これらは抗原のように、免疫反応を引き起こすことはなく、そのため人体の免疫機能システムに気付

かれることのないまま体内に侵入することが可能なのです。しかし、炎症反応を引き起こすことこそありませんが、このステルスウイルスは人体の様々な細胞膜を攻撃して破壊することが出来ます。

[58]

例えば、SV-40もその1例ですが、これは前に述べたようにポリオワクチンに密航者のように潜んでいる猿ウイルスです。もう1つには、猿サイタ メガロウイルス—SCMVが挙げられますが、これも猿からのウイルスで1972年に初めてワクチンに潜んでいることが発見されました。これらはワクチン製造の過程で猿の体を利用していたせいで起きた現象です。

マーティンはステルスウイルスの研究を10年間も続けていました。それなのに、彼のことが全然知られていないのは、どういう訳でしょうか？実は、彼の研究が何を示唆するのかが分かると、そのとたん大学側が彼の研究室を閉鎖し、資金援助を取りやめた上、教職を追い出したのです。SV-40やSCMVのワクチン汚染はいまも続いている状況で、マーティンはこの研究を続けさせてくれるようにCDCやFDAに繰り返し要請しているのですが、いまだに政府側は無視を続け、誰もこの研究を続けることが出来ないようになっていきますマーティンの研究から、ステルスウイルスが自閉症や関節炎、脳炎、発作、狼そうやMS症をはじめとする様々な神経性の病気の原因になることが分かっていますが、これらの病気はMerckにおいては、原因不明として記述されているものです。

90年代半ば以来、マーティンはかつてのウェークフィールドと同様に、個人的な資金援助に頼って細々と研究を続けてきました。彼らは云わば、研究会の鼻つまみ的な存在です。この2人が痛い思いをして共通に悟ったことは、ワクチンの汚染について、いかに研究が法律で禁止されていて、外部に漏れないようになっていくかという事実です。ワクチンは、特許品、専売商品ですから、その詳細は極秘に、という項目で手堅く防備されているのです。

でもこの法律は、子供達のことはまったく防備してくれていないようですが…。

乳児の振動死

乳児の振動死

1990年代には、メディアや地域の有力者により、新たな病気の流行が報道されました。その報道によると、親達が自分の赤ちゃんを激しく揺さぶって死に至らしめるという事件が突然に多発しているということでした。真実味を加えるために、これにはShaken Baby Syndrome(乳児振動死症候群)という呼び名まで付けられました。

Cedars SinaiのMD学士であるジョン メンクスを始め、多くの専門家は、このShaken Baby Syndromeに関して、地域の役人が新聞に載って有名になるために仕組んだ騒動劇であり、実際にはDPT三種混合ワクチンによる致命的な副作用の事件をごまかすためにメディアがわざと誤報したものだという見解を示しています。(Goodwin) [163]

サンディエゴの役人であるトニー ブレークは全米のこの振動死でも1番手の法律専門家ですが[349]、現在彼女はこの乳児振動死400件もの担当代表者として活動しています。SBSdefence.com掲載の彼女のウェブサイトには、びっくりするような数字が並んでいます。

—毎年1500件もの乳児振動死が起きているとの報告

—刑務所に入れられた親たちの内、今までに出所できた人数は5%にも満たない。

乳児振動死とされた乳児の神経科診断内容は、DPT三種混合ワクチンによる副作用反応とまったく一致しています。症状の兆候は、脳内出血や鬱血です。脳内のごく小さな鬱血を致死行為の証拠だとして、いままでに大勢の親たちが起訴されています。しかし、最近Radiology誌[23]の記事で、正常出産の乳児のうち26%は何らかの脳内出血を持って生まれ、その症状はMRI検査では発見できるものの、目に見える症状は一切起こさないという事実が発表されました。これで、起訴するのが多少は難しくなると思います。役人にとっては残念なことに、こうした小さな脳内負傷は、ワクチンによる副作用である可能性があることと、さらには通常の出産でも起こりえるものだということが、世間に発表されてしまったからです。

これによって、乳児振動死防止委員会がずっと前から知っていた事実—振動死で起訴された件のうち少なくとも75%は、起訴以前にすでに軽度の脳内鬱血と診断されたことがあるという事実が、明らかになったのです。[349]

麻疹（はしか）ワクチン
はしか（麻疹）

はしかとは、子供時代にかかる弱いウイルス性の、軽い病気です。症状としては、口や肌に赤い湿疹が出来る、発熱、疲労といったもので、通常は1週間以内に治ってしまいます。

これといって、大した病気ではありません。ベビーブーム時代に生まれ、1950年代を子供として過ごした人の大半は、はしかにかかったことがあるでしょうし、その結果、一生の間続く免疫が身に付いたわけです。これは、自然な免疫機能です。(Merck, p1098) [280]

上記の表2に示されているように、この病気は1960年代後半に集団ワクチン接種が普及する以前に、自然消滅する寸前だったことが分かります。

ここで、セールス側は、はしかワクチンを売り出すための宣伝文句として脳炎に着目しました。当時、このワクチンが認定される折には、ワクチン支持者側は「1000分の1」という決まり文句をよく口にしたものです。つまり、ワクチンを接種しないと、1000人に1人の赤ちゃんが脳炎にかかる、という主張がされたわけですが、根拠となるような資料は、全く挙げられていません。メンデルソンや、国際的な生物統計学者のマイケル アルダーソンは、この数字にも反論をとえています。1965年から1970年の5年間にはしかで死亡した人が44人であるならば(Melderson)、たった10万分の1にしかならないのですから。そして、他の病気とおなじく、はしかによる死亡者は大抵、人口過密で不衛生的な環境に住んでいた人達であり、つまりどんな病気にもかかりやすく、死亡する危険も大きい地域から出ているのです。

1970年代前半、麻疹ワクチンはMMR（はしか、おたふく風邪、風疹）ワクチンを一緒に接種するという形で実地されていました。これもただ、ワクチンの効き目がなければ良かったのですが、このMMRワクチンには様々な副作用があるのです。

筋肉の制御機能の破壊
知能発達の障害
脳性まひ
MS

髄膜炎
らい病
痙攣
アナフィラキシー ショック

Guillain-Barre 症
血液の凝固

下痢
脳炎

- Mendelsohn, p237 [246]

お気づきになりましたか？脳炎にかからないために受けるはずのワクチン接種なのに、当の副作用リストには、脳炎がのっているじゃありませんか？こんな副作用は、はしかにかかっただけでは起きないものばかりです。さらに、細胞膜に何年も潜んでいて、その人が成長してから後に発症する「スローウイルス」の存在は、普通の小児科医でさえ知っていることです。だからこそ、ロサンジェルスでは多くの医者が自分の子供達にはMMRワクチンを接種することを拒否したのですから。
(Mendelsohn, p238) [246]

1996年には、以下のような記述がされています。

「…は体の免疫機能を抑圧し、その結果他の病気に感染する危険を大きくしてしまう」

- Clinical Immunology and Pathology, May 1996

つまり、こういうことです。麻疹ワクチンは、麻疹を予防する効き目がないどころか、他の感染症にもかかりやすくしてしまう、というのです。麻疹にかかるとより、麻疹ワクチン接種を受けるほうが危険はずっと大きいようですが…？

それなのに、「脳炎にかかるとかもしれない」という証拠もない口実をつけて、麻疹ワクチンの接種は義務化されてしまいました。

これはマーケティング部門の戦略勝ちとしか、言いようがありません。

はしかに関しては特に、ワクチンを接種しても体内の抗体が作り出されないという事実が何十年前前から知られています。

「ゆえに、はしかへの免疫機能の確立、及び治癒に際して抗体を作り出すという行為には意味がない」

- Nobel Laureate, Sir Macfarlane Burnet, 1971 [190]

では、ワクチンの麻疹予防効果について見てみると、1978年には、麻疹に感染した子供の半数が、ワクチン接種を受けた子供達であるという状態になっていました。さらに、WHOの統計報告によれば、ワクチン接種を受けた子供達は、受けていない子供達の15倍も、はしかにかかる危険が大きいということです！([246], p238)

1983年から1989年にかけては、麻疹の感染件数が10倍にも増えています。さらに次の年には、なんとその2倍になっている有様です！そして1990年には、合衆国におけるはしか感染者は27000人にも昇り、そのうち100人の死亡が報告されています。(p. 511) [223]

また、CDC自体も、人口の100%がワクチン接種済みの地域において(!)麻疹が流行ったという報告をしています。これに対するCDCの説明は、次の通りです。「…麻疹が、予防接種を受けた人口の間で流行る感染症となったことは、不可解な事態である」

(MMWR, Oct1984) [309]

では、子供時代に麻疹にかかって、自然に免疫をつけることの大切さかというと、ヴィエラ スケイ

ブナーは次のように述べています。

「子供達の成長の一環として、はしかにかかることは大切な経験である。子供の成長を阻んだり、その免疫機能の確立を邪魔したいと思う人はいない筈だ。」 [255]

しかし、麻疹ワクチンの本当の怖さにやっと一般の人々が目を向けるようになったのは、2000年4月6日にダン パートンが召集した「自閉症に関する代表者連の事情聴取会」の後からです。英国とアイルランドにおける研究の結果報告から、近年において多発している自閉症の原因として、考えられる最も大きな可能性の2つの内、その1つに麻疹ワクチンであることが明らかになったのです。詳しくは、後に出てくるWakefieldの記述に示されています。

=====
予防接種の本当の意味：おたふく風邪
おたふくかぜ

この病気もまた、子供時代にかかる弱いウイルス性の軽い病気で、唾腺の腫れ、発熱、頭痛を伴うものです。ほとんどの場合、こじれることもなく、1週間以内に治ってしまいます。そして自然な免疫が付き、一生の間つづきます。つまり簡単にいえば、「おたふく風邪に薬はいらない」のです。(Mendelsohn, p234) [246]これもまた、ベビーブーム時代のほとんどの人が子供の時に経験した病気です。

さて、おたふく風邪ワクチンのセールスポイントとしてはどんな宣伝が使われたかということ、大人になってからおたふく風邪にかかると、もっと症状が重く、睾丸が腫れる恐れがある、というのです。生殖機能がなくなる程度ではないが、まれに一時的に睾丸が腫れることがある、という言い分です。では、まず最初の疑問ですが…なぜ、女の子もワクチン接種を受けなければいけないのでしょうか？次に、子供時代にかかれば症状も軽く、一生の免疫が付く病気なのに、なぜワクチン接種が必要なのでしょう？子供時代にかからないようにするため？ついでに大人になってからも、より重症の成人バージョンのおたふく風邪にかからないように？でも、このワクチンが成人バージョンのおたふく風邪まで予防してくれるなんていう証拠は、まったくありません。そんな研究もされていなければ、勿論そんな証明なんて、1回もされたことがないのです！

メンデルソンはワクチンの必要性について、どうしてもと言うなら子供時代におたふく風邪にかからなかったため、自然な免疫を付けられなかった男子にのみ、思春期にさしかかった時に接種するだけにしておくべきだと述べています。

しかしワクチン接種においては、理性はほとんど通じませんから、とりあえず「さあ、みんな並んで～！」という具合です。女の子も、男の子も。

=====
三日はしか

この病気はほとんどの場合、前の2つよりもさらに軽度の病気で、症状としては発熱、湿疹、そして喉の痛みがあります。

三日はしかをMMR (Rは三日はしか=Rubellaの頭文字) 3種ワクチンに加えるために使われた宣伝文句

は、妊娠4ヶ月以内の期間に母親がこの病気にかかると、わずかながら胎児に影響する恐れがある、というものでした。しかし、このワクチン接種を受けるのは子供達ですし、子供は妊娠なんてしませんよね？それにどんな「免疫」も、この子供達が大人になるよりずっと前に、効果が消えてしまうはずです。生産者側もこれは認めざるを得ませんが、「しかし 母親に移さないように、まず子供達が感染しないようにするべきだ」という訳です。まあ、そう出来たら良いのですが、しかしこのワクチンの副作用には酷いものがあります。

関節炎
多発神経炎
しびれ

さらに、母親達にとって一番酷いのは、自分が幼児時代にワクチン接種を受けたせいで自然な免疫を付けることが出来ず、その結果胎児が母体から自然な免疫を受け継ぐことが出来なくなってしまったという事実です。

つまり、こういう流れです。ワクチンなどなかった時代には、三日はしかは子供のかかるごく軽い、心配のない病気で、子供達はこの病気にかかると一生ものの免疫をつけることが出来ました。大人になって妊娠しても、自分も胎児も安心です。

それが1960年代、当時の人口の85%が自然な免疫をつけていたとされる時代に三日はしかワクチンが導入されました。([222] p 240)しかしこのワクチンは子供時代の感染を避けることが出来ても、成人時代の感染は予防できず、ゆえに女性にとってはより心配な病気になってしまいました。ワクチンのせいで、妊娠中の女性が三日はしかにかかる危険性が以前よりも大きくなってしまったのです。

モスコウィッツは、三日はしかや水疱瘡、麻疹といった子供時代の軽い病気が、ワクチンの導入のせいでそれぞれ新型の、より重症な成人期の病気に変化してしまったと指摘しています。[192]こうした成人型の病気は、症状が複雑化したり、死亡する危険がずっと大きいものです。

=====
ヒブワクチン
髄膜炎 (HiB)

現代では、この髄膜炎ワクチン (HiB) は生後2ヶ月、4ヶ月、6ヶ月、そして12ヶ月と定期的に乳児に接種されています。

病名 (Hemophilis Influenzae Type B Meningitis) にはインフルエンザという言葉が含まれていますが、インフルエンザや風邪のワクチン接種とはまったく無関係のワクチンです。

しかし、この名前のせいでインフルエンザとこのHiBワクチンを取り間違えてしまう人は非常に多く、小児科医でもよくある話です。ためしにお医者さんにクイズで出してみると、面白いかも知れません。

最初の2語、Hemophilis Influenzaeのバクテリアはもともと、インフルエンザに感染した人の体内にあると考えられていたため、このような病名が付けられたのですが、その後の研究で、普通の人の粘液膜にあることが発見され、それでも名前だけは変わらないで残ったのです。

Hemophilis Influenzaeとは、子供の鼻や喉の軽い感染症の数々に伴って起きるものです。

(Neustadter, p161) [211] しかしごく稀に、その一種であるHemophilis Influenzae のB型ウイルスが、髄膜炎にかかった人（通常は子供）の体内に見られることがあります。実はこうした件が1960年代以降増え続けていて、多くの研究者が 子供達のワクチン接種の実施が増えたことに原因があると主張しています。では、そうした患者にどんな対処をしているかという、なんともう1度ワクチン接種を受けさせているのです！

Hibワクチンに関する初期的な研究は、フィンランドで行なわれました。10万件の実験の結果、HiBは18ヶ月未満の幼児には全く効果がないことが判明しています。(Peltola Pediatrics vol. 60, 1977) [248] しかしアメリカの子供達は、生後18ヶ月に至るまでにすでに3回もこのワクチンを接種しなくてはいけないのです！ちなみに生後24ヶ月未満の子供に関しては、効果は「不明」となっています。

1986年、New England Journal of Medicine誌が、HiB病の患者55件の研究を発表しました。該当する患者は、全員がHiBワクチンを接種した人です。この内、39人は髄膜炎を疾患し、3人が死亡しています。その他6人は聴覚機能を失いました。(Granoff) [249]

1988年にはノルウェイで17万1千件の大規模な研究調査が行なわれ、その結果「ワクチンの効果は、その接種プログラムを一般市民に対して制度化するには不適當である」とされています。(Bjune) [308] その後HiB髄膜炎の疾患者は、1988年度の300人から1991年度には200人にまで減少しました。ワクチン接種の義務化がされなかった結果、ひとりで減っていったのです。

Hibワクチンの初版はPRPというワクチンでしたが、その効果は思わしくなく、いつものように生身の一般市民に実験接種を行なってみたところ、すでに1988年には病気の予防どころか、病気の原因になってしまっている件のほうが多いということが判明しています。(Osterholm) [318] つまり、通常なら自然に治ってしまうはずの軽いH. Ifluenzaeウイルスに喉や鼻が感染した子供達が、以前ワクチン接種を受けたせいで体の免疫機能が抑制されているために、そのウイルスが神経機能のより奥の部分にまで侵入するのを防げず、こうして侵入したウイルスが髄膜（骨髄の線状部）で繁殖するのです。このPRPワクチンは、何千人もの子供達に実験的接種を行なった後、やがて廃止に至りました。

そして1990年には接合型のHiBワクチンが登場します。これは、ワクチンが蛋白性物質に結合している状態のものです。この接合型ワクチンは 発熱や泣き出し、発作など様々な副作用をもたらしました。さらにこの接合型ワクチンでは「免疫反応があまり活性化させられず、長期間の効果は望めない」ということです。(Ward) [250] ワクチンを何かに接合すると、それに対する免疫反応はまるで全く違う病気のワクチンと言えるほどに異なるものになってしまうのです。

こうした短期性のワクチンは、ワクチン業者の売れ筋1番の定番商品ですが、人工的な免疫であるゆえに効果は一時的で、それゆえに再接種を必要とし、深刻な副作用反応を伴うものです。しかし、FDAの許可をもらうためには「この3つが必要条件になっているのか」と思うくらい、次々と認可されています。

HiBワクチンの副作用反応の中でも、乳児の糖尿病は様々な研究で立証されている副作用です。以下に、3つの例を挙げてみました。太字になっている年号は、HiBワクチン接種が始まった年です。

場所	年	乳児の糖尿病（10万件単位）
フィンランド	1966-75	12
	1981	16
	1984	19

1988 26

1991 29

資料： Inf Dis in Clin Pract vol 6 1997 p.449

ピッツバーグ 1975-84 6

1985-94 13

資料： Diabetes Care vol 21 1998 p.1278 [313]

イギリス 1992-93 14

1994 22

資料： Big Med J 1997 p.713 [312]

ここで挙げている糖尿病患者とは、驚くことに4歳未満の赤ちゃん達です。赤ちゃんの糖尿病なんて、1960年代以前には聞いたこともない現象でしたが…。1960年代から1980年代の間には、ワクチン接種は2倍にも増えています。

HiBワクチンには又、アルミニウムや水銀といった毒性物質が含まれていました。これらの害については、前に述べたとおりです。

H. Influenzaeも他のワクチンと同様、実験モルモットとして使われるのはいつも決まって一私達の子供達です。2006年からの予防接種表において、何の理由もなしに接種が4回から3回に減ったり、2007年に又4回に増えているのには誰も気付かなかったようですが、これも科学的な理由などではなく、政治の都合によって変わっただけのことです

インフルエンザのワクチン接種

インフルエンザ予防接種

これは先ほどのH. Influenzaeワクチンとは全く無関係の、インフルエンザワクチンのことですが、これは比較的新しく開発されたもので、儲けもかなり大きなワクチンです。

インフルエンザワクチンに関する誤った情報や政治的な裏工作がいかにも世間に溢れているかは、ほんの少し調べてみればすぐに分かることでしょう。

インフルエンザとは、たった1つの季節の間に感染者の間で常にバージョンUPし続けることが出来るウイルスです。ワクチンのほうには、病気の原因となるウイルスの何バージョン目かを薄めたものが含まれているとのことですが、インフルエンザにおいてはあるバージョンのウイルスを取り分けて、ワクチンの製造作業を終え、民衆の手に渡る段階に至る頃には、もうすでにそのワクチンでは全然対応出来ない型にバージョンUPしてしまっているのです！インフルエンザワクチンの製造業者であるAventis社のMD、マイケル デッカーさえも「ある型をつきとめる頃には、すでにそれに対して何の対処も不可能になってしまっている」と認めています。[75]

ウイルスに感染した人の症状が重いほど、あるいは感染者数が多いほど、それだけウイルスの繁殖速度は速くなります。このような現象を、科学者は遺伝子増幅と呼んでいます。

(Garret, pp578, 580, 614) [223]

さらに、インフルエンザウイルスは、感染者の1人1人によっても、地域によってもそれぞれ変化します。それなのにワクチンの方は、みんな一緒に たった1種類の同じワクチンを接種するのです。とすれば…自然につけた免疫は、一生続くものですが、このワクチンだって本当に効果のあるものなら、来年また接種をする必要は無いはずですよね？

インフルエンザ接種が効かない理由

皆さんは、インフルエンザ接種をいつも受けている人達に限って、毎回インフルエンザに感染しているということに気付いたことはありませんか？これは おそらく、ひっきりなしに接種を続けているせいで体が息をつく暇もなく、自分の体内で免疫機能を定着させる余裕もないのでしょう。

インフルエンザワクチンの第一の問題点は、製造過程でいまだに水銀が使われていることです。(PDR, 2007 p. 1451) [240]また、ホルムアルデヒドやエチレン グリコール (暖房機に使われる液体) も含まれています。[240]また、2007年まではアルミニウムも入っていましたし、前も述べたように、こうした在庫は捨てられることなくちゃんと残っているのです。

こんなに有毒物質が入っているのですから、このワクチンがインフルエンザを予防することが出来ないのも無理がありません。CDCさえも、インフルエンザ接種の「成功率」をわずか44%としているくらいです。[1]もちろん実際には、この成功率はもっと低くなります。CDCがこの成功率の裏づけとしている「研究」がどんなものか詳しくみていくと、それが何の医学的な試験も、効果やリスク面の実験もされていないことが明らかになります。唯一行なわれる「実験」は、これぞと思われるワクチンを選んで、それを実際に一般の人々に接種し、その上で証拠もない、年齢別、性別、人種別などに細かく分類してつかみどころのないデータを編集し結論をでっち上げているのです。

こうした状況に落胆するのは私達だけではありません。イギリスの薬学誌のトップであるBritish Medical Journal誌は、インフルエンザワクチンについて次のように報道しています。[64]

「…徹底した調査結果の数々から、このインフルエンザワクチンの効果がごくわずか、あるいは皆無であることが分かっている… このワクチンに関する研究には、きちんとした専門的な内容が欠けており、製造側の圧力の影響も大きい。これらのワクチンの安全性に関しての調査結果は、信用できるものがほとんど無い。」

このような科学的な方針の廃れもひどいですが、インフルエンザワクチンの開発、製造においての様々な汚職、腐敗も目に余ります。例えば、世界有数のインフルエンザワクチン製造社の1つ、ベルギーのSolvay Pharmaceuticals社は2008年10月、GA州マリエッタに新しく予定していたインフルエンザワクチン工場の建設を中止しましたが、当社はすでにアメリカ政府から工場建設の人件費の60%を援助され、更には予定の2年も前なのにインフルエンザワクチンの開発費として300百万ドルを受け取った後だったのです！[2]開発中止の理由としてSolvay社は、インフルエンザワクチンの市場が「不安定で減少ぎみである」としています。つまりこれは、インフルエンザ接種を受けた人が次々とインフルエンザに感染しているのを目の当たりにして、人々が次第にインフルエンザワクチンの効果に疑問を持ちはじめたという事実を反映しているのでしょう。

売れ残ったインフルエンザワクチンの数は、以下の通りです。

2006年 121,000,000回分の内、18,000,000回分

2007年 140,000,000回分の内、27,000,000回分

こんな売上表を見ては、会社もやる気をなくしてしまったのでしょうか。Solvay社は、ビジネス会社であり、アメリカ国民の健康や幸せなんて関係なく、儲けのためだけに動いているのですから。インフルエンザワクチンを製造している会社は世界に5社しかなく、さらにSolvay社は、インフルエンザワクチンのみを製造する会社です。ワクチンを接種する側を危険にさらしても気はとがめないけれど、自社を危険にさらすのはやはり嫌だったのでしょう。

WHOとは何か？

WHOという機関の運営方針には、製薬業社の影響が常に関与しています。2006年にWHOは、世界各国が毎年自国の人口75%に配給できる分を目標としてインフルエンザワクチンを在庫するべきだという、馬鹿げた推奨宣言をしています。[2] 幸い、生産社側も売上げが確かだと分かっている分しかつくらないので、実際にはこれは無理な推奨なのですが…。

成人用のワクチン接種と、その宣伝策

ワクチン業者のこうした売上げの伸び悩みを受けてか、2008年に成人用のワクチン接種予定表が突然あらわれました。それによると、18歳以上の成人はなんと計45回ものインフルエンザワクチン接種を受けることになっているのです！[15] 宣伝部門は特にお年寄りに目をつけ、その結果現在のインフルエンザワクチン接種率の72%は、年配の人々です。[2]

この分だと、あの2005年のでっちあげ「カルフォルニア州ワクチン在庫不足」といった見え見えで失敗に終わった売上げ策がまた流行りそうです。

もう1つ、ワクチン業界で十八番になりつつセールス策は、「感染大流行」説です。この説は、本来はエヴィアン インフルエンザという架空の感染症 だけのためにとっておくはずでしたが、この病気は一昔前に恐怖の伝染病として騒がれた後、忘れられつつあるため、ワクチンセールス部門では、もっと一般の インフルエンザにもこの手を使おう、ということになったのです。

ということは、そろそろ映画でもこうした「感染症もの」が流行ることでしょうね？

インフルエンザ接種とアルツハイマー病

皆さんもお気づきかも知れませんが、アルツハイマー病は近頃どんどん身近な病気になりつつあります。免疫遺伝学の先端者であるMD. ヒューフーデ ンバーグは、2000年に850ページに渡る研究発表を出していますが、それをざっと読めば、どうしてこの病気がこんなに流行っているのかが伺えます。

「1970年から1980年の間に、続けて5回インフルエンザワクチンを接種した人がアルツハイマー病にかかる確率は、インフルエンザ接種を受けていない人の10倍にもなる」[327]

ひょっとして、アルミニウムがからんでいるのかも…ですね？

ちなみに新しい成人向けの接種予定表では、65歳になるまで毎年のインフルエンザ接種を推奨しています。

インフルエンザワクチンの勝利

インフルエンザワクチンは、20年間もの検討の結果、2002年1月にやっと義務制の接種予定表に仲間入りすることが出来ました。そして2005年2月7日には、いままでのハイリスク区分からこっそりと定番の接種予定表に移り込んでしまいました。その結果、現在ではまず生後6ヶ月に最初の接種、それからは18歳になるまで毎年の接種が義務付けられることになったのです。これで、アメリカの子供達が受けなくてはならないワクチン接種の回数は、一気に40回から58回にも増えてしまいました。

もちろん、これをニュースに取り上げたメディアなどありませんでしたが。

A型肝炎

2002年1月、GlaxoSmithKline社の長年の裏工作がようやく実を結び、同社の新種のA型ワクチンが接種指定の予定表に組み込まれました。これについても、一般民衆に公の知らせはありませんでした。[304]このワクチンの名はHavrixとって、2007年版PDRの1456 ページ目に掲載されています。[251]

A型肝炎とは何か？

この病気は、急性のウイルス性肝臓病です。A型肝炎ウイルス(HAV)は、すでに隔離されたことになっています。[284]

では、この病気はどれ程深刻なものなのでしょうか？

A型肝炎というのは、軽度の、症状も穏やかな感染症で、治療しなくても4~8週間で自然に治ってしまいます。大抵の場合、感染しても症状が出ないため、感染に気付かないまま終わってしまうものです。(Merck p. 377)

大抵の場合、A型肝炎には何の治療も必要ありません。国立健康機関のNIHでさえ、「A型肝炎にかかった人の殆どが2,3週間以内に自然に回復する」と述べています。

[168] NIH Manual

またA型肝炎の感染の殆どは、アメリカ国内ではなく、第三世界で起こっています。それなのに、なぜアメリカだけが集団接種を大規模に推奨し、自国の子供達に4回もの接種を強いているのでしょうか？

このワクチンが毎年何億ドルも儲かる商売だからだ、と思うのは私だけでしょうか？

A型肝炎の症状

Merckのマニュアルによれば、A型肝炎の主な症状は次の通りです。

食欲不振

NVD

じんましん

関節の痛み

濃い色の尿

これをみれば、まず命に問題の無いものだという事はすぐ分かるでしょう。黄疸が出る場合もありますが、通常これは病気が回復に向いているという印で、これらの症状が出る頃には、病気自体はすでに感染能力を失っているのです。

B型肝炎とは違い、A型肝炎は急性に発病したあと、完全に治癒するもので、慢性の肝臓病や肝硬炎につながることはありません。そして一回感染して 治ってしまえば、その人は一生続く免疫を手に入れることとなります。これが、本物の免疫です。

A型肝炎もまた、生活、衛生環境が悪い、人口過度の貧困地域におこる感染症であり、つまり第三世界特有の病気と言えます。薬物中毒者でさえ、ちゃんと食べてある程度の生活をしていれば、ハイリスクの区分に当てはまらないほどです。彼らはむしろ、B型肝炎の方が心配です。

もう一度まとめますが、A型肝炎はアメリカ合衆国では稀な病気なのです。

その他の原因

驚いたことに、B型肝炎ワクチンとC型肝炎ワクチンの両方が、A型肝炎を引き起こす原因となっています（！）この事実は、GlaxoSmithKlein社の製品、Harvixの注釈に「これら2つの肝炎ワクチンが原因で起きたA型肝炎に関しては治療効果がない」とちゃんと書かれています。では、HarvixというA型肝炎ワクチン自体も、肝炎の原因になるのでしょうか？実は、その通りで、この生産社自身が2007年度のPDRの1458ページに記載していることには、「Harvixの副作用の1つは、肝炎である」となっているのです！[251]

では、このワクチンは一体誰のためなのか？

2,3週間で自然に治ってしまい、しかもごく稀にしか起きない病気のために、すでに学校の子供達に接種指定されているワクチンに加えて、もう一種 類ワクチンを加える必要は本当にあったのでしょうか？

Harvixワクチンを接種指定表に追加する際、この新ワクチンの安全性の検査は行なわれたでしょうか？いいえ、全くされていません。このように 新たにワクチンのウイルス接種を追加することによる体への負担については、前に述べたとおりです。

次に、どのワクチンに関しても、その必要性を検討する際には「病気の実例」と「深刻さの程度」の2つの条件を考慮する必要があります。

実際の発病例

これも例によって、一癖ありの調査結果です。Harvix社は2002年度のPhysicians Desk Referenceに13年間に渡る調査結果を掲載していますが、それによると死亡率は0.6%ということになっています。(p1545) [251]つまりこれは、A型肝炎に感染した人1000人のうち、6人がこの病気が原因で死亡しているという意味です。

これを見ると死亡率がかなり高いように感じるでしょうが、実はこれはアメリカ国内の確率ではなく、世界全体での確率です。A型肝炎の感染例の大部分は第三世界においてのものですから、つまり

この死亡率も主に第三世界の人口が対象になっている訳です。こうした地域の感染者は、貧困、不衛生、栄養失調を抱えていて、常にこうした環境に悩まされている人々ですので、これはアメリカ合衆国の大部分とは全く異なる状態です。こうした手口は製薬会社の十八番で、「ある病気がいかに深刻で、アメリカ国内においてもワクチン接種が必要である」と政府を説得するために良く使われる方法です。

では、アメリカ国内における実際の発病例はというと、これは非常に調査が難しいものです。政府の調査表は、いつも決まっておく抽象的な判りにくい表ですが、例えば2000年度版の137ページ目にはこの様に記載されています。

1980——29.1 / 100,000 件
1998——23.2 / 100,000件 [169]

これを見ると、この20年間でA型肝炎の感染例は減っていることがわかります。これはワクチンのお陰なんかではありません。なぜなら、ワクチンはごく最近出たばかりですから。しかしそれにしてもやけに感染率が高いと思いませんか？そこでこの調査票を良く見てみると…虫眼鏡でしか見れない程小さな文字でこう書いてあるではありませんか！

「国外における感染例を含む」

あれ？国外における感染例を含む、ですって？それじゃあ意味が無いではありませんか。A型肝炎が貧困、不衛生、栄養不良から来る病気であり、大抵は国外での病気であるということくらい、みんな知っているんですから！ここでも又、国内でのワクチン接種の必要性を説くために、世界全体の感染例を取り入れてごまかしているのです。

ワクチンの実態

これはちょっと面白いですが、A型肝炎のワクチンは「感染した人間の結合組織の細胞」から作られています。冗談ではなく、本当の話で、しかも1人の人間ではなく1000人もの感染した提供者の細胞をまとめて、そこからワクチンを作り出しているのです。(Pediatrics) [284]これは、物凄く細胞パーティーですね？A型肝炎に感染すると必ず、細胞はA型肝炎ウイルスに汚染されるということになっていますから、汚染された細胞がここぞと集まってくるのです。

そしてこれをフィルターし、アルミニウムやホルムアルデヒド、フェノクセサノール（エチレン グリコールの科学名称）という凍結防止剤などで調整します。(PDR, p1456) [251]

A型肝炎 つづき

アルミニウムとホルムアルデヒドについて

ラッセル ブレイロック博士やセオ コルボーンが解説していますが、アルミニウムが人体にもたらす害は、決してアルツハイマー病だけではありません。アルミニウムは、あらゆる神経組織の細胞の結合や成長を妨害し、しかもその攻撃態勢は自由自在で予想が不可能です。(Excitotoxins, Our Stolen Future) [262, 212]つまり、被害状況は未知の領域なのです。

またホルムアルデヒドに関して言えば、発ガン性であるということ自体、新生児の純粋な血液に加え

るにしてはあまりにも危険なものです。癌は、最初 はたった1つの細胞から始まります。では、残留したホルムアルデヒドや凍結防止剤が、ある細胞が変化して癌を引き起こす原因にならない、ということを実証 する研究調査がどこにあるのでしょうか？どこにも、そんなものはありません。[16]

未調査のウイルス媒体をばらまく、という行為

要するに、キーポイントとなる疑問は、こうです。「アメリカ国内では殆ど見られず、しかも消滅しつつある病気を予防できる、という仮説を真に受け て、国内のすべての子供達にこの感染性ウイルスを注入することは、本当に必要な行為だったのだろうか？」「しかもこの病気は軽い病気で、慢性の肝臓病を引き起こすこともなく、さらに万が一かかった場合にはその後一生続く免疫を手に入れることが出来るというのに、一体なんでこんなことをしているんだろう？」

宣伝 VS. 情報

国立健康機関 (NIH) は2000年にあるパンフレットを配布しましたが、それは2002年度の接種予定表にA型肝炎を追加することを、国民が受け入れやすくするためのものでした。「A型肝炎について知らないといけないこと」といった、何とも幼稚なタイトルがついたパンフレットでしたが、このタイトルからもNIHが国民の知能レベルをどれだけ低く見ているかが判るでしょう。．．．残念ながら、本当に低くなってしまっているのかも知れませんが。パンフレットの中身もこの調子で、小学生に手取り足取りするような押し付けがましい感じで書かれています。

その中の一文を挙げてみます。

「ワクチンは、あなたが健康な時にとると病気にかからないようにしてくれるお薬です。」

え、本当ですか？まず、ワクチンはお薬ではありませんし、人々が「とる」ものでもありません。次は、病気にかからないように、という点に関してです。ワクチンのせいで自分の子供達が致命的な障害を受け、一生身体が治らなくなってしまったという、何千人もの親に、実際にワクチンがどれだけ病気を防いでくれるのか、聞いてみると良いでしょう。

こんな文もあります。

「ワクチンはあなたの身体に、A型肝炎ウイルスのような特定のウイルスと戦うことを教えてくれます。」

この間違っただけの信仰は、1797年にジェナーが宣言してからというものずっと信じられてきたものですが、もしこれが真実であったなら、過去35年間の天然痘、及びポリオ患者の全員がワクチン接種を受けた者である (Salk, Sabin) [288, 294]、といったことなど起きなかったはずですが。これは、言い訳の仕様の無い事実ですから。

ワクチンよりは、病気のほうが安心

病気そのものが軽症ですぐ治り、その上かかることによって一生の免疫が付くというなら、疾患率で示されているごく一部の人が病気になる方が良く、発がん性物質や神経中毒性の物質を一般の皆さんの血液にばらまくよりはよっぽどマシではないでしょうか？

まとめ

最後にもう一度、A型肝炎ワクチンの問題点をまとめて見ます。

アルミニウム

ホルムアルデヒド

エチレン グリコール

多様な副作用反応 (肝炎も含む)

摂取量は推測で決められている

A型肝炎の患者のほとんどはアメリカ合衆国外であるのに、

アメリカだけが唯一このワクチンを集団接種していること

子供達に感染性物質を集団接種という形で大規模にばらまいていること

すでに史上で最も多くワクチン接種を受けている子供達の身体に、さらにウイルスによる負担を負い被せること

以上の点で問題が無いというなら、やっても構いませんが。

B型肝炎

B型肝炎とは肝臓が炎症を起こすもので、おもに薬物中毒者にみられる病気です。大抵の患者は慢性の肝臓病にもならず、数ヶ月で自然に治癒します。肝炎のワクチンは最近開発されたばかりで、副作用に関する長期的な調査は一切されていません。それなのに1991年には、CDC及びAAP機関がB型肝炎ワクチンを全ての乳児向けに組みこんでしまいました。(p172 [211]) これは、一体どうしてでしょうか？

1991年以前には、B型肝炎ワクチンの対象はいわゆるハイリスク区分の人々—医療機関の関係者、薬物使用者、多数のセックスパートナーがいる 人、及びB型肝炎にかかったことのある人に限られていました。この病気が母親から胎児に感染することはありますが、母親が陰性の場合には、その人の赤ちゃんに多数のセックスパートナーがいたりその子が薬物中毒だったりなんてことはまずないでしょうから、ワクチンは必要ないですね？特に、生まれたての時期に 接種するなんて、なおさらの話です。

しかし、お金儲けがからんでくると、こうした常識はどこかへ吹っ飛んでしまいます。

実際の儲け額はと言うと、1993年以降、この新しい商品は毎年200万ドルもの売り上げをみせています。(Ganiats) [287]現在では、売り上げは1億ドルにも跳ね上がっています (!) [310]なんとなく、わかる気がしてきましたか？

では効能はどうかというと、このワクチンの長期的な研究調査は一切おこなされないまま、一般の人々にこのワクチン接種が義務付けられてしまったのです。(Neustaedter, p125) [211] 導入側でさえ、このワクチンのモニターが行なわれたのは市場に出回るたった5日前だったと述べている位ですから！(Dunbar) [175] 多くの研究者は、このワクチンの「免疫」効果は年月と共に弱まるとされ、ゆえに数回にわたる再接種が組み込まれるだろうと見ています。(Hall [254]) 大人の薬物中毒者がかかる病気の予防として、乳児にワクチン接種するなんて、そんな考えがどうして出来るのか本当に不思議なものです。

Merck社は1970年前半からB型肝炎ワクチンの製造を手がけていますが、実験の対象となっているのは

生きている猿と、そして今生きている人間、私達です。(p. 244) [256]一般的に「抑制剤」としてワクチンによく使われるホルムアルデヒドは、接種した人が肝炎にかからないようにB型肝炎ウイルスを薄めるという目的で使われています。少なくとも、目的はそういうことになっています。

この抑制剤の副作用が、発ガン性であることはすでに述べました。

けれど本当に怖いのは、この水銀たっぷりのB型肝炎ワクチンが、生まれたての命に与えられることになるかも知れないという事実です。EPAで「安全」とされている水銀の摂取量は1日1kgにつき千万分の1gですが、2004年度のB型肝炎ワクチンを1回接種すると、その30倍もの摂取量になってしまいます！

- FDA Hepatitis Control Report, vol.4, no.21. [293]

信じられない、と思った人は、大変結構です。参考資料をご自分で調べて見て下さい。

さて、副作用ですが、これも恐ろしいものです。Neustaedterは、1991年以前にワクチンを接種し、副作用反応がでた8万人の人々のケースについて、CDCが何も記述していないと指摘しています (p 175) [211] が、同時にB型肝炎ワクチンの副作用を証拠付ける研究のいくつかも挙げています。その副作用は、以下の通りです。

ビラン	バレー症	関節炎
脱髄性疾患		アナフィラキシー
自己免疫反応		ショック
脾臓の膨張		黄疸

このワクチンが無害であったならそんなにひどくもないのですが、でもこうした症状のパターンは、前に挙げたその他もろもろのワクチンの神経ダメージや自己免疫反応とそっくりの内容です。

さらに、1999年7月8日にはびっくりするニュースがありました。アメリカ医師連合が、危険な副作用があるという理由で、就学児のB型肝炎ワクチンの義務接種を即時に停止するよう呼びかけたのです。連合の取締役であるジェーン・オリエントMDによる議会への掲示文には、B型肝炎ワクチンによる副作用反応及び死亡率について、

「…ワクチンの安全性に関する正式な長期の実験調査は未完であるため、報告されている危険性は、実際の危険性よりも大幅に下回る」 [177]

「…大抵の子供にとって、ワクチンによる深刻な副作用反応のリスクは、B型肝炎によるリスクの100倍にもなる」と、述べています。

ここで、悪いお知らせです。1999年には、B型肝炎ワクチンによる深刻な副作用反応の報告件数が、実際にB型肝炎を疾患した件数を上回ってしまったのです！(Townsend Letter, Sep 2000, p 148) [170] この事実をじっくり考える際に、大抵の見解としてはワクチンの副作用反応の報告件数は実際に報告された件数が10%、未報告の件数が90%であるという点も忘れないで下さい。

フランスでは1万5千人の市民が政府を起訴した結果、B型肝炎ワクチンは1998年10月に学校の義務接種プログラムから姿を消しました。その際、理由は、B型肝炎ワクチン接種後に見られる「未報告の」神経障害及び自己免疫反応による障害とされています。(Belkin) [263]

B型肝炎ワクチンの応援団

2008年度のNew York Times誌には少なくとも6回、決まって健康部門の若手ライターがお決まりにこうしめくくる記事が載せられていましたーワクチンを受けていない子供達は、病気を地域に広めてしまうので危険だ、と。

ポップメディア学校の広報誌のお気に入りであるE. L. Bernayの宣伝必勝法をそっくり真似して、お決まりで最新のワクチン「研究結果」に触れてから証拠もまったくない憶測を結論として出すことで、メディアによる提言を作り上げてしまっているのです。

例えば良い例ですが、2008年10月1日のNYT誌には「研究により、B型肝炎とすい臓癌の関連性が発見される」という題で記事が書かれています。[5]

そもそも、この題じたいが誤報です。実際には何の研究もされておらず、記事のほうも何かの関連性を確認したりはしていないのですから。ただ、歴代のがん患者の比較データをなんともお粗末、大雑把に見ていく上で、がん患者のある1グループにおいて通常よりもB型肝炎疾患が多いことを見つけたというだけです。記事の筆者自身は、この2つの病気がどのように関連しているのか、その原因を明らかにすることは一切せず、ただ「注目すべきこと」として取り上げています。[6]つまり、B型肝炎がすい臓癌の原因となるかどうかの証拠は何も無く、これでは歯磨きをしないとすい臓癌になるぞ、と言ったって同じことです。この様な付け焼刃の、大雑把なデータ比較は、ちゃんとした研究と呼べるものではありませんし、単なる研究アイデアの1つに過ぎません。

こうして誤った情報を広めるテクニックは、現在ではNYT誌をはじめその他諸々で使われていますが、これは4段階から成り立っています。

1. 証拠の裏づけ無しに、ある事柄が何々と関連している、と提言する
2. それとは全く無関係のデータを使って、関連性の根拠とする
3. 明らかに、まったくでたらめな間違いを言う
4. 結局何の裏づけもなしに、結論を述べる

2008年10月1日に出された、この困惑だらけの記事は、次のような結論を述べています。

「慢性のB型肝炎は…、世界中ですい臓癌の主な原因となっている」

「…ワクチンの投与で感染を防ぐことが出来るし、癌も予防できる。しかし、ワクチンを接種していない人が肝炎に感染し慢性になった場合には、治療は不可能。ただし抗ウイルス性の薬で抑えることが出来るケースもある。」

まず、B型肝炎が慢性になることは、全体のたった5%にしかありません。[Merck p382]さらにここですい臓癌と関連付けされているのは慢性のB型肝炎であって、通常B型肝炎の90%をしめる、あの軽症ですぐ治るタイプの病気は問題になっていません。 ([7] Jay Marks, MD)

次に、前に明らかにしたように、B型肝炎ワクチンにはどんな感染症を予防する効力も証明されていません。癌を予防してくれる、と言っていますが、そんなワクチンはどこにも存在しません。もっと言えば、感染症を予防できるワクチン自体、存在しないのです！B型肝炎ワクチンの製造社さえ、ワクチ

ンが癌 予防になるとは決して言わないでしょう—これは、不可能なのですから。それなのにどうして、大手の報道誌の記者が、抜け抜けとこんな出鱈目な主張を提言出来るのでしょうか？

最後に、ワクチンを受けていない人がどんな病気に感染しても、その人が治る可能性は決して誰にも引けを取りません。ワクチンを受けないことが、その人の免疫機能を弱めることなどありえませんが、実はその逆で、ワクチンを受けた人の方こそ、感染症と闘う力が弱くなってしまっているのです。乳児の場合は、特にそうです。これは、実験的に薄められたウイルスの性質が、免疫機能の活動を抑えてしまうことと、有毒性の添加物が原因です。そして忘れてはいけないのは、一旦かかってしまった感染症の治療にワクチンを投与するなど、全くの間違いだと言うことです。こんな馬鹿げた主張をする科学者は、今にも昔にもさすがにいませんし、こんな恥ずかしい主張を報道しておいて何ともないのは、「健康部門」の記者くらいなものです。

NYT誌には倫理や責任のある報道をするつもりなど全くないので、ここ数年間ではあまり信憑性のないお騒がせ記事ばかりになってきていると世間でも言われていますし、何よりも製薬会社の宣伝誌に成り果ててしまっています。どの刊をとっても、製薬会社と仲良しなのが見え見えな広告記事が光っています。何かの中傷や当てつけといったこのビジネスにおいては、信憑性や事実チェックなどはすぐにゴミ箱行きですし、売り上げの物凄いプレッシャーを受けているため、編集者側もいかに諸々のワクチンを非現実的にきらびやかな物として売り出すかに頭をしぼり、科学的な根拠などはそっこのけです。

こんな背景の中ですから、NYT誌の2008年版のどのワクチン関連の記事をみても同じ様に駄目なものばかりです。読者側の思考力が次第に衰えているので、記者側もそれに応えているだけとも言えますが、どうせ出先でざっと拾い読みするくらいなのだから、そこでざっと目を惹いて印象に残る記事を作れば良いだけで、いちいち主張を裏付けたり、信頼できる内容にする必要はないだろうと考えているのです。

和訳はここまで

その他の関連情報

米国の医師・学者83名が署名した「ワクチンのすべて」日本語版リリース
<http://tamekiyo.com/documents/healthranger/VaccineReport-JPN.pdf>

International Medical Council on Vaccination (www.VaccinationCouncil.org) の制作した”Vaccines: Get the Full Story” というレポートを、Natural News (マイク・アダムス) がスクープ記事として取り上げています。9ヶ国語バージョンがありますが、日本語版がなかったため、IMCVに問い合わせ 翻訳許可をもらいました。渡辺亜矢さんと共同で翻訳しました。

それほど新しい内容はないかもしれませんが、とてもわかりやすく説得力ある内容になっていると思います。中絶胎児の細胞までワクチンの開発に利用しているとは知りませんでした。しかし、何よりもこの文書のすごいところは、署名の多さです。

ワクチン関連業界が絶対に読んでほしくない内容を、ぜひお読みください。

そして、周りの方にも情報を広めてください。（印刷に適したPDF版はこちら）

米国の医師・学者83名が署名 「ワクチンのすべて」

Vaccines: Get the Full Story

ワクチンに関する国際医学協議会

By International Medical Council on Vaccination

www.vaccinationcouncil.org

www.facebook.com/vaccinationcouncil

2011年2月1日

賛同者一覧

あなたと子供たちを守ることに賛同した医師、看護師、科学者たち

Nicola Antonucci, MD

Todd M. Elsner, DC

Alexander Kotok, MD, PhD

Maximo Sandin, PhD

David Ayoub, MD

Jorge Esteves, MD

Eneko Landaburu, MD

Len Saputo, MD

Nancy Turner Banks, MD

Edward "Ted" Fogarty, MD

Luc Lemaire, DC

Michael Schachter, MD

Timur Baruti, MD

Jack Forbush, DO

Janet Levatin, MD

Viera Scheibner, PhD

Danny Beard, DC

Milani Gabriele, CRNA, RN

Thomas Levy, MD, JD

Penelope Shar, MD

Francoise Berthoud, MD

Sheila Gibson, MD, BSc

Stephen L'Hommedieu, DC

Bruce Shelton, MD, MD(H)

Russell Blaylock, MD

Mike Godfrey, MBBS

Paul Maher, MD, MPH

Debbi Silverman, MD

Fred Bloem, MD

Isaac Golden, ND

Andrew Maniotis, PhD

Kenneth "KP" Stoller, MD

Laura Bridgman, FNP, ND

Gary Goldman, PhD
Steve Marini, PhD, DC
Terri Su, MD
Kelly Brogan, MD
Garry Gordon, MD, DO, MD(H)
Juan Manuel Martinez Mendez, MD
Didier Tarte, MD
Sarah Buckley, MD
Doug Graham, DC
Sue McIntosh, MD
Leigh Ann Tatnall, RN
Rashid Buttar, DO
Boyd Haley, PhD
Richard Moskowitz, MD
Adiel Tel - Oren, MD, DC
Harold Buttram, MD
Gayl Hamilton, MD
Sheri Nakken, RN, MA
Sherri Tenpenny, DO
Lisa Cantrell, RN
Linda Hegstrand, MD, PhD
Christiane Northrup, MD
Renee Tocco, DC
Lua Catala Ferrer, MD
James Howenstine, MD
Amber Passini, MD
Demetra Vagias, MD, ND
Jennifer Craig, PhD, BSN, MA
Suzanne Humphries, MD
Ronald Peters, MD, MPH
Franco Verzella, MD
Robert Davidson, MD, PhD
Belen Igual Diaz, MD
Jean Pilette, MD
Julian Whitaker, MD
Ana de Leo, MD
Philip Incao, MD
Pat Rattigan, ND
Ronald Whitmont, MD
Carlos de Quero Kops, MD
Joyce Johnson, ND
Zoltan Rona, MD, MSc
Betty Wood, MD
Carolyn Dean, MD, ND
A. Majid Katme, MBBCh, DPM
Chaim Rosenthal, MD

Eduardo Angel Yahbes, MD
Mayer Eisenstein, MD, JD, MPH
Tedd Koren, DC
Robert Rowen, MD

ここに署名いただいたのは、小児科医、ホームドクター（一般開業医）、脳外科医、病理学者、化学者、生物学者、免疫学者など、幅広い分野で活躍している方々です。いずれも、独自に本物の科学を追求した結果、この文書に記載されている結論に到達した方々です。MD、DO、MB、MBChという肩書きは、すべて医学博士であることを意味します。NDは、医学の教育を受けたことを意味し、一部の地域では医師免許を与えられています。FNP(ファミリー・ナース・プラクティショナー)は、一般医療を行う上級看護師を意味します。

どうして医者はいろんな病気の原因を発見できないのだろうかと思いに思ったことはありませんか？

それは医者が、病気とワクチンの関係を知ることがないように「条件付け」されているからです。以下は、ワクチンと関係があることが立証されている病気です。

- ・ アレルギーとアトピー性皮膚炎
- ・ 関節炎
- ・ ぜんそく
- ・ 自閉症
- ・ 乳幼児にプロトンポンプ阻害薬（さまざまな副作用あり）の投与が必要となる胃酸の逆流
- ・ ガン
- ・ 糖尿病（乳幼児、児童）
- ・ 腎臓の病気
- ・ 流産
- ・ さまざまな神経疾患と自己免疫疾患
- ・ 乳幼児突然死症候群(SIDS)
- ・ 他にも、まだまだあります。

以下は、ワクチンの副作用として知られているもので、医学で立証済みであり、一部は医薬品の添付文書に記載されています。

- ・ 関節炎、出血性障害、血液凝固、心臓発作、敗血症
- ・ 耳感染
- ・ 失神（骨折を伴うものあり）
- ・ 透析療法を必要とする腎機能障害
- ・ 発作・てんかん
- ・ じんましん、アナフィラキシー（過敏症）など重症のアレルギー反応
- ・ 突然死
- ・ 入院を要すると診断される多くの症状
- ・ 米国ワクチン被害補償制度(NVICP)は、ワクチンの被害を受けた子供・成人の損害に12億ドル以上を給付しました。

自閉症はワクチンと関係がある

- ・ B型肝炎ワクチンとHiB（髄膜炎）ワクチンが導入され、大規模なワクチン接種計画が加速した

1991年までは、自閉症は稀でした。子供にこうしたワクチンを接種した直後に自閉症が現れたことを証言できる親が何万人もいます。

・ ウェブサイト <http://www.fourteenstudies.org/> で情報を知ってください。自閉症とワクチンの関連性を否定する研究は、極めて疑わしいことがわかってもらえるでしょう。

製薬会社、保険会社、医療体制は、あなたの病気で豊かになる

・ ワクチンは生涯にわたって免疫を付与するわけではないため、追加接種が推奨されています。
・ 追加接種をするたびに、副作用のリスクが高くなります。
・ ワクチンの副作用により、あなたは残りの人生を病気で過ごすことになりかねません。都合の良いことに、ワクチンの副作用を治療する薬が多く存在します。

・ 米国では、ワクチンで何か悪いことが起きても、製薬会社や医師を訴えることはできません。いずれも「1986年・児童ワクチン被害法」で保護されています。当時のロナルド・レーガン大統領が署名・発効したこの法律では、「ワクチンのメーカーは、ワクチンに関連する傷害や死亡から発生した損害の補償を求める民事訴訟において、法的な責任を負うことはない」（一般法律99-660）と定められています。

医者など医療従事者の多くはワクチンを接種しておらず、自分の子供にもワクチンを接種していませんが、それは何故でしょうか？

・ ワクチンの安全性や効果が証明されていないことを知っているからです。

・ ワクチンには、危険な物質が含まれていることを知っているからです。
・ ワクチンが健康上の深刻な問題をひきおこすことを知っているからです。
・ ワクチンで深刻な副作用を受けた患者を治療した経験があるからです。

健康で利益を得るのは、あなた自身とあなたの大切な人たちだけ

・ 製薬会社は、医学部、医学情報誌、病院、診療所、地元の薬局など、医療体制全般に浸透し、支配力を確保しています。こうして医者は、ワクチンについていかなる疑念も抱くことなく盲信することで生計をたてています。医者は、ワクチンの被害の明確な実例を目の当たりにしていながら、その原因がワクチンだと考えようとしないのが通常です。金権腐敗していない科学・医学では、ワクチン拒否を支持していますが、それは地位も仕事も失う自殺行為であると思われています。この文書に署名した人々は、あなたと子供の安全のために、勇敢にもそのリスクを冒しているのです。

・ 病院は、入院と検査で金銭的な利益を得ています。
・ 製薬会社は、ワクチンで何十億ドル（何千億円）も儲けています。
・ 製薬会社は、ワクチンにより発生した副作用と生涯残る病気の治療薬で、何百億ドル（何兆円）も儲けています。

・ ワクチンは、医療体制の大黒柱です。ワクチンがなければ、社会全体が健康になり、医療コストは下がるでしょう。私たちは、水疱瘡の代わりに自閉症を、インフルエンザの代わりにぜんそくを、耳感染の代わりに糖尿病を手に入れました。まだまだ他にもたくさんあります。比較的良性的なそれほど種類も多くない病原菌を撲滅しようと夢中になった末に、私たちは、一過性の病気の代わりに、生涯続く病気・機能障害を手に入れてしまいました。

ワクチンは何種類あるのか？

・ 米国の子供がすべてのワクチンを受けると、最大35回の接種を行うことになります。それには113種類の病原粒子、59種類の化学物質、4種類の動物細胞・DNA、中絶胎児の細胞から取り出した人間のDNA、人アルブミンが含まれています。

・ あなたの子供はもう大きいので、ワクチンの心配をすることは無いと思っておられるなら、考え直して下さい。少なくとも20種類のワクチンが、今後数年内に提供される予定で現在開発の途上にあります。その多くは、青年層や成人を標的にしています。

ワクチンの成分の紹介：これでもワクチンは身体に有害でないのでしょうか？

- ・ ワクチンの材料である動物細胞の培養で生じた細菌や野生のウイルス。
- ・ 水銀は、神経毒であることが十分に立証されていますが、依然として世界中のインフルエンザ・ワクチン（複数回接種タイプ）に入っています。その他のワクチンにも、微量の水銀が残留しているものがあります。
- ・ アルミニウム。骨、骨髄、脳の変性を起こす可能性のある毒です。
- ・ 猿、犬の腎臓、鶏、牛、人間の細胞。
- ・ ホルムアルデヒド（防腐液）。発ガン性物質として知られています。
- ・ ポリソルベート80。メスのネズミで不妊症、オスのネズミで睾丸の萎縮をひきおこすことがわかっています。
- ・ 豚や牛のゼラチン。アナフィラキシー反応を起こすことがわかっています。3種混合ワクチン（はしか、おたふく風邪、風疹）、水疱瘡と帯状疱疹のワクチンに大量に入っています。
- ・ グルタミン酸ナトリウム（MSG）。吸引タイプのインフルエンザ・ワクチンに入っています。代謝異常（糖尿病）、発作、その他の神経障害をひきおこすことがわかっています。

利害の衝突

・ ワクチンに関する法律や政府勧告を作成する立場の人々が、ワクチンの売上から利益を得ています。たとえば、ジュリー・ガーバーディング博士は8年間CDC（疾病予防管理センター）長官を務め、現在はメルク社ワクチン事業部の社長となっています。ポール・オフィット博士はACIP（ワクチン接種に関する諮問委員会）のメンバーですが、自らワクチンを開発し、特許を保持しています。

・ CDCによれば、米国の平均的な規模の小児科医院（医師10名体制）は、10万ドル相当以上のワクチンを在庫に抱え、売ろうとしています。これらの医師は外来診療、子供たちへのワクチン接種、さらにその後の反応をみる再診で儲けています。

・ 報道によれば、米国の小児科医は、患者へのワクチン接種率を高く維持することでHMO（保険維持機構）から年4回ボーナスを受け取っており、接種率が下がると保険会社から叱責されるそうです。ワクチン接種／未接種の子供の相違を比較した研究はあるのでしょうか？

自閉症の研究・治療団体ジェネレーション・レスキューは、カリフォルニア州とオレゴン州で、子供を持つ親を対象に、ワクチン接種／未接種を比較する調査を行ないました。対象となった子供の数は17,674名で、結果は以下の通りです。

- ・ ワクチンを接種した子供のぜんそく罹患率は120%増
- ・ ワクチンを接種した男児のADHD罹患率は317%増
- ・ ワクチンを接種した男児の神経疾患罹患率は185%増
- ・ ワクチンを接種した男児の自閉症罹患率は146%増

女兒は調査対象のうちわずか20%でした。調査結果の詳細は <http://www.generationrescue.org/pdf/survey.pdf> でご確認いただけます。ワクチン接種をしていないアーミッシュ（訳注：米国のドイツ系移民からなる宗教集団。移民当時の生活様式を保持し、ワクチン接種をしないことで知られる。）の子供の自閉症罹患率が低いという報告は <http://www.vaccinationcouncil.org/quick-compare-2/> にあります。自閉症に関するその他の研究については <http://childhealthsafety.wordpress.com/2009/06/03/japvaxautism/> や <http://childhealthsafety.wordpress.com/2010/02/08/britvaxautism/> をご覧ください。米国でワクチン接種を拒否するには

- あなたにもワクチン接種を拒否する権利があります。行使しましょう。
- 公立学校の通学にワクチン接種は必須ではありません。
- すべての州で望まないワクチン接種の拒否権を行使できます。 <http://exemptmychild.com/10752>
- ワクチン接種をしないという選択を認め、尊重する医療機関を以下のサイトで見つけましょう。 <http://www.vaccinationcouncil.org/providers.pdf>
多くの人が健康と安全のためワクチンを拒否しています
- ホリスティック療法士、カイロプラクター、子供を学校に通わせず家で教育する親、特定の信仰を持つ人など、一般的にワクチンを接種しない人。
- ワクチンを接種しない子供が健康であるという親の証言は、インターネット上に何千件と見られます。
- ワクチン接種をするかしないかは、あなたと配偶者／パートナーが決めることです。他の誰も知る必要はありません。他の家族も、近所の人も、親戚も無関係です。
いきいきと健康であるためには、率先して新しいことを学ぶ必要があります
- 安全な選択は、ワクチン接種をしないことです。あなた自身や子供たちの健康をコントロールできるからです。ワクチン接種によって何が起きるか、あなたにはコントロールできません。
- 身長・体重を測ったり、注射を打つだけなら、小児科医は必要ありません。自然療法師、小児向けカイロプラクター、東洋医学師、ホメオパシー医にかかることも考えてみましょう。かかりつけが整骨医ならば、ワクチンを接種しないことにより理解があるかもしれません。
- 赤ちゃんは強力な防衛機能を持って生まれてきます。そうでなければ、生まれてすぐ死んでしまうでしょう。膨大かつ複雑な免疫作用が、産声をあげた瞬間から働いています。この免疫は有毒物質の注射によって阻まれることなく、自然に発動されるべきなのです。
- 「ワクチンで予防できる病気」について学びましょう。子供たちが感染するおそれがあるものはほとんどありませんし、かかったとしても、健康でワクチンを接種していない子は、長期にわたる免疫によって、ほぼ全員が無事に回復します。健康は注射針からもたらされるものではありません。
- 発熱の重要性について学びましょう。家庭でどのようにケアするか、どんな場合に医師の助けが必要かを知りましょう。ほとんどの熱は、適切なケアをすれば2～3時間で自然にさがりま

す。 <http://www.drtenpenny.com/fever.aspx>

- ・ ワクチンを接種しても、その病気にかかる可能性があることを理解しましょう。ワクチンは、期待される予防力を発揮しないかもしれないのです。健康は注射針からもたらされるものではありません。
- ・ 健康のために重要なのは、適切な栄養、良質な水、十分な睡眠、運動の習慣と心の充足であることを知りましょう。
- ・ ビタミンの基礎知識を学びましょう。特に、ビタミンD3は重要です。基本的なハーブやホメオパシーを使って健康を維持したり、ちょっとした病気に対処する方法を学びましょう。
- ・ 医師よりワクチンに詳しくなりましょう。おそらく医師は、製薬会社やCDCの後援を受けたワクチンを推奨する書籍しか読んでいません。
- ・ 健康のケアにこそお金をかける価値があることを知りましょう（病気のケアには保険がききます。薬やワクチンの代金は保険が払ってくれます）。
- ・ だから、健康に投資しましょう。体が資本です。

以上 Web転載記事

作成日：2017年3月9日（木）